平成３０年度博士学位申請論文

上代日本語におけるク語法の研究

向井　克年

まえがき

本研究は上代日本語におけるク語法についての研究である。ク語法は取り分け『万葉集』の中で多く見られ、活用語に接続し名詞句を形成するものである。名詞句形成には他に準体句と連体句があるが、このうちク語法のみは中古以降に和文の中では衰退しいく。従って、ク語法は日本語の中でも上代語に特有の言語形式であると言える。しかし、上代日本語においてク語法が他の準体句や連体句などの名詞句形成形式と互いにどのような関係をもって共存していたのかその実態はよく理解されていない。

その中で、ク語法研究の歴史は接続の関係や語義に関する形態論的な問題から始まった。接続に関してはク語法に前接する活用語の活用形が未然形、終止形、連体形など様々な説が提示されており、それに関連してク語法を「ku」「raku」「aku」など、どのような形態素として認定するのかが大きな問題となっている。現在、一般には大野（1952）による「aku」説が有力とされるが、この「aku」説にも例外が見られることから完全な定説に至っているとは言えない。また、語義に関しても「アクガル」の「アク」とする説や朝鮮語の「Kot」からの借用とする説などあるが、いずれも確例に乏しく憶測の域を出ない。

一方で、意味論的な観点からも議論され、準体句と連体句を含めた日本語の名詞句形成形式の変遷における一存在として位置付けられることになる。そこでは、ク語法が特定の文環境に依存して生起することなどが指摘され、ク語法を準体句や連体句とは異なる意味・機能を有する名詞句としてみることの可能性が示唆されてきた。本研究の方向性も基本的にはこのような見方の延長にあると言ってよい。すなわち、ク語法をその意味・機能において他の名詞句からは特立したものとする観点である。

では、そのク語法において他の名詞句から特立される意味・機能とは何かというと、それを本論では「可能世界」という語で表現している。可能世界は本研究における最も重要なタームである。可能世界とは、話者の主観に根差した認識であり、それを表す言語形式がク語法である。それが、種々の文（歌）の中で用いられることで想像・仮定・確信・感慨など様々な認識態度を表すことになる。このように、可能世界の表す領域は存外に広く雑多とも言える。しかし、このようなタームを用いることで準体句や連体句などの他の名詞句形成形式との相対的な位置関係が定位できると考える。つまり、ク語法に可能世界という観点を想定することは上代日本語の名詞句形成形式の体系を再構築する上で必要な作業仮説なのである。換言すれば、本研究の主題は同じ名詞句形成形式でありながらク語法のみが他と異なる振る舞いをすることの原理的な説明を目指すということである。

本論の構成は以下の通りである。

まず、**【序章　ク語法研究の課題と可能性】**はク語法研究が特に意味論的観点において従来どのように進められてきたのかを概観する。その上で、そこにどのような課題が残されているかを述べる。さらに、ク語法が特定の文環境に特徴的に生起することを例示し、準体句や連体句など他の名詞句からは特立される必要があることを述べる。

【第１章　ク語法が動詞述語「見ル」「思フ」の目的格になる場合】は、従来論で特に問題にされてきた動詞述語「見ル」「思フ」の目的格に用例を改めて考察する。そして、主に準体句との比較において、ク語法が表す事態の性質が準体句とは異なることを述べる。

【第２章　ク語法と願望表現「欲ル」「欲シ」】は、願望を表す述語「欲ル」「欲シ」の対象にク語法がくる場合とこない場合の比較をしている。本章は第１章の延長にあたる章で、第１章で述べたク語法にみられる特徴は願望表現においてさらに顕著に観察されることを述べる。また、中古日本語との接続をみる上でも興味深い事例があることを述べる。

【第３章　ク語法形容詞＋「ニ」と準体句形容詞＋「ニ」】は、形容詞がク語法となって助詞の「ニ」を後接する場合と、同じく、形容詞が準体句となって助詞の「ニ」を後接する場合を比較している。当該の形式には従来、ク語法に一定の傾向があることが指摘されている。本章ではその指摘をさらに押し進めて、準体句とは決定的に異なることを述べる。

【第４章　助動詞「ケリ」のク語法について】は、ク語法内部にモーダルな意味を表す助動詞が接続することがないことを確認した上で、その中で例外的となり得る助動詞「ケリ」が接続した例について考察する。そして、この「ケリ」がモーダルな意味を表すものではないということと、ク語法がモーダルな意味を表す助動詞を接続させない理由について述べる。

最後に、**【統語】**で本論文についてまとめ併せて今後の課題についても述べる。

凡例

例文について

・ルビの省略など、表記を私意に改めた箇所がある。

・例文の下線は稿者が付け加えたものである。

・例文の中にある〈　〉内の表記は原文の表記を示すものである。

・例文の後にある（　）内の数字は特にことわりがない限り『万葉集』における巻番号と歌番号である。その他の場合は筆者名と発表年と頁数である。

・＊　非文法的、または該当の形式なし。

・？　文法的に不自然。

・＃　語用論的に不自然。

目次

まえがき　iii
凡例　v

序論　ク語法研究の課題と可能性　1

１．　はじめに　1
２．　意味論としての名詞句　1
３．　研究の課題　3
４．　ク語法、準体句、連体句の相違点　3
　４．１．　能格性　4
　４．２．　存在表現の主語になれるか　4
５．　ク語法の特立性　6
　５．１．　助動詞「ズ」「ム」の接続　6
　５．２．　思惟動詞「思フ」の目的語　9
６．　可能世界　１１
７．　まとめ　１２

第１章　ク語法が動詞述語「思フ」「見ル」の目的格になる場合　１５

１．　はじめに　１５
２．　考察対象　１６
３．　ク語法、準体句が「見ル」の目的格となる場合　１８
４．　ク語法、準体句が「思フ」の目的格となる場合　２１
５．　考察　- ク語法の表す可能世界 -　２４
６．　まとめ　２６

第２章　ク語法と願望表現「欲ル・欲シ」　３０

１．　はじめに　３０

２．　考察対象　３１
３．　「見ル」類の意味分類　３２
４．　同種の意味間における相違点　３３
　４．１．　「逢瀬」　３４
　４．２．　「視認」　３７
　３．３．　「眺望」　３８
５．　その他の対象語彙　４０
６．　助動詞「ム」の接続　４２
７．　考察　４３
　７．１．　差異の有無　４３
　７．２．　第１章との関連　４５
８．　まとめ　４７

第３章　ク語法形容詞＋「ニ」と準体句形容詞＋「ニ」　４８

１．　はじめに　４８
２．　先行研究と考察対象　４９
３．　ク語法形容詞＋「ニ」　５１
４．　準体句形容詞＋「ニ」　５２
　４．１．　「繁シ」以外の１２例　５３
　４．２．　「繁シ」の１１例　５５
５．　「暑けくに」の例　５６
６．　考察　５９
７．　おわりに　６０

第４章　助動詞「ケリ」のク語法について　６２

１．　はじめに　６２
２．　表記の観点から　６２
３．　動詞のアスペクト性の観点から　６５
４．　「キ」「ケリ」の差異から　６８
　４．１．　経験性　６８
　４．２．　ムード　７０
５．　考察　７１
６．　おわりに　７２

統語　まとめと今後の課題　７４

１．　各章のまとめ　７４

１．１．　第１章　７４

１．２．　第２章　７４

１．３．　第３章　７５

１．４．　第４章　７５

２．　本研究の成果と課題　７６

２．１．　本研究の成果　７６

２．２．　今後の展望　７７

３．　本研究の課題　７８

４．　おわりに　７９

付録　８０

使用テキスト　９６

参考文献　９６

あとがき　９８

序章　ク語法研究の課題と可能性

1　はじめに

上代語において名詞句を形成する形式には連体句、準体句、ク語法の三つが存在した。連体句は名詞に活用語連体形が接続した形式を言うが本稿では（1）a のように形式名詞「コト」に接続したもののみを対象とする。従来、名詞句研究においては連体句と準体句との比較を中心に進められてきたが、ク語法が積極的に論じられることは少なかった。しかし、意味・機能の近接する上代語における三者のあり様は現代日本語の（1）d のようなノ句型準体句の出現と併せて名詞句の史的な変遷を見る上で注意される。

（1）a. [見れど飽かぬ吉野の川の常滑の絶ゆる]こと〈絶事無久〉なくまたかへり見む
（1・37）【連体句】
b.鳥じもの海に浮き居て[沖つ波騒ク]を聞けば〈驂乎聞者〉あまた悲しも
（7・1187）【準体句】
c.み吉野の玉松が枝は愛しきかも[君がみ言を持ちて通はく]〈持而加欲波久〉
（2・113）【ク語法】
d.[机の上にある赤い]のを取って。　【ノ句型準体句】

本章では、従来ク語法研究がどのような方向で進められてきたかを概観し、そこにある課題と今後の可能性について述べる。

2　意味論としての名詞句

これまでク語法については形態論的な観点から議論されることが多かったが[1]、橋本（1978）、佐々木（1999）、信太（1981）、田上（2009）などによって意味論的な観点からも議論されている。その一つの成果として、名詞句が文の格成分となる時の述語にク語法と準体句とで偏りがあることなどが指摘され整理されてきた。その中にあって田上（2009）が、ク語法と準体句の差異を同一名詞連体と同格連体という名詞句の性質に求めた点は重要な視点であった。そして、その考察は次の橋本（1978）の発言を批判的にも継承するものであった。

（2）（ク語法は）形容詞による述定の対象に位置するものが、ことに目立つ
（橋本 1978:34）

田上（2009）はク語法と準体句の名詞句が文の格成分となっている例を対象に、その名詞句を従属文として含む主文の述語が動詞文性のものか形容詞文性のものかについて調査している。

（３）a.天霧らし雪も降らぬかいちしろくこのいつ柴に降らまくを見む〈零巻乎将見〉
（8・1643）【動詞文性】
b.春山の咲きのををりに春菜摘む妹が白紐見らくし良しも〈見九四与四門〉
（8・1421）【形容詞文性】

（３）a はク語法が動詞述語の目的格に位置する例、（３）b はク語法が形容詞述語の主語に位置する例である。同様に準体句についても調査し、表１のようにク語法は形容詞文性のものが多く、反対に準体句は動詞文性のものが多いという結果を示した。

表１　名詞句の文性

	ク語法	準体句
動詞文性	65	245
形容詞文性	239	209

田上（2009:63）

ところで、名詞句には所謂モノを表す同一名詞連体と所謂コトガラを表す同格連体という２つの意味論的意味がある。（４）a は同一名詞連体を表す例であり、（４）b は同格連体を表す例である。名詞句がモノを表すかコトガラを表すかは文の統語的な構成に影響する場合が多いが、田上氏はこれをク語法と準体句を表し分ける指標として導入したのである。その結果が表２である。

（４）a.道で[サッカーをしている]のに話しける。【同一名詞連体】
b.今週、[サッカーする]のを楽しみにする。【同格連体】

表２　ク語法と準体句の名詞句の性質

	ク 語 法	準体句
同一名詞連体（Ⅰ型）	0	44
同格連体（Ⅱ型）	393	396

田上（2009:67）

表２から、ク語法はモノを表す同一名詞連体となることがないことが分かる。そこで、田上氏はク語法が基本的に同格連体しか表すことが出来ないということと、形容詞文性に偏るという点を関連付けて次のように考察している。

（５）必ずしも正確でない極々乱暴な言い方をすればモノ的である、とⅠ型の準体句を概括したが、対象性の高い実的存在物モノほど、動作作用の物理的な対象となり易く、動詞文的諸格として動詞文に参加しやすい。それに対して、Ⅱ型のコトは、知覚や認識・思惟の内容や対象となる以外は動作・作用の実的な対象とはなりにくく、結果として、動詞文には参加しにくい。ただし、それは相対的な「なり易さ」「なりにくさ」であって、Ⅱ型の準体句であるク語法が動詞文述語と組み合わさることを、何ら妨げないのである。

（田上 2009:68）

田上（2009）の考察はク語法と準体句という従来名詞句を表す形式として同様に把握されていた理解を再編するものであり、その後のク語法の消長や現代語のコト名詞句とノ句型準体句の対立を考える上でも示唆的である。

３　研究の課題

田上（2009）の研究は現時点におけるク語法研究の最も進んだ理解を示すものであるが、課題が主に２点ある。まず、１点目は例外の存在である。確かに、ク語法は動詞「思フ」の対象になり易いという傾向はうかがえるが、同時に動詞「見ル」の対象になる場合も少数ながら確認される。また、ク語法の多くの例がコトガラを表す同格連体であるが、一方で、モノを表す同一名詞連体も僅少ながらやはり確認される。このような、諸例を傾向から漏れた例外として処理すべきであろうか。

２点目はその他のク語法との関係についてである。本研究の調査では『万葉集』には５３１例のク語法が確認された。田上（2009）までの一連の研究において得られた知見は、その他全てのク語法の説明についても適用可能な考察であろうか。そもそもク語法とはどのような名詞句なのだろうか。

以上、２点の課題について述べた。要するに、ク語法研究においてはク語法一般のより原理的な説明が求められていると言える。そのためには、まず個々の用例を改めて観察し、準体句や連体句との異なりを比較・検証する必要がある。

４　ク語法、準体句、連体句の相違点

述べたように、上代語にはク語法と準体句に加え名詞句を形成する形式として形式名詞「コト」に連なる連体句が存在する。上代語においてこの三者のあり様はそれぞれどのような関係なのであろうか。本節では、まず近年の名詞句研究において特に重要視されてきた能格性と存在表現という側面から三者の関係を整理する。

４．１　能格性

名詞句がコトガラを表すかモノを表すかという視点は夙に石垣（1942）によって説かれるところである。その石垣（1942）『作用性用言反撥の法則』の概略を示せば以下である。

〈その１〉主語の名詞句がヒト・モノの意味を表す場合、その名詞句内の述語は必ず状態性を表す。そして、主文述語にはそのような制限はない。
〈その２〉主語の名詞句はコトガラの意味を表す場合、その名詞句内の述語には制限がない。しかし、主文述語は必ず状態性を表す。
〈その３〉上記の２点より、従属節の名詞句内述語と主文述語のいずれかが必ず状態性を表す述語となる。従って、両方が同時に作用性述語になることはない。

〈その１〉については次の（６）のような準体句の例がある。しかし、ク語法には該当する用例は見当たらない。

（６）物皆は新しき良し〈新吉〉ただしくも人は古りにし宜しかるべし（10・1885）

また、〈その２〉については、次の（７）a の準体句の例と（７）b のク語法の例がある。

（７）a.あしひきの山を木高み夕月をいつかと君を待つが苦しさ〈待之苦紗〉（12・3008）
b.さ夜ふけてしぐれな降りそ秋萩の本葉の黄葉散らまく惜しも〈落巻惜裳〉
（10・2215）

ところで、石垣（1942）の言う「状態性」の範囲にはなお問題とする部分もあり、近年では能格性という観点からの把握が有力視されている。そして、そのような観点から現代語の「ことが」節と「のが」節の分布を観察した時、近藤（2000）によれば、「ことが」節は自由に自動詞・他動詞・使役形の主語になれる一方で、「のが」節は基本的に非対格自動詞・形容詞・名詞文の主語にしかなれないという結果が示されている。翻って、ク語法は従来「コト」と訳されることが多いが、能格性という観点から見ると、ク語法と連体句は制限が異なっており、寧ろク語法は準体句と同じ制限を共有していると言える。

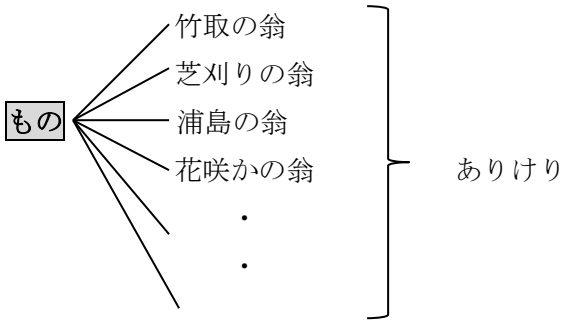
４．２　存在表現の主語になれるか

存在表現とは述語が「有リ」や「無シ」などの存在について言及するような文を言う。

（８）吉野川行く瀬の早みしましくも淀むことなく〈不通事無〉ありこせぬかも
（2・119）

上代語において、連体句は（８）のように多く見出すことができる。ところが、準体句では「有リ」「無シ」の主語になった例を見出すことができない。ではなぜ連体句が存在表現の主語になれるのかは、金水（2006）によると、文の中に集合の要素と全体を表す部分があるからであるとされる。

（９）[竹取の翁といふ]ものありけり。

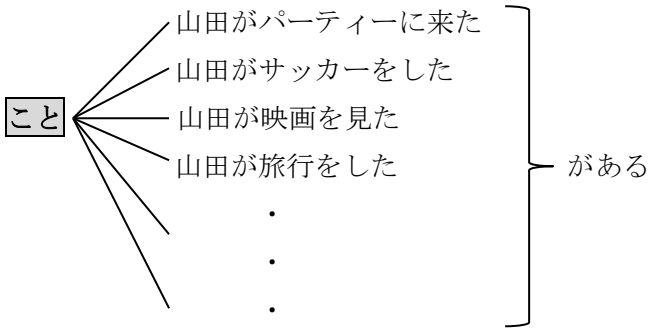


（９）は次のように文の中に変項となり得る部分を含む命題関数を作ることができる。

（10）X といふものありけり。

一方で現代語のノ句型準体句もまた存在表現の主語になることはできない。

（11）a.*山田がパーティーに来たのがある。
b.山田がパーティーに来たことがある。



これに対して金水（2006）は「準体句は集合の要素と全体を表す部分がないため、存在・非存在に言及することができない。また、ク語法も「あり」「なし」の主語の位置に立つことがない。よって、ク語法はコトガラ準体句に近い性質を持つように見える。」と述べている。

ただし、ク語法にもやや特殊な振る舞いをするが次のような存在表現の主語になる例が

見られる。

（12）a.潮満てば入りぬる磯の草なれや見らく少なく恋ふらくの多き〈見良久少 戀良久乃太寸〉（7･1394）

b.阿胡の海の荒磯の上のさざれ波我が恋ふらくは止む時もなし〈吾戀者 息時毛無〉（13・3244）

c.大舟の思ひ頼める君故に尽くす心は惜しけくもなし〈惜雲梨〉（13・3251）

このように、ク語法が存在表現の主語になる場合は、「少ナシ」や「多シ」といった量に関わる述語や、（12）b のように主題化される例など連体句とはやや差はあるが、いずれにせよ「ク」という形式が集合＝「コト」を表していると考えられる。以上、本節で述べたことをまとめると表３のようになる。

表３　３名詞句形式の体系その１

	能格性	存在表現
準体句	＋	－
ク語法	＋	△
連体句	－	＋

前節で見たように、ク語法は能格性という点で言えば準体句に近く、存在表現という点で見れば連体句に近い。つまり、統語論的な立場からみればク語法は準体句と連体句の中間的な存在で、１つの連続として見ることもできる。これは、橋本（1978）、信太（1981）（1993）などが、３つの名詞句を言語的変遷として捉えてきたことと軌を一にするものであると言えるだろう。

５　ク語法の特立性

前節にみたように、３つの名詞句は１つの連続としてみることもできるが、本研究の立場はこれらを共時的に対立した言語形式であるとするものである。本節では、ク語法に特徴的にみられる事例を挙げ、ク語法が他の名詞句からは特立される可能性があることを示す。

５．１　助動詞「ズ」「ム」の接続

従来、多くの注釈書の中でク語法は形式名詞「コト」と同一視され、故にコトガラを表すものであるという理解が広く行われてきた。ところが、その中にあって僅かな例外の存在も注目されてきた。次の例はク語法がコトガラを表さない例である。

(13)・・前妻が肴乞はさばたちそばの實の無けくを〈未廼那鶏句塢〉こきしひゑね後妻が肴乞はさばいちさかき實の多けくを〈未廼於朋鶏句塢〉こきだひゑね
(紀・7)

(13) はク語法がモノを表している。ところで、この例はク語法が仮定条件句の後件に生起している点が注意される。

(14) a.岩代の浜松が枝を引き結びま幸くあらばまたかへり見む〈真幸有者 亦還見武〉
(2・141)
b.明日香川しがらみ渡し塞かませば流るる水ものどにかあらまし〈塞益者 進留水母 能杼尓賀有萬思〉 (2・197)

万葉集中の仮定条件句の後件には、通常「ム」や「マシ」といった助動詞が現れる。一方で、次の (15) のように仮定条件句後件に生起するク語法も確認される。

(15) a.我が背子は物な思ひそ事しあらば〈事之有者〉火にも水にも我がなけなくに〈吾莫七國〉 (4・506)
b.生きてあらば見まくも知らず〈生而有者 見巻毛不知〉なにしかも死なむよ妹と夢に見えつる (4・581)

このように、ク語法は助動詞「ム」「マシ」が生起する環境において観察されることがある。そこで、ク語法の句内の述語の活用語がどのような品詞であるかをみたものが表４である。助動詞が半数以上を占めるが、その助動詞の内訳をさらに見たものが表５である[2]。

表４　ク語法の第一前接語品詞

動詞	形容詞	助動詞	総計
124	62	345	531

表５　ク語法の第一前接語が助動詞の場合

ズ	ム	キ	リ	ケリ	ケム	ツ	ヌ	ス	総計
191	128	12	5	2	2	2	2	1	345

表６　準体句の第一前接語

ズ	ム	その他	合計
7	12	211	230

表７　連体句の第一前接語

ズ	ム	その他	合計
3	0	206	209

表５では、否定の助動詞「ズ」と推量の助動詞「ム」が非常に多く、所謂未然形接続す

る助動詞である両助動詞だけで全体の９割以上を占めている。一方で、表６、７にあるように準体句と連体句ではその数は僅少である。つまり、ク語法においては「ズ」「ム」の接続が極めて顕著にみられる。まず、否定の「ズ」に関しては次の山口（1979）の発言が注意される。

（16）肯定すべき事態が与えられていないとする否定判断の表現は、与えられた現実を忌避し、あるいはその現実に替わるべき事態を志向するところに成立すると考えられる。否定のほうが一般により主体性の強い判断を表し、情意的な表現価値も強くなるのはそのためであろう。　山口（1979:51）

山口（1979）の論考はク語法の中でも「ナクニ」という形式について絞って考察されたものである点で注意が要るが、ク語法に主体性や或いは情意的といった要素を見出そうとしていることが分かる。確かに、（15）a にもそうしたムードとしての意味が認められる。重要なのは否定という形式が持つ語用論的な意味である。ある現実の中から存在しない事態を表現するという否定形式は、それ自体が同時に表現された事態の取り立てを担っていると言える。敢えてその事態を問題とするところに主体の強い判断や情意的な価値が認められるのだろう。そうした「ズ」の接続による形式がク語法に集中してみられるのである。

そして、これは「ム」の接続の多さとも無関係ではないだろう。ク語法における「ム」は単に事態の未実現を表すのみで意志や推量などのムードを表す例はみられない。しかし、ク語法は「ム」が接続していない場合でも未実現な事態を表す場合がある。

（17）中にを寝むと愛しくしが語らへばいつしかも人となり出でて悪しけくも良けくも見むと〈安志家口毛 与家久母見武登〉（5・904）

（17）は自分の子の将来を想定した表現である。この例からみられるように、「ム」の接続は本来ク語法においては随意的な要素であったように思われる。しかし、次のような場合には「ム」の接続が義務的である。

（18）見まく欲り〈欲見〉我がする君もあらなくになにしか来けむ馬疲るるに
（2・164）

（18）は願望を表す動詞「欲ル」の目的格の位置にク語法がくる例である。このように、動詞「欲ル」とその形容詞形「欲シ」の対象にク語法がくる例が就中５２例確認されるが、いずれも「ム」が接続しており例外がない。そして、この形式が中古には「マホシ」という助動詞を成立させている。興味深いことに名詞句に「ム」が接続することは上代から中古にかけての「コト」において再現されているということだ。中古語における補文化辞「コト」はその連体節内部に「ム」の接続が顕著にみられることが知られている。この現象に

ついて渡邊（2008）はまず以下のように述べる。

（19）中古語においては、文補語標識「こと」に、補文が表すコトガラの未然性を示す働きが存在していた可能性が示唆される。ただし、補文が未然のコトガラを表す場合であっても、想定の対象となるコトガラや想定されているコトガラを表す場合には、連体止文補語を取る傾向にあった。これは、想定という行為が、コトガラの疑似体験的行為であることにより、コトガラの未然性が弱まるためではないかと考えられる。しからば、この「補文の表すコトガラの未然性を示す」働きとはどのようにして誕生したのであろうか。（渡邊 2008:54）

その上で、上代では「コト」は存在表現の主格になる例があることを挙げさらに次のように述べている。

（20）これらの「こと」の多くは、「あり」「なる」のような未然のコトガラの具現化を表す述語や、「なし」のような未然のことがらの提示を表す述語や、「さだむ」のような未然のコトガラを意図する行為を表す述語と共に用いられていた。このことから、中古語の文補語標識「こと」に存在していたと考えられる、補文の表すコトガラの未然性を示す働きは、修飾要素を伴わない、独立性の高い「こと」の影響を受けて派生したと考えられる。（渡邊 2008:54）

つまり、「ム」の接続がそれに先行する言語形式の意味的特徴に由来するという点でク語法と「コト」が共通しているのである。このように、「コト」に起こった言語変化が既にそれに先行するかたちで上代語のク語法において起こっていたという事実は、現代語の準体助詞「ノ」を含めて、日本語の名詞句形成形式の史的な変遷をみる上で重要な現象であると言えよう。

このようなク語法内の助動詞の明らかな偏りはク語法そのものの意味と深く関連しているとみられる。つまり、もともとク語法が担っていた意味的な役割をより明示的かつ分析的に表しているのがこの両助動詞ではないだろうか。ではその意味的な役割とは何かというと、それは両助動詞が共有する意味に求めることができよう。それは、事態の事実的な成立の判断を保留にしているという点である。換言すれば、事態を仮想的に描くあり様のその肯否が助動詞「ズ」「ム」である。このよう考えれば（13）のク語法が仮定条件の後件にくる例もク語法がモノを表すからといって例外的に扱う必要はなく、寧ろ仮想的な叙述中における事物の対象化として捉えることができ、他のク語法の例と差はない。

５．２　思惟動詞「思フ」の目的語

名詞句が仮想を表すと言うとき、仮想とは心内で生起するもう１つの世界であるから、

それを最も端的に表す語彙は動詞「思フ」であろう。そこで、名詞句が「思フ」の目的語になる場合をみたい。まず、準体句が「思フ」の目的語になる場合をみる。万葉集中では３例確認される。

（21）a.はしきやし然ある恋にもありしかも君に後れて恋しき思へば〈恋敷念者〉（12・3140）

b.世間の苦しきものにありけらし恋にあへずて死ぬべき思へば〈可死念者〉（4・738）

c.世間は数なきものか春花の散りのまがひに死ぬべき思へば〈思奴倍吉於母倍婆〉（17・3963）

（21）a は、準体句内の述語が形容詞であり自身の甚だしい恋情を状態として対象化したものである。即ち、それは自身の感情の表出であるが、一方で動詞「思フ」は心情について言及する動詞である。ということは結句の「思へば」は自身の心情を既に「恋しき」と述べている時点で同語反復的である。この同語反復的であるという点は次の（21）bc においても同断である。「死ぬべき思へば」は、正に話者の価値判断そのものであり、事態の中に話者が置かれているのではなく、事態を受けて話者がそのように判断・思考したことを「ベシ」によって既に示している。

次にク語法が「思フ」の目的語になる場合であるが、１７例ある。

（22）a.かくしあらばなにか植ゑけむ山吹の止む時もなく恋ふらく思へば〈恋良苦念者〉（10・1907）

b.世間は常かくのみか結びてし白玉の緒の絶ゆらく思へば〈絶楽思者〉（7・1321）

c.家人の使ひにあらし春雨の避くれど我を濡らさく思へば〈沾念者〉（9・1697）

d.うるはしと思へりけらしな忘れと結びし紐の解くらく思へば〈解楽念者〉（11・2558）

e.家の妹ろ我を偲ふらし真結ひに結ひし紐の解くらく思へば〈登久良毛倍婆〉（20・4427）

（22）a は一見、準体句の例（21）a と類似しているが、「恋をしたこと」という経験が一連として対象となっており、具体的な動作はないものの、少なくともそこに行為を含んでいるという点で事態の表明であると言える。

先に見た準体句にしろ、上記のク語法にしろ、名詞句が「思へば」の対象になるとき、その名詞句は主体の思惟内容である。これを準体句では「恋シ」や「ベシ」といった心情や叙法の語彙で明示するのに対して、ク語法にはそういった語彙が選択されることはない。

つまり、「思フ」の対象となる場合、その事態が思惟内容であることを示す指標はク語法という形式そのものだといえる。これは一方で、従来ク語法が「コト」を表す形式であるという理解に回帰するものではある。しかしながら、それは同時にク語法が思惟の対象となり得るという了解があったこと意味し、その点で準体句とでは大きく異なる。

6　可能世界

通常、仮定条件句の後件は未実現の事態である。５．１節でみたように、ク語法がその位置にくるということはク語法自体が未実現の事態と等価であることを意味する。(13) において、「多くの実」「少ない実」はそれ自体では事物の存在を表しているに過ぎないが、それがク語法に包摂されることで事物の仮定性を帯びることになる。故に、仮定条件の後件に位置することができるのである。では、なぜそのようなことが可能なのかというと、それはク語法が本来持っていたのであろう語彙的な意味に由来するものと思われる。無論、その語源を再構することは極めて困難であり、具体的にどのような意味を有していたかを知るのは不可能だろう。しかし、そうした語彙的意味は文の中における機能的意味の中に残滓として垣間見ることができるのではないだろうか。それが、「ム」「ズ」の接続と「思フ」の対象への偏りである。

このような、未然接続の助動詞と思惟動詞の対象に、仮定条件句後件の生起を含めて考え合わせると、ク語法の表す事態は客観的な事態とは区別される、話者の主観に根差した認識による事態の表現であると言える。それが、様々な文環境の中で思惟を表したり、仮定を表したり、想像を表したりするのである。このような、思惟や仮定や想像など話者の主観に根差した事態認識を総称して可能世界と仮称する。ク語法はこの可能世界を表す言語形式であるとみたとき、準体句と連体句との異なりを新たな観点からみることができる。

ところで、このように事実か仮想かを活用語の（広義）の接辞形式で弁別する方式は一般言語学的、類型論的にあり得る観点である。例えば、スペイン語では次のようなミニマルペアによる語形変化で事態をありのままの客観として述べる直説法と、事態を仮想的に描く接続法を表し分けている。

(18) Aunque no me[a. <u>quiere</u>/b.<u>quiera</u>],¡què importa!
　a.（彼女は私を愛していないが、かまうものか！）　【直説法】
　b.（たとえ彼女が私を愛していなくても、かまうものか！）【接続法】

従来研究では名詞句のコトガラを表す側面に注目した考察がなされてきたが、それは謂わば統語論と意味論に跨る体系であった。しかし、本章の言う可能世界という観点は強く意味論的側面に偏る考察である。しかし、このような観点を持つことで記紀歌謡を含めより多くの例を包摂でき、かつ、ク語法、準体句、連体句という上代語の名詞句形成形式の三者の体系的位置づけを再構成することができる。

表８　３名詞句体系その２

	能格性	存在表現	仮想性
準体句	＋	－	－
ク語法	＋	△	＋
連体句	－	＋	－

７　まとめ

本章ではク語法研究における課題と今後の可能性について述べた。従来の指摘にあるように、ク語法は基本的にモノを表す同一名詞連体とはなりにくく、コトガラを表す同格連体に大きく偏る性質を持つ。そうした性質が準体句との差異に少なからず影響を与えているのは確かだろう。しかし、問題はそもそもなぜク語法は同格連体に大きく偏るのかという点と、同一名詞連体を表すク語法もあるように、ク語法がモノを表すかコトガラを表すかは準体句との決定的な差異にはならないという点である。つまり、より原理的な説明が求められているのである。

本研究はそうした準体句や連体句との比較をみるためにク語法の表す可能世界という観点を提示する。これは、ク語法を他の名詞句から特立する観点であるとも言える。可能世界は作業仮説であり、なお多くの用例の集積と検証が必要である。また、ク語法が可能世界を表すということと、能格性や存在表現といった統語的要因とがどのように関わるかという点も今後の大きな課題であろう。しかし、上代日本語の名詞句体系を鑑みるとき、ク語法を新たな視点から眺めることは、共時的な言語体系の再構だけでなくその後の史的変遷も視野に入れた通時的な言語研究としても大きな意義がある。

注

１　まず、ク語法が「く」と「らく」の二種に分かたれると説いたのが安藤（1935）、佐伯（1955）であったが、論調としては「く」の一種のみであろうとする見方が支配的であった。ここで問題になったのは、ク語法に上接する活用語の活用形は何かであった。佐伯（1950）は未然形接続説を提唱したが、岡田（1941）、福田（1954）は連体形接続説を提唱している。しかし、連体形接続説は音韻転換について説得的な論証には至らなかった。大野（1952）は同じく連体形接続説を提唱したが、音韻転換の問題を活用語連体形に「aku」という形式を想定することで解決しようとした。ただし、この「aku」説においても問題が完全に解決されたわけではない。

２　さらにク語法にどのような語が前接するかについて詳しく見たものが以下の表である。

表９　ク語法の前接語が動詞

恋フ	見ル	降ル	語ル	思フ	思ホユ	有リ	散ル	隠ル	告グ	解ク	寝	老ユ	取ル	聞ク	嘆ク	過グ	来	荒ル	偲フ	憎サル	絶ユ	居リ	恋イ居リ	立ツ
35	10	5	5	4	4	3	3	3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1

為	争フ	サ鳴ル	帰ス	伏セリ	申ス	繁ク	更ク	思ヒ煩ス	言フ	濡ラス	見ス	告ル	及ケリ	忍フ	緩ス	合フ	尽クス	通フ	暮ル	行ク	サ寝	飼フ	賜ブ	総計
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	124

まず、表９はク語法に前接する活用語が動詞である場合である。延べ数１２４例のうち、異なり語数は４９例ある。「恋フ」に大きな偏りがあるが、全体的に孤例も多く、多様な語との接続が窺える。

表１０　ク語法の前接語が形容詞

惜シ	繁シ	安シ	良シ	欲シ	恋シ	寒シ	清シ	憂シ	辛シ	痛シ	著シ	長シ	嫉シ	悲シ	嬉シ	暑シ	暗シ	静シ	悪シ	楚ナシ	総計
13	9	6	6	4	4	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	62

表１０はク語法に前節する活用語が形容詞である場合である。延べ数６２例のうち、異なり語数は２１例ある。動詞と同様、一部の語彙に偏りはあるがその他の多用な語との接続が確認される。

表１１　ク語法の前接語助動詞のとき、さらにその助動詞に前節する語

見ル	有リ	思フ	散ル	逢フ	知ル	言フ	懸ク	安シ	ナリ	寝	恋フ	飽ク	問フ	経	無シ	リ+思フ	編ム	寝+カツ	来
53	38	27	20	18	15	13	13	9	9	8	7	5	4	4	4	3	3	3	3

降ル	遠シ	別ル	明ク	為	干ル	堪フ	過グ	慰サム	会フ	荒ル	見ス	見ユ	待ツ	告グ	隔タル	言イ継グ	行ク	敷ク	翳ス
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1	1

ラユ+寝	語ル	置ク	乞フ	ユ+忘ル	更ク	ズ+寝	解ク	ス+遣フ	ズ+見ユ	入ル	開ク	並ブ	合フ	越ユ	ズ+遂グ	ラユ+忘ル	告ゲ遣ル	恋シ	咲ク
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

枯ル	刈ル	祈ム	思ハフ	通フ	寒シ	付ク	止ム	聞ク	死ヌ	久シ	守ル	隠ル	拾フ	明カス	終フ	鳴ク	植ウ	過グ+カツ	巻ク
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

落ツ	ズ+知ル	呼ブ	吹ク	清シ	染ム	総計
1	1	1	1	1	1	345

表１１はク語法の前接語助動詞のとき、さらにその助動詞に前節する活用語の詳細をみたものである。延べ数３４５例のうち、異なり語数は１０６例ある。この中には動詞もあれば形容詞と助動詞の場合もある。これ以上の細分は煩雑になるため割愛するが、総じて動詞の場合が多い。ただし、中にはさらに活用語が接続する例がある。例えば以下のよう

な例である。

（19）なかなかに黙もあらましをなにすとか相見そめけむ遂げざらまくに（4・612）

（19）では、ク語法に近い方から助動詞「ム」＋助動詞「ズ」＋動詞「遂グ」と活用語が３種接続している。表１１の中では「ズ＋遂グ」などと表現した。表１１では「見ル」と「思フ」の例が多く見られる。このうち、「見まく」という形式については第２章で詳しく論じることになる。

なお、本研究が対象としたク語法の全用例は本論末の付録に掲載している。

第１章　ク語法が動詞述語「思フ」「見ル」の目的格になる場合

１　はじめに

上代語において名詞句を形成する形式には（１）a 連体句名詞句、（１）b 準体句、（１）c ク語法の三つがある。次の（１）a～c の[　　]内の部分が名詞句であり、□で囲った部分がその名詞句内の述語である。

（１）a.見れど飽かぬ[吉野の川の常滑の絶ゆること]なく〈絶事無久〉またかへり見む
（1・37）
b.鳥じもの海に浮き居て[沖つ波騒ク]を聞けば〈驂乎聞者〉あまた悲しも
（7・1187）
c.み吉野の玉松が枝は愛しきかも[君がみ言を持ちて通はく]〈持而加欲波久〉
（2・113）

上の（１）a は連体句が「こと」に連接する名詞句である。（１）b は「こと」がない形で、活用語連体形のみの準体句である。（１）c はいわゆるク語法による名詞句である[1]。

既に指摘があるように、中古以降、ク語法は漢文訓読環境には見られるものの、その後は「こと」名詞句と準体句が大半を占めるようになり、現代語に至ってはいわゆる準体助詞の「ノ」句型準体句が生じる。名詞句の史的展開に照らして、右の上代語の名詞句３種との関連あるいは展開をどのように捉えるかは日本語史研究上の大きな課題である。

その中にあって、信太（1993）は、ク語法と準体句が動詞述語の目的格に立つ次のような場合について、両者には異なる偏りが存在することを指摘している。

（２）a.玉津島見てし良けくも我はなし都に行きて恋ひまく思へば〈恋幕思者〉
（7・1217）
b.あしひきの荒山中に送り置きて帰らふ見れば〈還良布見者〉心苦しも
（9・1806）

上の（２）ab にはそれぞれ「思へば」「見れば」という動詞が名詞句を項として述語の位置に現れている。具体的には（２）a はク語法による名詞句が「思フ」の目的格に位置し、（２）b は準体句が「見ル」の目的格に位置している。信太氏は、（２）a と（２）b について「思フ」を思惟動詞、「見ル」を知覚動詞として述語の語性に注目し、ク語法を目的格にとる場合は思惟動詞が多く、準体句の場合は知覚動詞が多いという述語動詞の語性に対応

した偏在があることを見出している。さらに田上（2009）では、ク語法の多くの例が同格連体を表す点を捉えて、ク語法を特立する形でこの分布偏差を解釈している。すなわち、ク語法は事態（コトガラ）を表す例が多く、それが「思フ」と意味的に親和し易いが、準体句は事物（モノ）を表す例が多いという点において「見ル」と意味的に親和し易いとするものである。

これは名詞句を承ける述語の語性から、準体句などとは対比されるク語法の特性を捉えた見方である。本来、どのような内容が名詞句になるかということと、何を述べるために名詞句として対象化するかということとは独立したことがらである。しかし、この間に何らかの相関があるかもしれないという指摘は、ク語法という特殊語法を考える上で示唆的である。もちろん田上氏も認めるように例外はあり、ク語法による表現の定型化という和歌表現の類型性からも傾向差程度という可能性はあろう。しかし、田上氏の指摘をさらに進めるならば、ク語法か準体句かという対象化形式の選択が、その対象に対する主体の捉え方・述べ方に対応するという仮説が考えられる。名詞句に種別があるということは、対象の捉え方に差異があるということを示すからである。本章ではク語法が事態をどのように対象化し、それがどのような意味を持つのかという点について考察してみたい。

２　考察対象

就中、ク語法は５３１例あり、そのうち動詞述語の目的格になるものは６６例確認される。また準体句は１３６４例あり、そのうち動詞述語の目的格になるものは５９例確認される。

目的格の用例認定にあたっては、形式的に名詞句に後接する助詞を判断基準とした。ただし、たとえばヲ助詞でも必ずしも目的格になるとは限らず、間投助詞もしくは係助詞相当の例や接続助詞の例もある。ここに問題とするのは目的格のそれであるから、明らかに主格や接続助詞としての意味を持つ例は除外したけれども、目的格と主格、接続助詞などの複数の意味にわたるような中間的な例はなるべく用例に含めた。それとは別に統語的な関係上、目的格と見做せる例は用例に含めた。例えば、次の（３）のような係助詞「モ」の例は助詞を判定基準にするところからすれば目的格の指標がないとはいえ、「生きていれば逢えるかもしれないのに」（逢うことができるかもしれないのに）という動詞述語の対象として名詞句が目的格相当であるから用例に含めた。

（３）生きてあらば見まくも知らず〈見巻毛不知〉なにしかも死なむよ妹と夢に見えつる　（4・581）

（３）の類例はこれを含めて５例ある。なお、準体句には（３）のように係助詞「モ」が後接する例はない。また、次の（４）ように「見ユ」に前接する例は準体句として用例に含めない。

（４）a.御食つ国志摩の海人ならしま熊野の小舟に乗りて沖辺漕ぐ見ゆ〈奥部榜所見〉
（6・1033）
b.海人小舟帆かも張れると見るまでに鞆の浦回に波立てり見ゆ〈浪立有所見〉
（7・1182）

（４）aの「漕グ」は四段活用動詞で形式からは終止形か連体形かは判断できない。ところが、（４）bのようにラ変活用の終止形に後接した例の存在によって準体句ではないことが知られている[2]。従って、準体句を目的格とする「見ユ」の例はない。ただし、ク語法においては１例「見ユ」の例が確認される。

夜のほどろ我が出でて来れば我妹子が思へりしくし面影に見ゆ〈念有四九四面影二三湯〉（4・754）

７５４番歌がそれであるが、本章では「見ル」の例と一括して考察対象に含めた。なおこの例については後述するところがある。

以上を踏まえて、ク語法と準体句が動詞述語の目的格に立つ場合の主文述語の種類と数を示したものが次の表１・２である[3]。

表１　ク語法が目的格の述語動詞

欲ル	思フ	知ル	見ル	忘ル	見ユ	総計
30	18	9	6	2	1	66

表２　準体句が目的格の述語動詞

見ル	聞ク	思フ	置ク	知ル	待ツ	終フ	総計
46	3	3	2	2	2	1	59

表１・２を見ればク語法が「思フ」を多くとり、準体句は「見ル」を多くとることが確認される。このような、「思フ」と「見ル」の偏りを発見した信太（1993）は、ク語法と準体句を同一名詞連体と同格連体という意味論的側面によって分類し、両名詞句の関係を特に「言語変化の一過渡期」として位置付けている。これは論者が見る限りク語法から準体句への通時的な移行を想定し、いずれも等しい名詞句の連続的な様相として捉える観点かと思われる。一方で、田上氏の論考はそういった通時的変化という従来論に疑問を呈する形で展開されるが、両名詞句の分布偏差が述語動詞の語性によるという立論自体は信太氏と共通している。この点を踏まえた上で、ここでは共時的に相補的もしくは分属的な名詞句のあり方としてク語法と準体句の関係をとらえてみたい。

３　ク語法、準体句が「見ル」の目的格となる場合

動詞「見ル」は属目の景もしくはその対象を視認する意だが、眼前に存在しない対象や事態についても用いる場合がある。迂遠なようではあるが、眼前に生起している事態か否かを確認するために、用例を一瞥しておきたい。

まず、準体句は表２から「見ル」は４６例あり、全体の７割以上を占める。

（５）秋萩の散り行く見れば〈散去見〉おほほしみ妻恋すらしさ雄鹿鳴くも
（10・2150）

（５）のように、話者の眼前に現在生起する事態を目的格とする場合が多い。この歌では雄鹿が求愛のために鳴いているのだという推定が余情的に述べられているが、そのような感慨に至った契機は眼前に広がる風景への目撃である。第３句目以降は３句目のミ語法[4]、４句目の「ラシ」、５句目の「モ」の使用のあり方を見て分かるように、話者の想定の中で働く１つの判断である。つまり、当該歌は「見れば」を挟んで前半の眼前の事実性と後半の心的な推定性という対比をなしており、それだけに、目撃された自然物の事態だけがこの歌の中で唯一確定した事実であるということが一層強調される。ところで、現在の事態としたのは、時制という観点からみると、次のような例があるからである。

（６）a.石見なる高角山の木の間ゆも我が袖振るを妹見けむかも〈吾袂振乎妹見監鴨〉
（2・134）

b.この夕秋風吹きぬ白露に争ふ萩の明日咲かむ見む〈明日将咲見〉
（10・2102）

（６）a は準体句内の述語動詞「振る」に時制を表す要素が接続しないけれども、主文述語では「見けむ」と過去時制であるから、「我が袖振る」は過去に生起した事態である。それを現在から思い出している。一方、（６）b は「この夕秋風吹きぬ」という現在の事態が提示され、歌としては一呼吸置いた上で、「白露に争ふ萩の明日咲かむ」という準体句は「この夕」からみた未来の事態である。準体句が未来を表す例は、この（６）b のように準体句内と主文述語の両方に助動詞「ム」が接続して「―ム…ム」型で例外がない[5]。このように、準体句内か主文、あるいはその両方の述語に接続する時制形式によって対象の事態が現在に生起しているのではないこと（非現在）を表す例が１０例確認される。

準体句が表す事態が時制上の非現在だとしても、眼前の対象を視認するという「見ル」の知覚行為としての意味が損なわれるわけではない。ところが、「見ル」の目的格という点から観察すると、後述するようにク語法には（５）「散りゆく見れば」のような眼前の事態や対象を事実的判断としてそのまま表す例が存在しない。この点で（６）「袖振るを妹見けむかも」「咲かむ見む」の非現在の例と、（５）のような眼前の現在の例とは、準体句とク

語法を区別する上での一つの指標になるものと考えられる。

同様の理由で、次の（７）の形容詞述語の例も（５）の現在事態の例と区別しておきたい。

（７）a.足柄の箱根飛び越え行く鶴のともしき見れば〈乏見者〉大和し思ほゆ
（7・1175）

b.今造る久邇の都は山川のさやけき見れば〈清見者〉うべ知らすらし
（6・1037）

c.うつせみの常なき見れば〈常无見者〉世間に心付けずて思ふ日そ多き
（19・4162）

（７）a において実際に見ている対象は「鶴」である。しかし、そこに「鶴」に属性・評価としての「ともしさ」を見るというのは、対象として何を見るかではなく、その対象を「どのように見るか／捉えるか」を示す表現である。従って、ここでの「見ル」は、話者の心理的な見方、すなわち対象もしくはその属性への評価や認識を示すものだと考えられる[6]。具体的な目の前の事態や対象を「見ル」というのは、その事態なり対象は話者だけではなく、相手を含む他者にも同様に見えるそれらである。しかし、その事態なり対象なりに対する評価は話者の主観に基づいたものである。この点は記憶された過去事態の準体句（６）a にも未来事態の（６）b にも近い事態の把握といえる。眼前にある対象であっても、（５）の動詞述語の準体句と（７）の形容詞述語のそれは区別する必要がある。

以上、「見ル」の目的格にたつ準体句を（５）（６）（７）の３種に分類したが、その内訳を見ると次のようになる。

表３　準体句内の述語の型　　＊（　）内は用例番号

現 在（５）	非 現 在（６）	属 性（７）	総計
28	10	8	46

表３にあるように、４６例中半数以上が（５）の現在事態を表す例である。

ところが、ク語法では（５）の現在事態を表す例は存在しない。集中にク語法が「見ル」の目的格となる例が６例、「見ユ」の目的格となる例が１例ある。

（８）a.夜のほどろ我が出でて来れば我妹子が思へりしくし面影に見ゆ〈念有四九四面影二三湯〉
（4・754）

b.中にを寝むと愛しくしが語らへばいつしかも人となり出でて悪しけくも良けくも見むと〈安志家口毛与家久母見武登〉
（5・904）

c.天霧らし雪も降らぬかいちしろくこのいつ柴に降らまくを見む〈零巻乎将見〉
（8・1643）

d.我がやどの尾花押しなべ置く露に手触れ我妹子落ちまくも見む〈落巻毛将見〉　（10・2172）

まず、（８）b～d の３首４例は、主文の述語が「見＋ム」となっている。（８）cd はク語法の名詞句内の述語にも助動詞「ム」が接続している。ク語法が対象としている事態は、未来において生起するであろう事態である。反対に（８）a はク語法の名詞句内の述語に助動詞「キ」が接続している。「恋人がかつて思い沈んでいた姿」が回想的に現出しているのであって、実際に今現在話者の眼前にその姿があるわけではない。「面影に見ゆ」が「見ゆ」と等価であるかはなお問題なしとはしないが、しかし、「面影」は話者の心内に現前するとはいえ、客観的な事態として存在するわけではない。この「見ゆ」は失われた対象に対する「偲フ」に近い。（８）におけるク語法はいずれも未来または過去の事態を話者の心内に投影しており、その事態は話者の現実の眼前にはない。

これに対し、次に示す２例はいずれも時制として現在の事態である。

（９）持ち越せる真木のつまでを百足らず筏に作りのぼすらむいそはく見れば神からならし〈伊蘇波久見者神随尓有之〉　（1・50）

（９）は題詞に「藤原の宮の役民が作る歌」とあり、藤原の宮遷都に従事した役民に擬する歌である。作者は役民ではなく、それを管轄する立場にある官人と推察される。（９）は、ク語法の対象とする事態が話者の眼前にある。時制上も現在であり、前掲の準体句の（５）の例と差がないように見える。この（９）は一文中に「ラム」と「ラシ」が共起する集中唯一の例である点で注意される[7]。問題の「いそはく」とは競う意だが、この場合、この前に「天地も依りてあれこそ」と天地の神々が天皇の意向に従っていることを受けて「いそはく見れば神からならし」と結ばれる。人々が家のことも忘れて率先して働く様子を捉えたものながら、実際に競いあっているわけではない。「神からならし」とある点からすれば、神々と人々の主体的な意志が新都造営に作用しているように見えるという意味であって、これは前掲（７）形容詞準体句の「越え行く鶴のともしき見れば」に非常に近い用法である。このことは今ひとつの例である（10）も同断である。

（10）筑波嶺に登りて見れば尾花散る師付くの田居に雁がねも寒く来鳴きぬ新治の鳥羽の淡海も秋風に白波立ちぬ筑波嶺の良けくを見れば〈吉久乎見者〉長き日に思ひ積み来し憂へは止みぬ　（9・1757）

（10）は題詞に「筑波山に登る歌一首併せて短歌」とあり、筑波嶺への土地褒めの表現である。「良けく」で表される筑波嶺の良さとは具体的に言えば「尾花散る師付くの田居に雁がねも寒く来鳴きぬ新治の鳥羽の淡海も秋風に白波立ちぬ」であって、それら個々具体の事物によって成り立っている筑波嶺への評価としてその「良さ」を述べている。ただし、

（９）も（10）も評価ながら、やや詳しくいえば事態に対する見立てを指している。それが比喩ではなく対象への評価であるという点で（９）（10）は形容詞準体句の（７）に近似する。

一方で、準体句の（５）「散りゆく見れば」は、客観的事実の描写で、それ以上その対象が話者にとってどのようなものかという評価は明示的ではない。仮に「*雁がねの来鳴かく見れば良し」といったク語法による客観的事実の描写があってもよいはずだが、しかし、そういった例は存在しない。ここにはク語法にとっての何かしらの文法上の制約が存在していることを示す。

名詞句が「見ル」の目的格になる場合からの観察では、対象に対して、主体だけでなく他者もまた同様の認識を共有できるような、より客観性の高い場合には準体句が用いられるが、主体のみの認識であって、他者とは共有されない場合にはク語法が用いられるという傾向が見られる。

４　ク語法、準体句が「思フ」の目的格となる場合

次に、ク語法と準体句が述語動詞「思フ」の目的格になる場合について考えてみたい。まず、準体句の場合をみると、『万葉集』中に以下の３例を挙げることができる。

（11）a.はしきやし然ある恋にもありしかも君に後れて恋しき思へば〈恋敷念者〉（12・3140）

b.世間の苦しきものにありけらし恋にあへずて死ぬべき思へば〈可死念者〉（4・738）

c.世間は数なきものか春花の散りのまがひに死ぬべき思へば〈思奴倍吉於母倍婆〉（17・3963）

（11）はいずれも「思へば」となること、結句に位置することにおいて共通する。（11）a は、準体句内の述語が形容詞であり、自身の甚だしい恋情を状態として対象化したものである。動詞「思フ」はその心情について言及する動詞であるから、結句の「思へば」は自身の心情を既に「恋しき」と述べている時点で同語反復的である。この同語反復的であるという点は次の（11）bc においても同断である。「死ぬべき思へば」では、事態を受けて話者が「死ぬにちがいない」と自らの事態把握は「ベシ」によって既に示されている。注意したいのは、名詞句内に「ベシ」のような命題を包摂する叙法的意味を表す形式を含むという点である。一方で、後述するク語法ではこういった話者の事態把握を表す叙法の形式が名詞句内に現れることがない。

（11）の３例に言えることは、「恋しき」は語義として、「死ぬべき」は述語文節として、既にこれらの中に主体が思うことが明示的であるという点である。「ベシ」に限って言えば、この名詞句は客観的な事態の記述（describe）ではなく、その事態をどのように評価し述べ

立てるかという話者の主観的な表出（express）を表している。これを「恋しき」に敷衍してみれば、「恋シ」という語が話者の主観的な評価を表しているという点で「ベシ」の表す表出と連続的である。このように（11）における「思フ」の対象が話者の心的な評価や態度であることを名詞句内の述語の語彙的意味によって表すという点は次のク語法の例とは対立的である。

次にク語法の用例を見てみよう。ク語法が「思フ」の目的格になる例は『万葉集』中に１８例確認される。

（12）a.かくしあらばなにか植ゑけむ山吹の止む時もなく恋ふらく思へば〈恋良苦念者〉（10・1907）

b.我妹子に恋ひし渡れば剣大刀名の惜しけくも思ひかねつも〈名惜念不得〉（11・2499）

「思フ」１８例中、１７例が右の（12）a のように、「思へば」という形式を取っている。１例のみ（12）b のような例が確認される。「思へば」１７例に限って言えば、（11）と同様に全て結句において用いられている。これは、長短歌含めて例外はない。また、ク語法内の述語は動詞か動詞に時制が付加された形式だけで、準体句の例のように形容詞やその他の助動詞が付くことはない[8]。前掲準体句との差異はク語法の表す対象が事態を表すという点である。例えば、（12）a は一見、準体句の例（11）a と類似しているが、「恋をした」という経験が一連として対象となっており、具体的な動作はないものの、そういった事実が存在したという記述的な事態把握である。換言すれば、一連を事態として捉えるということは、その事態の中に話者自身を置くということであり、自己を客体視した事態把握である。

ただし、自己の客体視と事態の客観性は異なる次元の理解であることを注意する必要がある。なぜなら、客体視された自己を含む事態とは、その話者にとっては現在時までの経験の回想やあり得る未来の想定の表現であり、あくまで、それらの事態は話者の主観的な思惟の中で想起された事態だからである。従って、それらの事態が必ずしも客観的な表現であるということを保証しない。例えば次の例は、客観的事実として現実に生起した事態であるものの、なお主観的な思惟の痕跡を残す例である。

（13）うはへなきものかも人はかくばかり遠き家道を帰さく思へば〈令還念者〉（4・631）

（13）におけるク語法の表す事態はその事態に至るまでの過程や、話者を取り巻いている状況について思惟した内容を表している。しかし、「こんなにも遠い家路を帰される」という表現は、客観的な距離というより湯原王が感じる娘子の薄情さの根拠として家路の遠さを問題にしているのである。つまり、このように物理的な距離を心的な作用の程度へと

転換している点でその客観性は後退している。

一方で、「思へば」１７例の中にはそういった客体視された自己が含まれない事態を表す例がある。

（14）a.世間は常かくのみか結びてし白玉の緒の絶ゆらく思へば〈絶楽思者〉
（7・1321）

b.家人の使ひにあらし春雨の避くれど我を濡らさく思へば〈沾念者〉
（9・1697）

c.うるはしと思へりけらしな忘れと結びし紐の解くらく思へば〈解楽念者〉
（11・2558）

d.家の妹ろ我を偲ふらし真結ひに結ひし紐の解くらく思へば〈登久良毛倍婆〉
（20・4427）

（14）の「思フ」の対象となるク語法の事態はいずれも話者の眼前に生起しているはずの事態である。例えば、（14）d は防人の歌であるが、僻遠の地にある我が身を故郷に残した妻が偲んでいることの証拠としてのク語法が表す事態「真結ひに結ひし紐の解けること」は話者が今まさに経験した事態であるかのように見える。しかし、これらの歌の特異な点は、そのまま現代語に変換することが難しい点である。例えば「紐の解くらく思へば」を「紐が解けることを思うと」と訳することができるが、この場合、現代語では「紐が解ける」ことがまだ成立していない未然の事態であるように理解される。事実として紐が解けているのなら、むしろ「見れば」が自然である。眼前にあるにも拘わらず「思フ」の対象になるという点では（14）の例はやや問題がある。

さて、先に見た準体句にしろ、このク語法にしろ、名詞句が「思へば」の対象になるとき、その名詞句は主体の思惟内容である。これを準体句では「恋シ」や「ベシ」といった心情や叙法の語彙で明示するのに対して、ク語法にはそういった語彙が選択されることはない。つまり、「思フ」の対象となる場合、その事態が思惟内容であることを示す指標はク語法という形式そのものだといえる。これは一方で、従来ク語法が「コト」を表す形式であるという理解に回帰するものではある。しかしながら、準体句とク語法という２つの名詞句を同質なものと見做しうるか否かという点で、同じく「コト」を表すことが可能な準体句が「思フ」の対象となるとき、先に述べたようなク語法とは別種の制限下にあるという事実はなお未解決の部分があることを示す。

また、このように純粋な事態把握を「思フ」の対象とするような例が『万葉集』ではク語法以外にはない[9]。（14）のような表現は中古以降、そして現代語に至るまでコト名詞句で代用するが「～することを思う」というような例が『万葉集』には主にク語法でしか表現できないという事実は、コト名詞句の展開と思惟表現の位相という視点から見ても興味深い。しかしそれ以上に、ク語法の表す事態が「思フ」の対象となるという事実は１つの特立されるべき点として極めて重要であるように思う。

5　考察　- ク語法の表す可能世界 -

第３節で述べたように、ク語法が「見ル」の対象になる場合は、それが非現在の事態か、話者によって評価された事態かのいずれかであった。それは不可視のものを捉えようとする点で想像・類推によって補完される事態である。これを第４節の「思フ」の場合と併せて考えると、ク語法は心的作用の対象とはなり得ても、知覚行為の対象とはなり得ないと言うことができる。ここに、客観世界に対して特立される主観世界を想定する立場が成立する。

ある事態について「主体にはこれこれと思われる」ということを表明する時、その事態把握が主体のただ一回の個人主観による把握である場合と、聴き手となる相手も、三人称的な彼も彼女にも共有できるより客観的な把握である場合とがあり得る。事態把握の責任が主体個人に帰せられるのか、場の全体的な認識に帰せられるのかということである。現代語では名詞句の対象把握の形式それ自体には右の色分けは必ずしもなく、準体助詞「の」に観察される程度である。主体の事態把握だという指標は「個人的な意見として」「私の考えでは」といった条件句によってそれを特立する形でしか示せない。

しかし、仮により客観的な事態把握とより主観的な事態把握を区別しているのなら、準体句の名詞句とク語法のそれとは符合するところがある。もっと言えば、この事態は、私にはそのように見える・思えるといった自発的な枠組みにあって、そうとしか見えない、思えないといった、自発を否定するところに生じるある種の不可能と共にある事態把握であることを標榜する形式がク語法だったのではないかということである。

ク語法はこのように、より客観的な事態の表現とは一線を画すと言わざるを得ない。しかし、ク語法が主体の主観的な事態把握だというとき、ある事態の描写が主観的な事態把握であるということを相手に伝える場合、あるいはそれを受け取る側からすれば、心的領域である主観は共有できない情報になる。従って、それを共有するためには、相互に今ひとつ了解されるべきことがらとして、あり得る認識ということが考えられる。比喩表現ではなく、事態に対する見立てというより他はない。ク語法はそういった客観的事実の事態に対して特立される可能的事態を表現する形式であると考える。

ク語法について森重（1946）は次のように指摘している。

> (15)「く」は前の句につけて其の全体を主体に対立した客観的な位置におき、之を客観しながめさせている、或は「く」と言うことによって主体は一歩退き前の句を更に主体的立場から正に前の句として客観しながめている、という様に考えられないか。斯かる客観しながめるという点に「く」のはたらきがあるように私は思う。
>
> 森重（1946：21）

この森重氏が捉えようとしたク語法の機能は、外界の現実世界とは並行的に捉えられる、

今一つの世界の描写である。換言すれば、それは話者の眼前に広がる個々具体の事物ではなく、それを一旦話者の内面に再構築した世界である。それを本研究では可能世界と称しておきたい。

例えば、ク語法が非現在の事態を表すという点において、まず未来の事態が即可能世界の描写であることは説明を俟たない。一方、過去の事態についてはどうであろうか。現在の話者からすれば過去の事態は既に実現した事態ではあるが、現在の世界とは異なる過去の世界を心内で想起していることになる。言うまでもないが、過去は直接知覚できる対象ではなく、記憶として保存された中から再構成しなければ表現できない。つまり、過去の事態の描写は現実の現在の事態とは異なる今一つの世界の描写であると言える。異なる世界の描写という点において過去の事態の描写と未来の事態の描写は同質である。同じことは、空間的に離れた事態についても言える。俯瞰された事態がそれである。不可視の領域を類推によって補完するということは、そういった可能性を含むものとして事態を描写していると言える。

しかし、ク語法の表す可能世界は有標的な性質を持つ意味特性であると考えられる。つまり、ある条件下でしかその具体的な形質を観察することができない。従って、本章では準体句という対立軸の中で述語動詞の偏在を確認してきたのである。同様に、次に述べる点は補足的ではあるが、ク語法の可能世界を捉える上で重要な論点であると思われる[10]。

次の表４・５はク語法の名詞句内の述語の種類を見たものである。

表４　ク語法句内の述語の種類

動詞	形容詞	助動詞	総計
124	62	345	531

表５　ク語法句内の述語助動詞の種類

ズ	ム	キ	リ	ケリ	ケム	ツ	ヌ	ス	総計
191	128	12	5	2	2	2	2	1	345

表４にあるように、ク語法の名詞句内の述語を品詞別に見ると、助動詞が最も多く３４５例確認される。その助動詞３４５例の内訳をみたものが表５だが、否定の助動詞「ズ」と推量の助動詞「ム」が非常に多く、所謂未然形接続する助動詞である両助動詞だけで全体の九割以上を占めている。「ズ」がク語法に接続する場合は「無いことが有る」というように、単なる事態の否定ではなく不在表現として機能する。また、「ム」は「ベシ」と同じようにモーダルな側面も有するが、テンスなどを含めた広義の未実現性を表す助動詞である。特に上代では個々の文法的意味は必ずしも分析的でなく未分化である傾向が強い。この両助動詞が不可視性を有するという点において、見えないものを想念として捉えようとするク語法の性質を示唆しているように思われる。

このように、ク語法が「見えないもの」を含み持つという点においてク語法が表す事態

は知覚対象たり得ない。では、その「見えないもの」を捉えるにはどのような行為によってなされるべきだろうか。それこそが正に「思フ」行為である。仮令そこに確信や推察、仮定や疑念を含んでいたとしても、否含んでいるからこそそれは可能世界として話者の内面に構築されるのである。一方で、(11) で見たように準体句の例は事態を対象としているのではなく、事態を内属させた形で言表された態度を叙法として表明しているに過ぎない。同じ「思フ」の目的格になりながらもク語法との大きな差はここにある。そして、ク語法が可能世界を表すとすることの最大の証左は (14) の例である。(14) の不自然さはこのク語法が可能的現実を表すという性質を直截に表していることに由来すると言えよう。

ここで、これまで挙げたク語法の諸例に照らし且つ、体系上の整いという観点から、(14) の例におけるク語法が対象とする事態を再考する必要がある。(14) d は「紐の解けること」は現実世界では未だ実現してはいなが、「紐」という対象を「紐が解けてしまうのだ」と見立てることで、それを契機として妻の自身への思慕を逡巡しているのである。即ち、当該歌は話者の心内で想起した想像を現実世界に投影したものと解釈される。この現実世界への投影とは未実現の事態であっても実現するものとして見做す行為である。つまり、未実現ではあるが実現可能性を十分潜在させた事態の描写である。それは、現実世界における未実現の事態世界とは区別して、話者の内面に構成される実現可能な事態の描写という意味で可能世界と呼ぶことができる。

ただし、「ム」との比較から言えば、助動詞「ベシ」は「ム」と意味上重なる部分も有り、厳密にその差異を見出すことが困難な場合も少なくない。従って、ク語法が可能世界を表すとする本章の主旨に照らせば、ク語法に「ベシ」の他「ラシ」や「メリ」なども含めてこれらが接続しないという事実は一見整合性を欠くように思われる。しかし、ク語法において「ベシ」などが接続しないことが翻って、「ム」と「ベシ」の異なりを示しているとも言える。もちろん、ここには更に論じるべき問題も多く、消極的な整理ではあるが、一先ずそのように見ることは上代語助動詞の体系を見直す上で一つの視点となり得るだろう。

以上、ク語法が表す事態を現実の事態が広がる世界とは異なる、話者の内面に生起する可能世界と捉え考察してきた。しかし、このような発想は何ら特殊なものではないだろう。なぜなら、外界の現実世界と話者の内面世界との乖離性は知覚対象と言語との写像関係という原理的な動機に支えられていると考えられるためである。これは一つの仮定ではあるけれども、そのようにみることによって、ク語法と動詞述語の対応は準体句のそれと比較した場合に大きな差異として捉えることができる。

6　まとめ

本章では、ク語法の表す可能世界の様相を述語動詞の偏りという視点から見てきた。特に、準体句の例である (11) bc はク語法の (14) の例と構文的は近似した形式であるが、(11) b「死ぬべき思へば」における、「ベシ」は話者の価値判断を濃厚に表しているという点でク語法と大きく異なる。そこに表されているのは当該の事態に対する話者の「望ま

しさ」の有無である。一方、ク語法にそういった「望ましさ」よりも、ただ事態がそうあることの描写に終始していると言える。先掲の森重氏の発言は、こういった事態把握のもとに「客観しながめる」と述べているのであるが、本章ではこれを可能的な現実として可能世界と捉え直したわけである[11]。このような事態把握のあり様は次のク語法終止の歌に端的に表れている。

（16）a.あしひきの山の黄葉にしづくあひて散らむ山路を君が越えまく〈公之超麻久〉（19・4225）

b.草枕旅に久しくあらめやと妹に言ひしを年の経ぬらく〈等之能倍奴良久〉（15・3719）

「年の経ぬらく」は、「旅にいつまでもいるものかと妻に言ったのに、年を越したことよ」と解釈されるが、越年することが極めて確実で実際にもそれが実現されてしまう。しかし、これを可能世界と見た場合、この歌は想像ではあるが空想ではなくて、あり得る事態として提示されているのだろうと思われる。つまり、ク語法の使用によってその事実を受け入れたくないという主体の切実さが表現としてあり、極めて客観的な事態をあえて確定的に述べるのではなく、主体の心的把握に留めるという点で推量や推定とは異なる。要するに、「経ぬらむ」でもなく、「経ぬらし」でもなく、「経ぬること」でもないところに、森重氏のいうところの突き放したような事態把握が考えられる。「年の経ぬらく」は、認めたくはない現実として越年してしまうことを提示しており、現実の事態への憾みや嘆きが分かちがたく結びついた、主体にとって、いまひとつの現実として措定されるところに、この詠嘆があるのではないか。

残された問題はなお少なくないが、ク語法が事態に対する主体の見立てや見做しを示す形式であり、現実の事態に対しては仮想的ながら、現実から切り離されることはなく、あくまでも可能的現実の世界を提示するものであったと位置づけたい。

注

1　ク語法の形態論的側面に関しては、現在、大野（1952）の所謂「aku」説が通説となっているが、必ずしも全ての問題が解決されたわけではなく、定説には至っていない。詳しくは井手（1946）を参照。

2　『万葉集』には（３）のように活用語に「見ユ」が後接した例が２２例確認される。これらの例が構文的にも解釈上も準体句のそれと異なることは内田（1983）、佐竹（1964、後に佐竹（2000）に所収）参照。

3　検索にあたっては『萬葉集電子総索引 CD - ROM 版』塙書房を使用した。また、表１を見ると「欲ル」が３０例と最も多い。しかし、「欲ル」に関しては、田上（2009）などで動詞述語としてカウントされておらず、「欲シ」と同列に扱い形容詞述語としてカ

ウントされている可能性がある。本章では、「欲シ」と区別してここに挙げたが、本章の立論に大きな影響はないと考える。というのも、後に見る「思フ」の例外的な例である、対象が眼前にあるにも関わらず使用されるような例が「欲ル」にはなく、話者が思い浮かべたその対象を希求するという例しか見られない。従って、本論の主旨から言えば、この「欲ル」はク語法における一般的な「思フ」の例に準じて考えてよいことになる。因みに、表１からはク語法が動詞述語の目的格になる例として他に「欲ル」「知ル」「忘ル」がある。詳細な個々の考察は措くが、これらは、全て「思フ」に準じて考えてよく、ク語法が後述する可能世界を表すことを更に補強する。とは言え、「欲ル」の用例数の多さを見るにク語法の中で「欲ル」という語が選択されていることは小さな問題ではない。よって、改めて「欲ル」という語から眺めたク語法のあり様を考える必要がある。そのためにも本章では基本的な枠組みを示しておき、詳しくは別稿に譲りたい。一方で、表２の準体句の場合にも「知ル」が含まれるが、他に「置ク」「待ツ」「終フ」等がある。ク語法が知覚や認識的な行為を表す述語しかないのに対し、準体句はこのように物理的な動作を表す述語が存在する。この点においても準体句とク語法とは意味論的差異が存在すると言える。

4　所謂ミ語法が話者の主観に根差した表現であることは松浦（2000）、（2001）を参照。

5　（６）bの２１０２番歌に加え、１２７４、１９５４、２１０８番歌がそれである。全て、準体句内述語、主文述語双方に助動詞「ム」が付く。

6　森重（(1957)、後に森重（1967）所収）は当該例のような「見ル」を単純な動作的な意味としてではなく、話者の感傷や概念把握に根差した心的な作用であることを述べている。かかる心的作用としての「見ル」が本章で述べるようにク語法において偏りを見せるという点において、本章の考察は森重と軌を一にしている。

7　内田（2013：35）参照。

8　「思へば」となる一七例の中には形容詞の例はないが、（12）b はク語法内の述語が形容詞「惜シ」である。しかし、当該例の主文述語「思ひかねつも」は否定表現であり、名詞句内述語と主文述語が同語反復的というわけではない。従って準体句例（11）a と同列に扱う必要はない。

9　次の例は原文表記が「言」であること、また係助詞が挿入されている点など注意を要するが「コト」が「思フ」の対象となった例として一例確認される。

死なむ命ここは思はずただしくも妹に逢はざることをしそ思ふ〈言乎之曽念〉
（12・2920）

10　同じく、補足的ではあるが、本研究にとって重要な論点として内田（2015）がある。準体句の例に多く見られた「見ル」や「聞ク」などによって表される知覚対象は一般にその知覚する対象が現在・眼前になければならないという点で極めて現場依存的である。逆に、ク語法の表す可能世界はそういった時間・場所に拘束されない。その点に関して次のような例が内田（2015：135）において報告されている。

a.めづらしき君が家なるはだすすき穂に出づる秋の過ぐらく〈過良久〉惜しも

（8・1601）

b.故郷の飛鳥はあれどあをによし奈良の飛鳥を見らく〈見楽〉し良しも

（6・992）

このうち、「過グ」は状態性動詞で助動詞「ヌ」の接続を主とするもので、「見ル」は動作性動詞で助動詞「ツ」の接続を主とするものである。一般に状態性動詞は結果の状態に言及する動詞なので過程を持たない。逆に、動作性動詞はその語彙的意味の中に局面としての過程を持つ動詞である。ところが、a では、今まさに秋が過ぎて行こうとしているその様相を捉えて感慨を述べており、その過程を表出している。一方で b は、「見ること」そのものを包括的に捉えている点で過程は捨象されていると言える。つまり、ある事態がク語法によって名詞句として対象化される中で、主体と対象の位置関係や時間性といった現場依存的な要素がク語法においては二次的に置かれているのである。

11　このように、事実とは異なる今一つの世界を仮構する形式として従来、「反実仮想」と呼ばれてきたものに助動詞「マシ」が存在する。ク語法はこの「マシ」に非常に近い意味を表していると言えよう。しかし、「マシ」と異なるのは、「マシ」が希求的意味を担うという話者の価値判断が付加されるのに対し、ク語法にはそういった価値判断としての意味は「マシ」と比較して相対的に見出すことは出来ない。そもそも「マシ」は作用的な述語性を担う形式であり、素材的に事態の描写を担うク語法とは異なる次元にあるからである。一方で、準体句の例である（11）bc はク語法の（14）と構文的は近似した形式であり、かつ、素材的な事態の描写という点でも近いが、本文で述べたようにク語法とは大きく異なる。

第２章　ク語法と願望表現「欲ル・欲シ」

１　はじめに

上代語における名詞句形成形式であるク語法が文の格成分として目的格の位置にくるとき、その主文述語には次の表１のような偏りがみられる。併せて、同じく名詞句形成形式である準体句の場合も表２に示す。

表１　ク語法が目的格になる場合の主文述語

欲ル	思フ	知ル	見ル	忘ル	見ユ	総計
30	18	9	6	2	1	66

表２　準体句が目的格になる場合の主文述語

46	3	3	2	2	2	1	59
見ル	聞ク	思フ	置ク	知ル	待ツ	終フ	総計

表１からク語法は「欲ル」や「思フ」のような思惟を表す述語の対象になりやすく、表２から準体句は「見ル」や「聞ク」といった知覚を表す述語の対象になりやすいという傾向がうかがえる。この傾向からみれば、ク語法における「見ル」や準体句における「思フ」が例外的にみえるが、第１章ではそういった例外を含めた統一的な説明を目指した。まず、注目したのがク語法における「見ル」の例である。そこで準体句との比較から明らかになったのは、ク語法は述語が「見ル」の場合であっても、対象の事態は非現在か評価かという話者の主観に根差した認識を表しているという点である。そこから、ク語法が表す対象は眼前の事態を事実として差し出すのではなくて、そのように思われるという話者の想定を表すものであると結論付けた。これは、準体句とは異なる意味論的意味をク語法に求める観点である。

しかし、考察の中心は「見ル」と「思フ」で、「欲ル」の例が準体句には存在せず十分な比較対象となり難いことから考察の対象には含めなかった。ところが、「欲ル」は表１のク語法において半数近くの用例数を占めており、ク語法を特立した名詞句とみる本研究の立場からすれば、述語が「欲ル」に偏るという事実は大きな意味を持つように思われる。加えて、用例数の多寡だけでなく、その内容にも注意する必要あるだろう。『万葉集』には「欲ル」とその形容詞形「欲シ」が９６例確認される。これらの内でク語法が共起する場合としない場合とで差異はあり得るのだろうか。もし、あるのだとしたらそれはどのような差異で、また第１章で得られた結論とどのように関連するのだろうか。以上、本章では差異

の有無、第１章との関連という二つの問題意識のもとに論を進めたい。

２　考察対象

一般に何かの実現を願う言語表現を希望表現と呼ぶ。希望表現はさらに願望表現と希求表現とに分かれる。願望表現は実現させたい事態の動作主が一人称である場合で、希求表現はニ・三人称である場合である[1]。上代語の願望表現には終助詞による「ナ」「ネ」「ナム」「モガ」「シカ」など多様であるが、「欲ル」「欲シ」は意味としてはそれらに近く[2]、『万葉集』にある９６例は全て願望の意味で希求を表す例は確認できない。今、「欲ル」「欲シ」を品詞の違いを措いてこれらを一括する。この中で、願望の対象を語彙別に見ると大きな傾向があることに気付かされる。

表３－a　希求対象語彙別表（前半）

	「見ル」類		名詞								
対象語	見ル	見ス	目	子島	野島	若子	黒き色	我	命	雨	酒
用例数	56	1	8	1	1	1	1	1	1	1	1
小計		57									16

表３－b　希求対象語彙別表（後半）

その他活用語類											
長シ	着ル	懸ク	問フ	行ク	聞ク	守ル	染ム	寝	有リ	不定	総計
7	5	2	1	1	1	1	1	1	1	2	96
									21	2	96

表３は便宜上二段に分割している。この中で、「見ル」と「見ス」を合わせた「見ル」類が５７例と、全体の半数以上を占め、次に多い名詞の「目」とその他を圧倒している。この中で、同じ「見ル」類でも以下のようにク語法の包摂が有る場合と無い場合の２通りが確認される。

（１）a.見まく欲り〈欲見〉我がする君もあらなくになにしか来けむ馬疲るるに（２・164）

b.見欲しきは〈欲見者〉雲居に見ゆるうるはしき十羽の松原童どもいざわ出で見む（13・3346）

（１）a がク語法によって「見ル」が包摂されている例、（１）b がそうでない例である。そこで改めて表１をク語法の有無によって分けると次のようになる。

表４　対象語彙別用例数（ク語法有り）

	「見ル」類		その他活用語類							
対象語	見ル	見ス	懸ク	行ク	守ル	寝	染ム	聞ク	問フ	総計
用例数	43	1	2	1	1	1	1	1	1	52
小計	44		8							52

表５　対象語彙別用例数（ク語法無し）

	「見ル」類	名詞									その他活用語類				
対象語	見ル	目	子島	野島	若子	黒き色	我	命	雨	酒	長シ	着ル	有リ	不定	総計
用例数	13	8	1	1	1	1	1	1	1	1	7	5	1	2	44
小計	13	16									13			2	44

表４からク語法による使用が５２例で、表５のク語法の無い場合は４４例とそれぞれほぼ同数であるが、その内訳はかなり異なっているように見える。無論、ク語法は活用語を名詞化する接尾辞なので、表４において名詞は入り得ない。また、その他活用語類も孤例が多く、比較対象として有効かどうかは注意する必要がある。その中にあって、「見ル」類はク語法有りの場合が４４例でク語法無しの場合１３例の約３倍の数を示している。

ここで注意したいのが、ク語法有りの場合とク語法無しの場合の構文的な特徴である。ク語法有りの場合は願望行為「欲ル」「欲シ」の対象としてク語法によって包摂される事態がある。つまり、願望行為と願望対象という２つの事態から成る表現である。一方で、ク語法無しの場合は「見ル」やその他の活用語はいずれも連用形（＋「ガ」）＋「欲ル」「欲シ」という形式であって、「見ル」などの活用語は連用修飾成分として「欲ル」「欲シ」にかかって全体として１つの事態を表している。このような構文上の違いが以下にみる意味の違いの一因となっているとも考えられる。この点に関しては７．１節で改めて考察する。

まずはク語法の有無の差異を観察する上で用例上最も多い「見ル」類を中心に論を進めていく。

３　「見ル」類の意味分類

ところで、ここでの「見ル」の意味であるが、単純に眼前の対象を目視するという意味を表す例ばかりではない。「見ル」類の意味はさらに３つの意味に分類できる。以下、ク語法有りの場合とク語法無しの場合を合わせてそれぞれ挙げる。

（２）【眺望】

a. 馬並めてみ吉野川を<u>見まく欲り</u>〈欲見〉うち越え来てそ瀧に遊びつる（7・1104）

b. 神からやそこば貴き山からや<u>見が欲しから</u>む〈見我保之加良武〉皇神の裾回の山の渋谿の崎の荒磯に（17・3985）

（3）【視認】

a. 朝に日に見まく欲りする〈欲見〉その玉をいかにせばかも手ゆ離れざらむ（3・403）

b. 誰が園の梅にかありけむここだくも咲きてあるかも見が欲しまでに〈見我欲左右手二〉（10・2327）

（4）【逢瀬】

a. あしひきの山に生ひたる菅の根のねもころ見まく欲しき君かも〈懃見巻 欲君可聞〉（4・580）

b. うまさけの三諸の山に立つ月の見が欲し君が〈見我欲君我〉馬の音そする（11・2512）

（2）は見る対象が自然や宮など景物になっている例である。このような意味を「眺望」と仮称する。「眺望」は眼前の景色を望む行為で、そのまま「見る」と訳すことができる。次の（3）は見る対象が嘱目である点で「眺望」に近いが、（3）a で「玉を見たい」と歌われる玉が恋人の見立てとして表現されている点で「眺望」とは異なる。実際には逢瀬を望みそれを眼前の嘱目に仮託しているのである。つまり、対象の事物を誰かのよすがとして見做す行為である。これを「眺望」とは区別して「視認」と仮称する。（4）は「見ル」の対象が直接人を指しており（3）をより直接的に表現したものである。これを「逢瀬」と仮称する。「逢瀬」は誰か（主に恋人）との邂逅を表す行為で「逢う」と訳すことができるような例である。

以上、3種の意味分類をク語法の有無によって見たものが以下である。

表6　「見ル」類の意味内容（ク語法有り）

逢瀬	視認	眺望	総計
26	12	6	44

表7　「見ル」類の意味内容（ク語法無し）

逢瀬	視認	眺望	総計
2	3	8	13

表6からク語法有りの場合は「逢瀬」に偏り、表7からク語法無しの場合は「眺望」に偏っていることが分かる。

4　同種の意味間における相違点

表6・7のように、ク語法が有る場合と無い場合ともに、偏りはあるものの3種の意味

がそれぞれに完備されている。ところで、ここで問題になるのが、例えば同じ「逢瀬」を表す例でもク語法有りの場合とク語法無しの場合とでは表現や意味に何らかの差異があるのか否かという点である。「視認」「眺望」についても同断である。以下、説明の便宜上「逢瀬」「視認」「眺望」の順で差異の有無についてそれぞれについて述べる。

４．１　「逢瀬」

「逢瀬」のク語法有りの場合は２６例確認される。ク語法有り「見ル」類の中で最も多い用例である。いずれも恋人との逢瀬を望む表現であるという点では共通するが、特徴的な表現がみられる。それは、逢瀬を望む行為が継続的に行われていることが明示されている点である。限定的か永続的かの違いはあるものの、いずれにせよ一定の時間幅を持った中で願望行為が続いたことを示しており、継続性を表す表現が様々な形式でみられる。このような継続表現は以下の３つの型に分類される。

（５）【期間明示型】

a.恋ひ死なむ時は何せむ生ける日のためこそ妹を見まく欲りすれ〈生日之 為社妹乎 欲見為礼〉（4・560）

b.春日山朝立つ雲の居ぬ日なく見まくの欲しき〈不居日無 見巻之欲寸〉君にもあるかも（4・584）

c.このころは千年や行きも過ぎぬると〈千歳八往裳 過与〉我や然思ふ見まく欲りかも〈欲見鴨〉（4・686）

d.一昨日も昨日も今日も〈前日毛 昨日毛今日毛〉見つれども明日さへ見まく欲しき君かも〈見巻 欲寸君香聞〉（6・1014）

e.君が目の見まく欲しけくこの二夜千年のごとも〈見欲 是二夜 千歳如〉我は恋ふるかも（11・2381）

f.三日月のさやにも見えず雲隠り見まくそ欲しきうたてこのころ〈見欲 宇多手比日〉（11・2464）

g.恋ひ死なむ後は何せむ我が命生ける日にこそ見まく欲りすれ〈生日社 見幕欲為礼〉（11・2592）

h.韓衣君に打ち着せ見まく欲り〈欲見〉恋ひそ暮らしし雨の降る日を〈雨零日乎〉（11・2682）

i.大き海の荒磯の渚鳥朝な朝な見まく欲しきを〈朝名旦名 見巻欲乎〉見えぬ君かも（11・2801）

j.道をた遠み山川の隔りてあれば恋しけく日長きものを見まく欲り〈氣奈我枳物能乎 見麻久保里〉思ふ間に玉梓の使ひの来れば嬉しみと我が待ち問ふに（17・3957）

k.秋と言へば〈秋等伊問婆〉心そ痛きうたて異に花になそへて見まく欲りかも〈見

麻久保里香聞〉（20・4307）

（５）は波線部にあるように逢瀬を望む期間や時間が明示されている。また、それらは逢瀬を望む期間が短いものではなくて長いものであることを述べるために表現されており、それだけに思いの深さを強調する意図を持った表現である。このように（５）は願望行為が発話時に瞬間的に実現したのではなくて、長期間に継続的に行われていたことを示している。

（６）【動作明示型】

a.天飛ぶや軽の道は我妹子が里にしあればねもころに見まく欲しけどやまず行かば〈欲見騰 不已行者〉人目を多みまねく行かば人知りぬべみさね葛（2・207）

b.相見ては面隠さるるものからに継ぎて見まくの欲しき君かも〈継而見巻能 欲公毳〉（11・2554）

c.昨日見て今日こそ隔て我妹子がここだく継ぎて見まく欲しきも〈幾許継手 見巻欲毛〉（11・2559）

d.妹が目の見まく欲しけく〈見巻欲家口〉夕闇の木の葉隠れる月待つごとし〈月待如〉（11・2666）

e.玉の緒の間も置かず見まく欲り〈玉緒之 間毛不置 欲見〉我が思ふ妹は家遠くありて（11・2793）

f.玉だすきかけねば苦しかけたれば継ぎて見まくの欲しき君かも〈續手見巻之欲寸君可毛〉（12・2992）

（６）は期間を表す表現はないが、波線部にある述語「継グ」（６）bcf、「置カズ」（６）e、「ヤマズ行ク」（６）a、「待ツ」（６）d などによって願望行為が間断なく継続したことを示している。

（７）【嘱目明示型】

a.あしひきの山に生ひたる菅の根のねもころ見まく欲しき君かも〈懃見巻 欲君可聞〉（4・580）

b.栲縄の長き命を〈栲縄之 永命乎〉欲しけくは絶えずて人を見まく欲りこそ〈欲見社〉（4・704）

c.妹が目を見まくほり江のさざれ波しきて〈見巻欲江之 小浪 敷而〉恋ひつつありと告げこそ（12・3024）

d.見まく欲り〈見麻久保里〉思ひしなへに縵蘿〈賀都良賀氣〉かぐはし君を相見つるかも（18・4120）

（７）は継続性を反復や伸長を表象する嘱目に託した表現である。「菅の根」（７）a や「縵

蘿」（７）d は根や茎が長く成長することから転じて恒久性や永続性の象徴として就中でも繰り返し見られる表現である。「栲縄」（７）b は「長き命」にかかることから分かるように、その「長さ」に着目した表現である。「さざれ波」（７）c は途絶えることなく反復される自然現象がそのまま行為の永続的な反復を表している。（７）はこのような嘱目のあり様のように願望行為が継続的に行われていることを示している。

（８）【その他】

a.見まく欲り〈欲見〉我がする君もあらなくになにしか来けむ馬疲るるに（2・164）

b.沖辺には深海松採り浦回にはなのりそ刈る深海松の見まく欲しけ〈見巻欲跡〉どなのりその己が名惜しみ間使ひも遣らずて我は生けりともなし（6・946）

c.相見まく欲しき〈相見〉がためは君よりも我そまさりていふかしみする（12・3106）

d.今日もかも都なりせば見まく欲り〈見麻久保里〉西の御厩の外に立てらまし（15・3776）

e.なでしこが花取り持ちてうつらうつら見まくの欲しき〈美麻久能富之伎〉君にもあるかも（20・4449）

このように、「逢瀬」ク語法有りの２６例中、合計２１例がその歌の中に継続性を表す表現を有している。（８）に示した残る５例にもそういった継続表現が直接現れてはいないものの、基本的に願望行為の継続性に歌の主眼があると見てよい。

次に、ク語法無しの場合を見ると、少数ながら２例確認できる。

（９）a.ゆくりなく今も見が欲し〈率尓 今毛欲見〉秋萩のしなひにあるらむ妹が姿を（10・2284）

b.うまさけの三諸の山に立つ月の見が欲し君が馬の音そする〈見我欲君我 馬之音曽為〉（11・2512）

いずれも恋人の逢瀬を願望するという点ではク語法有りの場合と大差はない。しかし、上の２例は歌の表現として願望の行為が瞬間的であるという特徴がある。例えば、（９）a は潜在的には継続して逢瀬を望んでいたかもしれないが、波線部にあるようにそういった思いが今この瞬間に不意に立ち現われた驚きと感慨を表現したものである。また、（９）b は瞬間性を表す表現はないが、歌の主旨としては逢瀬が今まさに実現するその瞬間に表現の重点があり、「見が欲し」は「君」の一属性を述べているに過ぎない。特に、「馬の音そする」は逢瀬の実現が確実であることを表しているが、ク語法有りの場合には逢瀬は願望に留まり確実な実現を表した例はない。つまり、（９）は願望行為の継続性は一切背景化されており、瞬間的に実現する逢瀬への期待に表現の重点が置かれている。

このように、時間表現という点から見ると次のク語法の場合は継続性を表し、ク語法無

しの場合は瞬間性を表すという対立がみられる。

４．２　「視認」

「視認」は直接的には眼前の嘱目を目視しているものの、最終的には当該の人物との逢瀬を望む表現である。その点において「逢瀬」と類似した表現構造をなしていると予想される。

まず、ク語法有りの場合であるが、ク語法有りの「逢瀬」（５）（６）（７）と同様に継続性を表す表現がみられるものがある。ここでも「期間明示型」「動作明示型」「嘱目明示型」の３つの型がみられるが一括して示す。

（10）a.朝に日に見まく欲りする〈朝尓食尓 欲見〉その玉をいかにせばかも手ゆ離れざらむ（3・403）【期間明示型】

b.海神の持てる白玉見まく欲り千度そ告りし〈見欲 千遍告〉潜きする海人は（7・1302）【期間明示型】

c.底清み沈ける玉を見まく欲り千度そ告りし〈欲見 千遍曽告之〉潜きする海人は（7・1318）【期間明示型】

d.見まく欲り恋ひつつ待ちし〈欲見 戀管待之〉秋萩は花のみ咲きて成らずかもあらむ（7・1364）【動作明示型】

e.見まく欲り我が待ち恋ひし〈欲見 吾待戀之〉秋萩は枝もしみみに花咲きにけり（10・2124）【動作明示型】

f.朝なぎに来寄る白波見まく欲り〈朝奈藝尓 来依白浪 欲見〉我はすれども風こそ寄せね（7・1391）【嘱目明示型】

このうち(10) abc は期間が明示されている例、(10) de は動作が明示されている例、(10) f は嘱目が明示されている例である。以上、「視認」を表す１２例中６例に継続性を表す表現が使用されている。「逢瀬」の場合とは異なりそれほど目立った数ではない。残る６例に関しては割愛するが継続表現はみられなかった。しかし、少なくとも願望行為が継続的でないことを示す要素はない。また、注目すべき特徴として１２例いずれも最終的には恋人との逢瀬を願望する歌である点である。これは、次に示すク語法無しの場合３例とは大きく異なる点である。

次に、ク語法無しの場合の３例を見る。

（11）a.誰が園の梅にかありけむここだくも咲きてあるかも見が欲しまでに〈見我欲左右手二〉（10・2327）

b.橘は花にも実にも見つれどもいや時じくになほし見が欲し〈奈保之見我保之〉（18・4112）

c.思ふそら苦しきものを奈呉の海人の潜き取るといふ白玉の見が欲し〈見我保之〉御面直向かひ見む時までは〈将見時麻泥波〉松栢の栄えいまさね貴き我が君（19・4169）

先に、「視認」の意味として、眼前の嘱目に仮託して結局は逢瀬を願望するものと述べたが、これはク語法無しの場合には必ずしも当てはまらない。例えば、（11）ab はそういった逢瀬への願望は読み取りにくく、純粋に眼前の花の美しさを述べているだけである。次に示す「眺望」とは区別されるため便宜上「視認」に含めたが、（11）ab はク語法有りの場合における「視認」とは大きく異なる。

一方、（11）c は「御面」に直接かかることから「視認」に含めたが、表現としては前２首とは異なり明らかに逢瀬を願望する表現である。ただし、結句の「我が君」が恋人ではなくここでは作者の母親であるという点はク語法が必ず恋人であった場合とは異なる。また、「見が欲し」直後の「向かひ見む時」では助動詞「ム」が使用されており、実際に逢う時と、今現在逢いたいという願望行為が時間表現として対立的に扱われている。であるならば、先に見たク語法無しの場合の「逢瀬」が瞬間的な表現の中にある例に準じて考えて、（11）c も願望の行為そのものの発生は瞬間的であると捉えられる。

以上、「視認」においては、ク語法有りの場合は表現構造という点からも「逢瀬」に近似している。しかし、ク語法無しの場合は瞬間性を表す「逢瀬」と近似する例と、「逢瀬」としての意味よりも、次に示す「眺望」に近い意味を表している例のみである。

３．３　「眺望」

「眺望」の意味は文字通り眼前にある風景を望み見るという意だが、古代において「見る」ことは単なる視認動作ではなく高度な宗教性と政治性を持つ行為でもあった。従って、「見る」対象は予寿され得るべき版図であったし、その主体は支配者であることに大きな意味があった（例えば島田（1989））。以下のク語法有りの場合の「眺望」を表す全６例はまさにそういった文脈の中に措定される例である。

（12）a.葦辺には鶴が音とよむ見る人の語りにすれば聞く人の見まく欲りする〈語丹為者 聞人之 視巻欲為〉御食向かふ味経の宮は見れど飽かぬかも
（六・一〇六二）

b.馬並めてみ吉野川を見まく欲りうち越え来てそ〈欲見 打越来而曽〉瀧に遊びつる（7・1104）

c.秋山にもみつ木の葉のうつりなば更にや秋を見まく欲りせむ〈移去者 更哉秋乎 欲見世武〉（8・1516）

d.見まく欲り来しくも著く〈欲見 来之久毛知久〉吉野川音のさやけさ見るにともしく（9・1724）

e.衣手常陸の国の二並ぶ筑波の山を見まく欲り君来ませりと〈欲見 君来座登〉暑けくに汗かきなけ木の根取りうそぶき登り（9・1753）

f.み吉野の瀧もとどろに落つる白波留まりにし妹に見せまく欲しき〈妹見西巻欲〉白波（13・3233）

これは次に示すク語法無しの場合と大差がないよう見えるが、微妙な表現上の差異が存在する。まず、(12) ac は波線部にあるように条件句の後件にク語法が出現している。つまり、「見たい」という行為そのものが特定の条件下でしか実現しないことを表している。その他の b~f は、その対象を見るためには常に移動を伴わなければならず、そういった努力行為が成就しなければ「見る」ことが達成されないのである。つまり、a~f いずれの例も「見る」ことが絶対的に確定されているわけではないのである。

一方で、ク語法無しの場合は「見る」という行為に宗教性や政治性がある点は前者と同断であるが、「見る」ことの実現に疑念の入る余地のない、現在の現実に絶対的に固定した対象として把握されるものである。ク語法有りの場合のように特定の条件が付加されておらず見えるかどうかという点はそもそも前提にされていない。

(13) a.明日香の古き都は山高み川とほしろし春の日は山し見が欲し〈山四見容之〉秋の夜は川しさやけし朝雲に鶴は乱れ夕霧に（3・324）

b.高山はさはにあれども二神の貴き山の並み立ちの見が欲し山と〈見果石山跡〉神代より人の言ひ継ぎ国見する筑波の山を冬ごもり（3・382）

c.み吉野の秋津の宮は神からか貴くあるらむ国からか見が欲しからむ〈見欲将有〉山川を清みさやけみうべし神代ゆ定めけらしも（6・906）

d.神からか見が欲しからむ〈見欲賀藍〉み吉野の瀧の河内は見れど飽かぬかも（6・910）

e.萩の枝をしがらみ散らしさ雄鹿はつま呼びとよむ山見れば山も見が欲し〈山裳見白石〉里見れば里も住み良しもののふの八十伴の緒のうちはへて（6・1047）

f.見欲しきは〈欲見者〉雲居に見ゆるうるはしき十羽の松原童どもいざわ出で見む（13・3346）

g.出で立ちて振り放け見れば神からやそこば貴き山からや見が欲しからむ〈見我保之加良武〉皇神の裾回の山の渋谿の崎の荒磯に朝なぎに（17・3985）

h.紅ににほひ散れども橘の成れるその実はひた照りにいや見が欲しく〈伊夜見我保之久〉み雪降る冬に至れば霜置けどもその葉も枯れず常磐なす（18・4111）

このように、「眺望」に関しては、見える対象が話者の眼前に現在確実に存在しているか否かという対象の存立の確定性という点でク語法有りの場合とク語法無しの場合が対立し

ている。

以上、「逢瀬」「視認」「眺望」の３つの型についてみてきたが、まとめると以下のようになる。まず、３つの型の意味関係においてク語法有りの場合とク語法無しの場合とで差があった。すなわち、「視認」においてはク語法有りの場合は「逢瀬」に近く、ク語法無しの場合は「眺望」に近いという関係である。その上で、「逢瀬」は継続か瞬間かという点でク語法有りの場合とク語法無しの場合が対立しており、「眺望」は対象の存立が非確定か確定かという点でク語法有りの場合とク語法無しの場合が対立している。これを、さらに整理すればク語法有りの場合は継続性と非確定性を表しており、ク語法無しの場合は瞬間性と確定性を表していると言える。このような関係が何を意味するのかは７節の考察で述べる。

５　その他の対象語彙

この節では願望対象語彙が活用語である例に限定してク語法有りとク語法無しの場合を比較する。まず、ク語法有りの場合であるが、その異なり語は「懸ク」「行ク」「守ル」「寝」「染ム」「聞ク」「問フ」と幅は広い。しかし「懸ク」の２例以外はいずれも孤例である。かつ、時間表現や非確実性という点でそれらを顕著に示す例は見出し難い。わずかに次の２例が継続を表す時間表現を持つ例である。

（14）a.このころの〈比日〉眠の寝らえぬはしきたへの手枕まきて寝まく欲りこそ〈寐欲〉（12・2844）

b.木高くて里はあれどもほととぎすいまだ来鳴かず鳴く声を聞かまく欲りと〈伎可麻久保理登〉朝には〈安志多尓波〉門に出で立ち夕には〈由布敝尓波〉谷を見渡し恋ふれども（19・4209）

他の例にはそういった表現はみられなかった。しかし、反対に瞬間性や確実性を表すような例もみられなかった。

次に、ク語法無しの場合をみる。まず「長シ」７例と「有リ」１例についてである。

（15）a.かくしつつあらくを良みぞたまきはる短き命を長く欲りする〈長欲為流〉（六・九七五）

b.何せむに命をもとな長く欲りせむ〈永欲為〉生けれども我が思ふ妹にやすく逢はなくに（一一・二三五八）

c.ちはやぶる神の持たせる命をば誰がためにかも長く欲りせむ〈長欲為〉（一一・二四一六）

d.恋ひつつも後も逢はむと思へこそ己が命を長く欲りすれ〈長欲為礼〉（一二・二八六八）

e.我が命の長く欲しけく〈長欲家口〉偽りをよくする人を捕ふばかりを

（一二・二九四三）

f.赤帛の純裏の衣長く欲り〈長欲〉我が思ふ君が見えぬころかも

（一二・二九七二）

g.我が命は惜しくもあらずさにつらふ君によりてそ長く欲りせし〈長欲為〉

（一六・三八一三）

h.鹿脊山のまに咲く花の色めづらしく百鳥の声なつかしきありが欲し〈在杲石〉住み良き里の荒るらく惜しも（六・一〇五九）

「長シ」の例では、実際に願望されているのは「命」や「縁」であり、それらが末長く存続することを表している。従って、ここでの「長シ」も「欲ル」に連用修飾的に掛っている。同様に、（15）h「有リ」の例も願望の対象は「住み良き里」であり、繫辞としての役割を果たしているに過ぎない。これらがク語法になり得ないのは、問題になる実際の願望の対象が名詞であって具体的な行為内容を表していないため、活用語を名詞化するク語法とは相容れないからであると考えられる。

次に５例確認される「着ル」の例である。

（16）a.時ならぬ斑の衣着欲しきか〈不時 斑衣 服欲香〉島の榛原時にあらねども

（七・一二六〇）

b.橡の衣は人皆事なしと言ひし時より着欲しく思ほゆ〈曰師時従 欲服所念〉

（七・一三一一）

c.橡の解き洗ひ衣の怪しくもことに着欲しきこの夕かも〈殊欲服 此暮可聞〉

（七・一三一四）

d.筑波嶺の新桑繭の衣はあれど君がみ衣しあやに着欲しも〈安夜尓伎保思母〉或本の歌に曰く「たらちねの」、また云はく「あまた着欲しも〈安麻多伎保思母〉」

（一四・三三五〇）

「着ル」は欲ル・欲シの願望対象語彙が動作動詞である例の中で唯一ク語法にならない動詞である。「着ル」がク語法になり得ない理由を積極的に求めるのは容易ではないが、上記５例の歌における表現の類似性から慣用的に定着したという可能性は十分考えられる。従って、ここにク語法との差異を見出すのはあまり意味を持たないかもしれない。しかし、時間表現という観点から見ると、先に見たク語法無しの例が瞬間性を表していたことと同様の傾向を覗うことができる。例えば、（16）ac の歌の表現としては他のいかなる時でもなく現在の瞬間が特立されており、願望行為が今まさに実現したことを表している。このように考えると（16）b はその反例になるようにも見える。確かに、「より」が表す起点時から現在という時間幅に継続性を認めることもできる。ところが、「言ひし時」という表現にあるように、願望行為が成立した起点時が示されている点はク語法有りの場合とは大きく異なる。ク語法有りの場合は願望行為が継続している期間は示されていても、その行為が

成立した瞬間を示している例は１例も確認できない。

因みに、（16）d では以上述べたような瞬間性・継続性いずれの時間表現も認めることができない。同様に、ク語法有りの場合のその他活用語の例「懸ク」「行ク」「守ル」「染ム」「問フ」においてもそのような時間表現を積極的には認めることができなかった。だが、そもそも、これは時間表現の表示が絶対的ではないというだけのことであり、後述する本章の結論に支障を来すものではない。

6　助動詞「ム」の接続

以上、見てきたク語法有りの場合の例ではいずれの例も「～まく」となっており、動詞＋助動詞「ム」＋「ク」という形式をとっている。一方、ク語法無しの場合は助動詞「ム」が「欲ル・欲シ」の前項にくることはない。ただし、後項にくる例はあった。

（17）a.望多の嶺ろに隠り居かくだにも国の遠かば汝が目欲りせむ〈奈我目保里勢牟〉
（14・3382）
b.駒造る土師の志婢麻呂白くあればうべ欲しからむ〈諾欲将有〉その黒き色を
（16・3845）

いずれにせよ、ク語法有りの場合は助動詞「ム」の接続が義務的であるということである。そうすると、述べてきたク語法有りの場合と無しの場合の差異というのはこの「ム」の意味に由来するものであって、ク語法はそういった差異化に関与していないとも考えられる。しかし、一方のク語法無しが前項に「ム」を接続しないのもなぜだろうか。集中には以下のような例がある。

（18）a.ほととぎす来居も鳴かぬか我がやどの花橘の地に散らむ見む〈地二落六見牟〉
（10・1954）
b.この夕秋風吹きぬ白露に争ふ萩の明日咲かむ見む〈明日将咲見〉
（10・2102）
c.秋風はとくとく吹き来萩の花散らまく惜しみ競ひ立たむ見む〈競立見〉
（10・2108）

このような例から類推して例えば「*見む欲しからむ」といった形式が生産可能であると考えられるが、実際にそういった例は確認できない。しかし、本来願望行為は願望する事態が未実現だからこそ願望するのであって、「欲ル・欲シ」の前項に「ム」が接続していなくても、願望対象の事態が未実現であることは含意されているはずである。従って、「ム」の接続は「欲ル・欲シ」からすると随伴的な要素であると言える。そう考えると寧ろ逸脱的なのはク語法において「ム」の接続が義務的に見えるということだろう。しかし、注意

しなければならないのは、そもそものク語法と「ム」の接続は義務的ではないという点である。集中には以下のような例がある。

（19）中にを寝むと愛しくしが語らへばいつしかも人となり出でて悪しけくも良けくも見むと〈安志家ロ毛 与家久母見武登〉（5・904）

亡児追悼歌である当該歌中でク語法によって包括される事態「未熟だろうと立派だろうと」は未実現の事態であるが、ク語法内に「ム」の接続があるわけではない。従って、ク語法においても「ム」の接続は随伴的な要素であるということになる。ではなぜ、かかる「欲ル・欲シ」という形式おいては例外なく「ム」の接続が行われるのだろうか。この点に関しては以下の７．２の考察で述べる。

７　考察

本章の問題意識はク語法有りの場合とク語法無しの場合の差異の有無、第１章との関連という２つにあった。まず、差異の有無から述べれば、時間表現と確定性という点で明確な対立がみられた。そうすると、このク語法有りの場合にみられる特徴は第１章における主張とどのように関連するのかが問われるだろう。その上で、表１における偏りに意味を求めることができるだろう。以下、差異の有無、第１章との関連の順で考察を進める。

７．１　差異の有無

４節と５節において、ク語法有りの場合と無しの場合との差異を見た。改めてまとめると以下のようになる。

ク語法有り・・継続的。「視認」≒「逢瀬」。対象の存立が非確定的。
ク語法無し・・瞬間的。「視認」≒「眺望」。対象の存立が確定的。

ク語法有りの場合における継続性と非確定性は全く異なる要素のようにみえる。問題はク語法無しの場合との違いが原理的に何に由来するのかという点である。

まず、「逢瀬」において事態を継続的に述べるということは、特定の時点を指定しない漠然とした行為の成立を表している点で脱時間的・脱現場的と言える。従って、提示される事態はそれ自体が過去の回想や未来における予想、あるいは今ここではないどこかの事態の想像を表すことになる。反対に、事態を瞬間的に述べるということは、発話時における現場のあり様をそのまま提示するあり方であり、話者による想像の余地は少ないと言える。つまり、「逢瀬」における表現が継続的か瞬間的かは事態をどのようにみるかという話者の認識の違いに根差している。

また、「視認」はク語法有りの場合は「逢瀬」に近く、ク語法無しの場合は「眺望」に近いという違いがみられた。「逢瀬」の意味に近い「視認」は「見る」行為を通して逢瀬の事態を想像しているに過ぎない。つまり、「視認」における「見る」という事態は、眼前の対象物の視認と恋人との逢瀬という２つの行為を表しているが、それは対象の人物が今ここにいないという点で話者の想像でしかない。ク語法有りの場合の「視認」は例外なく「逢瀬」の意味を含み持っており、かつ継続性を表す時間表現もみられた。一方で、ク語法無しの場合の「視認」は「眺望」を表す２例（11）ab と、「逢瀬」の意味を含み持つ（11）c があった。ただし、（11）c は「逢瀬」の意味を含みながらも瞬間性を表しており、かつ対象の人物が恋人ではなく親であるという点で例外的である。つまり、「視認」においてもク語法有りの場合とク語法無しの場合とで事態認識に差があると言える。

一方で、「眺望」において願望対象の存立が非確定的か確定的という観点は事態の認識そのものであると言えよう。前提条件もなく単にその場にあるものを言い表すことと、条件や努力負担を達成することで実現する事態を仮定として言い表すことは存立の確かさにおいて大きな差がある。ク語法有りの場合は例外なく願望対象の存立が非確定的である表現が含まれていた。

ところで、２節末尾で述べたようにク語法有りの場合は願望行為と願望対象という２つの事態からなる表現であった。反対にク語法無しの場合は全体で１つの事態を表していた。この構文上の特徴が結果として以上のような意味の差異を生み出しているとも考えられる。確かに、発話時における願望行為が発話現場に依存する言語行為であるのに対して、願望対象は過去や未来などのいかなる事態も対象にできるという点で遊離的である。従って、全体で１つの事態として差し出すク語法無しの場合に比べて、ク語法有りの場合が脱時間的・脱現場的であるのはこうした構文的特徴に支えられた結果とみることもできる。

つまり、ここには意味の差異を構文的特徴に求めるのか、あるいはク語法が持つ意味論的意味に求めるのかという２つの観点が対立的に成立し得るのである。しかしながら、構文的特徴は「眺望」における非確定的か確定的かの意味差に関与するとは考えにくい。ということは、構文的特徴は一部の用例の意味差に関与しているとは言えるが、決して全体の用例を包括するような説明基準にはなり得ていないのである。従って、構文的特徴が意味の差を生み出したとみるよりも、ク語法の持つ意味論的意味が結果的にこうした構文形式を生み出したとみるべきである。

以上をまとめると、ク語法有りの場合において継続性や非確定的な表現が用いられる例は、いずれもク語法が対象とする事態が回想・予想・想像・仮定などといった話者の認識のあり様を示している。一方、ク語法無しの場合においける瞬間性や確定的な表現は事態を他者と共有できるようなものとしてみる客観的な事実認識である。ク語法有りの場合とク語法無しの場合の差異はこのような事態認識の対置的な異なりに由来していると考えられる。

７．２　第１章との関連

ある言語の場において対象の事態を表現するとき、その事態を自身の主観的な思いに留まる認識であると示すか、他者とも共有可能な認識として示すかという２つの方法があり得る。このような観点は一般にモダリティの分野おいて問われてきた。第１章は表１にあるような思惟動詞の偏りからそのような観点をク語法という名詞句に導入したものである。すなわち、ク語法は話者の思惟や想像や評価や仮定といった主観的な認識に根差すような事態を表しており、そういった雑多な用語を１つに取りまとめた言い方として可能世界という語を提示した。可能世界は客観的に言表される世界と区別されるもので、現在の現実世界に拘束されない、あり得る今ひとつの世界の様相である。願望行為の対象は未だ実現していない事態を仮構して提示する表現であり、これはク語法の表す可能世界の一端を示していると言える。一方で、ク語法無しの場合は述べたように願望行為と一体となった表現であり、そもそも願望対象という願望行為と切り離された事態を持っていない。いずれにせよ、第１章で述べた可能世界という観点は本章の考察にも有効であると言える。

ところで、６節に述べたように、ク語法有りの場合はそのク語法内部に必ず助動詞「ム」が接続されるという特徴がみられた。この「ム」の接続を表１において「欲ル」以外の述語についてみたものが以下の表８である。

表８　助動詞「ム」が接続する例

	欲ル	思フ	知ル	見ル	忘ル	見ユ	総計
全体	30	18	9	6	2	1	66
ム接続	30	1	2	2	0	0	35

表８は上段の数が用例の全体数を表しており、その中で「ム」が接続する用例数を下段に示したものである。見て分かるように、「ム」の接続は「欲ル」の場合においてのみ顕著であって、他の述語では目立った数を示していない。詳しくは第１章で論じているが、これらの動詞は広い意味で思惟を表す動詞という点で共通するが、その中でも「欲ル」において例外なく「ム」が接続するという点は特徴的である。

ここで思い合わされるのは願望表現が持つ願望対象の性質である。願望される事態は、単なる思惟であると同時に未実現の事態でもある。一方で、ク語法は話者の想像や仮定などの主観的な認識に根差した可能世界を表すという表現性を持っていた。可能世界と未実現性は極めて似た概念であるが、両者は必ずしも合同ではない。未実現は単に事態の成立しないことを表すものだが、可能世界は話者の中でその成立が十分あり得ると見込むものである。それが、種々の動詞の目的格に配置されることで想像や評価や仮定を表すのである。

「ム」の接続は、もともとそういった意味を担うク語法が願望表現の対象となったとき、願望の行為が含意する未実現性という意味が強く意識されたためと考えられる。つまり、

もともと任意であった言語形式が特定の環境下に置かれることで義務的な言語形式を獲得したと考えられる。このような観点は一般的な言語変化においてあり得る観点である。例えば、中古語における補文化辞「コト」はその連体節内部に「ム」の接続が顕著にみられることが知られている。この現象について渡邊（2008）はまず以下のように述べる。

（20）中古語においては、文補語標識「こと」に、補文が表すコトガラの未然性を示す働きが存在していた可能性が示唆される。ただし、補文が未然のコトガラを表す場合であっても、想定の対象となるコトガラや想定されているコトガラを表す場合には、連体止文補語を取る傾向にあった。これは、想定という行為が、コトガラの疑似体験的行為であることにより、コトガラの未然性が弱まるためではないかと考えられる。しからば、この「補文の表すコトガラの未然性を示す」働きとはどのようにして誕生したのであろうか。（渡邊 2008:54）

その上で、上代では「コト」は存在表現の主格になる例があることを挙げさらに次のように述べている。

（21）これらの「こと」の多くは、「あり」「なる」のような未然のコトガラの具現化を表す述語や、「なし」のような未然のことがらの提示を表す述語や、「さだむ」のような未然のコトガラを意図する行為を表す述語と共に用いられていた。このことから、中古語の文補語標識「こと」に存在していたと考えられる、補文の表すコトガラの未然性を示す働きは、修飾要素を伴わない、独立性の高い「こと」の影響を受けて派生したと考えられる。（渡邊 2008:54）

本章の述べるク語法が表す可能世界と渡邊（2008）の述べる「コト」の表す「コトガラの未然性」とは完全に一致するものではないが、重要なのは「ム」の接続がそれに先行する言語形式の意味的特徴に由来するという点でク語法と「コト」が共通することである。つまり、「コト」に起こった言語変化は既にそれに先行するかたちで上代語のク語法において起こっているのである。これは、現代語の準体助詞「ノ」を含めて、日本語の名詞句形成形式の史的な変遷をみる上で興味深い現象であると言えよう。

しかし、これは別の見方をすれば、このような「ム」の義務的な接続という言語変化が上代語においてク語法にのみ見られるというのは、それだけク語法が準体句などの他の名詞句とは異なった意味論的意味を既に持っていたとも言えるのではないだろうか。

以上をまとめる。まず、第 1 章では述語の思惟動詞の偏りから、ク語法が表す事態の特徴をまとめて可能世界という語で説明した。この可能世界という解釈は本章の考察対象「欲シ」「欲ル」においても有効であった。しかし、「欲ル」はさらに未実現性という意味を強く持つ語であり、それがク語法との組み合わせの中で義務的な接続を伴うという言語変化を生み出したと考えられる。そして、「ム」の接続がク語法において顕著にみられるという

事自体がク語法が特立される意味論的意味を持つ有力な証左となり得る。

8　まとめ

上代語の願望表現には終助詞による「ナ」「ネ」「ナム」「モガ」「シカ」など多様な表現がみられる。これらの形式は意味的に隣接する「希求」「勧誘」との関係や、それぞれの先後関係という点から山口（1985）、濱田（1986）などによって整理されてきた。その中にあって、「ナ」の後発である「ネ」が尊敬表現との共起の中で希求の意味を専一的に獲得する一方で[3]、「ナ」の持つ願望の意味はク語法が担っていたと言える。これら上代語の願望表現の体系を素描する上でも本章の考察は有効であると思われる。

また、上代語におけるク語法による願望表現は例外なく助動詞「ム」の接続した「～マク」という形式を形成している。これがやがて中古になって「マホシ」という助動詞を誕生させることになる。同時に中古では、上代語にあった「ナ」「ネ」などは消滅し、新たな願望表現の体系が形成されている。かつク語法自体も和文資料の中から殆どその姿を消すことになる。しかし、ク語法の残滓である「マホシ」が中古願望表現の体系の中で大きな位置を占めることを考えると、上代語のク語法のあり様をみることは中古以降の願望表現の体系を把握する上で意義があるように思う。

本章の考察はク語法が可能世界を表すという前提に立脚している。しかし、これは名詞句を体系的な意味分類の中で定位しようとするものであり、従来、考慮されることのなかった観点である。かつ可能世界がク語法全体についても妥当するかは今後の課題であろう。そういった意味では可能世界という概念は作業仮説の中にある。しかし、中古以降の「コト」名詞句との比較や、名詞句そのものの言語変化を想定するとき、上代語にける名詞句形成形式であるク語法において積極的に意味論的意味を求めていくことは有効な視座となり得る。

以上を踏まえて、そのク語法が願望表現の文脈でどのように振る舞うかを観察した。本章の結論は以下の通りである。

１、ク語法が願望表現の対象となるとき、脱現在的・脱現場的・非確定的な事態を表す。
２、ク語法と助動詞「ム」が必ず接続するのは、もともと可能世界を表すク語法が願望表現という文脈に置かれることで、よりその未然性という側面が強く意識されたためであると考えられる。同時にそれはク語法の特立した側面を表している。

注

１　濱田（1986）の定義に従う。
２　白藤（2007）に詳しい整理がなされている。
３　青野（2007）参照。

第３章　ク語法形容詞＋「ニ」と準体句形容詞＋「ニ」

１　はじめに

『万葉集』に文武天皇の唯一の御製歌として次の（１）a の歌が載せられている。

（１）a.み吉野の山のあらしの寒けくに〈寒久尓〉はたや今夜も〈為當也今夜毛〉我がひとり寝む（1・74）

b.櫪　馬　悲　羌　吹　　城　鳥　啼　塞　寒
　伝　聞　機　杼　妾　　愁　余　衣　服　単
（巻八、劉孝威「侍宴賦得龍沙宵月明」）

吉野行幸の折に詠まれたと思しき当該歌は、旅における孤愁が寒威によってより増幅される様を表現しており、深い嘆息を漂わせている。この中で、四句目「為當」について『萬葉集講義』をはじめ多くの先哲によって中国六朝頃の俗語の影響であることが指摘されてきた。その中にあって、土佐（2016）は『懐風藻』にある文武天皇の作が詠物詩であることに注目し『玉台新詠』との強い関係を示唆している。そして、発想のよく似る詩として（１）b の詩を挙げている。

ここでは辺境における孤独が塞寒の鳥啼に包まれることによってその孤独が象徴化されている。要は、「寒さ」が孤独を醸す強力な舞台装置として詠者の世界に立ち現われているのである。つまり、ここでの「寒さ」は孤独と悲嘆という極めて情緒的な側面の１つの表れとして、心象の状態がそのまま露出した表現だと言える。従って、心象状態の露出という点において、前２首における「寒さ」は決して測定的な感じ方のそれではあり得ず、詠者の主観的な感じ方としか言いようがない。

ところで、かかる「寒さ」を表現する形式として（１）a の万葉歌ではク語法を用いている。ク語法は活用語を名詞化する言語形式であるが、上代語では同様の機能を有するものとして準体句が存在する。第１章では、ク語法が動詞文の目的格に位置する例を対象に考察し、ク語法の表す事態が話者の主観に根差すような事態認識を表すものであることを述べた。（１）における「寒さ」が詠者の主観的な感傷からの発露であるとみた場合、これは第１章における結論と通底する。

そこでまず本章は、「ク語法形容詞＋「ニ」」と「準体句形容詞＋「ニ」」との比較において、両者が文の中で異なる役割を果たしていることを確認する。そして、その差異がク語法の特立される要素に起因するものであることを主張する。これは、第１章における結論

の一般化を志向するものである。

2　先行研究と考察対象

名詞句が助詞「ニ」を後接するとき、その名詞句がク語法か準体句かで表現上異なりをみせると指摘したのは山口（1979）であった。山口（1979）は名詞句＋「ニ」の接続表現として以下の４つの分類を提示している。

（２）a.「場面性」・・前句が時間的にも場所的にも後句の事態が成立する場面となる。
「累加性」・・前句の事態に加えてそれと価値・情況などの類似する事態が累加的に成立する。
「因由性」・・前後両句に原因－結果、理由－帰結という意味関係が認められる。
「機縁性」・・前句が後句の事態の成立にとって事実上の機縁となる意味関係が認められる。

（山口（1979）より抜粋）

そして、このうち「機縁性」についは準体句には確認されるがク語法には確認できないとし、その理由を次のように述べる。

（２）b.「ク語法＋に」形式にこういう意味関係の例が見られない。機縁性は継起的に展開する現実の事態の間におのずから認められる意味関係で、この場合、「に」の接続表現はきわめて現実模写的であるといる。ところが、「ク語法＋に」の表現性は、「に」の接続表現よりはるかに主体的なものであったと見られる。したがって、「に」の機縁性と共通する例の欠如は、この形式の表現性が「に」の機縁性における現実模写的な表現のしかたと相容れなかった当然の結果であろう。山口（1979：49）

下線部にあるようにク語法の表現性を「主体的なもの」とみていることは本研究の立場からも興味深い指摘である。しかし、そのことを確かめるには準体句との比較が必須である。その上で「機縁性」の有無がク語法と準体句を分ける重要な指標になり得る。ところで、残りの「場面性」「累加性」「因由性」に関してはク語法と準体句とも確認される用法でありその点においては両者の違いは見えにくい。加えて、山口（1979）の主な考察対象は後述する「ナクニ」という形式そのものであるため、名詞句内部の述語が動詞か形容詞かといった品詞の違いについては考慮されていない。しかし、動詞と形容詞のそれぞれの意味的特性に着目した場合、両者は同列に扱えないところがあるのではないだろうか。特に、形容詞の持つ意味的な特性は山口（1979）の示した４分類と密接な関連を持つと思わ

れる。

従来、形容詞はその意味・形態の側面から、属性形容詞、感情・感覚形容詞の二つに大別されることがある。このうち、属性形容詞は対象に外在する様相について言及するという点で客観的な描写であるのに対し、感情・感覚形容詞は発話者の内面の様相について言及するという点で主観的な描写であるようにみえる。これは主観と客観という二項を対立的に捉え、それに対応するかたちで各形容詞を分類しているかのようにみえる。

しかし、属性形容詞の場合でも例えば「この本は値段が高い。」と言ったときの「高い」は、話者からすればそう感じていても、他人からすれば安いと感じている場合も有り得る。「あの本よりは」というような明確な比較基準がない限りあくまでもそれは話者の主観的な評価であると言える。反対に、感情形容詞でも「毒蜘蛛は怖い。」というような場合、それは話者の感情的な恐怖心を表すという点では主観的だが、毒蜘蛛の危険性という属性に言及しているという点では客観的であると言える。要するに、形容詞は主観と客観の両面性を持っているのである（以上のような議論は例えば八亀（2009）に詳しい）。よって、属性形容詞と感情・感覚形容詞という分類は語彙・形態論的な分類方法であっても、それらが直ちに主観性・客観性という意味論的な区分けを表示しているわけではない。形容詞が主観を表すか客観を表すかは文脈に依存しているのである。

述べたように山口（1979）はク語法の表現性を「主体的なもの」と捉えているが、ク語法をそのような視点から見たとき、形容詞が文脈によって主観か客観かを表すこととは相関があるのではないかと予想される。そこで、本章は名詞句内部の述語の品詞が形容詞である場合に限定して改めて名詞句＋「ニ」の接続表現をみようとするものである。

表１　名詞句内述部の主要部述語品詞

	動詞	形容詞	助動詞	総計
ク　語　法	440	82	9	531
準体句	1200	155	9	1364

表１は『万葉集』におけるク語法と準体句を比較し、それぞれの名詞句内述部の主要部述語品詞を見たものである。名詞句内の述部は１つの活用語によって構成される場合もあれば、複数の活用語によって構成される場合もある。複数の場合は主要部となっている活用語の品詞のみを表に反映させている。ク語法と準体句はともに動詞が最も多いが、動詞使用率からみると準体句の方がより高い。本章が問題とする形容詞の用例数は準体句がク語法の約２倍となっている。

表２　名詞句＋「ニ」

	動詞	形容詞	助動詞	総計
ク　語　法	145	23	9	177
ナ　ク　ニ	129	17	9	155
準体句	112	23	1	136

表２はク語法と準体句の２つの名詞句に助詞「ニ」が後接した用例を集計しものである。このうち、ク語法は２３例確認さるが、その中で次のように「ナクニ」という形式で文が終止する用法がある。

（３）宇治間山朝風寒し旅にして衣貸すべき妹もあらなくに〈妹毛有勿久尓〉
（1・75）

これは、打消しの助動詞「ズ」の連体形＋ク語法＋「ニ」という形式である。このような用法がク語法の形容詞の２３例中１７例あり、全体で１５５例確認される。ク語法そのものが全体で５３１例あるわけだが、そのうちの１５５例という数はある種の類型化を思わせるが、いずれにせよ無視できない数である。しかし、本章ではこの１５５例の「なくに」の例を考察対象に含めない。改めて別稿に譲るためである（因みに、準体句では例えば「～ぬに」のような例は就中１８例確認されるが、いずれも主要部は動詞であって形容詞の例は存在しない)。以上、ク語法の形容詞２３例からこの１５例を引いた残りの６例と、準体句の形容詞２３例を主な考察対象として論を進めていく。

３　ク語法形容詞＋「ニ」

まず、ク語法の例をみる。

（４）a.秋の日の穂田を雁がね暗けくに〈闇尓〉夜のほどろにも鳴き渡るかも
（8・1539）
b.吉野川川波高み瀧の浦を見ずかなりなむ恋しけまくに〈戀布真國〉
（9・1722）

（４）a は田園の風景を読んだ１首であるが、３句目「暗けくに」はトキ節を構成しているかのようにみえる。しかし、それでは４句目のより詳細かつ具体的な状況を示す「夜のほどろにも」という節とトキ節が一文中に連続してしまうことになり、構文上不自然になってしまう。従って、「暗けくに」を「暗いのに」という逆接として解釈されるのが穏当である。

重要なのは逆接という構文が持つ語用論的意味である。逆接として解釈されるということは、雁が飛翔する時刻にふさわしくない、或いは想定していなかったような暗闇が詠者の眼前に立ち現われているということを含意する。しかし、そのふさわしさや想定は詠者の主観的な評価に属する分野であって、その点において「暗けくに」は詠者の想定外であったことの意外性を表していると言える。また、当該歌はこの「暗さ」を主眼として成立している歌である。雁はあくまで即物的に自然の摂理に従って運行しているだけだが、雁の飛翔が生命の活動に適さないであろうとされる状況下で運行しているところに詠者の驚

嘆と感慨がある。その驚嘆と感慨は詠者の「暗さ」の感じ方へと直接し、結果として、その暗闇がいかに滔々たる深さを具有しているかを強調する表現となっているとも言える。従って、その現場の状況として事実だけを提示する「夜のほどろにも」とは異なり、「暗けくに」は冒頭（１）a の例と同様に詠者の内面的な感じ方を表現している[1]。

（４）b は、「恋シ」の未然形に助動詞「ム」が接続した形式である。前歌同様に、「恋しくなるだろうに」と逆接として解釈される。注目すべきは、「ム」の接続から分かるように、「恋しい」という状態が未実現の事態として把握されているという点である。しかも、それは滝の浦を見ることができなかった場合に把握されるような「恋しさ」なのである。無論、現時点でも詠者の恋しく思う感情は変わらず保持されているだろうが、特定の条件下によってより一層強く自覚されるその「恋しさ」をク語法によって表現しているのである。

（５）a.降る雪はあはにな降りそ吉隠の猪養の岡の寒からまくに〈寒有巻尓〉
（2・203）

b.今だにも目な乏しめそ相見ずて恋ひむ年月久しけまくに〈久家真國〉
（11・2577）

（５）も形容詞未然形に「ム」が接続した形式である。ただし、（４）b の「恋シ」が感情形容詞であったのに対し、（５）b「久シ」は属性形容詞である。さらに、意味としても「～なので」という理由節を表しているという点で（１）a（４）ab とも異なっている。

しかし、（５）a は、亡き但馬皇女が独り眠るその孤寂が「寒さ」によって一層引き立てられるという点では（１）a と共通したところがある。また、（５）b も語句は異なるが、恋人と逢えない時の不遇の感情を表現しているという点で（４）b と共通する。つまり、「久シ」は具体的な期間の長さを述べているのではなくて、逢えない辛さによって把握される時間の感じ方の「長さ」を表現しているのである。

以上、５例、順接・逆接両用あるがク語法形容詞＋「ニ」はいずれも詠者の内面の様相を表現しており、それは属性形容詞の場合であっても例外はない。従って、形容詞の持つ主観・客観の両面性から見れば、ク語法の例は形容詞の主観的側面を強く反映していると言える。

４　準体句形容詞＋「ニ」

次に、準体句の例をみる。準体句の場合は異なり語数で言えば１０例確認される。しかし、その内訳は次のように大きな偏りがある。

表３　準体句形容詞＋「ニ」の主要部語彙

繁シ	悲シ	恋シ	覚束無シ	苦シ	惹シ	端正シ	長シ	利シ	良シ	総計
11	3	2	1	1	1	1	1	1	1	23

表３にあるように、全体の半数近くを「繁シ」が占めており、次点の「悲シ」以下を圧倒している。

４．１　「繁シ」以外の１２例

まず、「繁シ」以外の例を見る。「繁シ」以外の１２例は、異なり語数で言えば多様であるが、構文的意味からみれば大きく４種に分けることができる。

（６）対象的事物

剣大刀諸刃の利きに〈諸刃利〉足踏みて死なば死なむよ君によりては

（11・2498）

（６）は「ニ」が格助詞として使われている例である。ク語法を含めた他の例の「ニ」は全て接続助詞或いは終助詞であり、格助詞の例は当該例のみである。また、名詞句の表す意味論的な意味も事態ではなく「鋭い諸刃」という対象的な事物である。従って、諸刃を評価的に述べているのではなくて、諸刃の具有する属性として中立的に述べていると言える。

（７）トキ節

a.旅にしてもの恋しきに〈物戀敷尓〉山下の赤のそほ舟沖を漕ぐ見ゆ

（3・270）

b.ここだくも我が守るものをうれたきや醜ほととぎす暁のうら悲しきに〈裏悲尓〉追へど追へどなほし来鳴きていたづらに地に散らさばすべをなみ

（8・1507）

c.今造る久邇の都に秋の夜の長きに一人〈長尓獨〉寝るが苦しさ（8・1631）

d.今夜のおほつかなきに〈於保束無荷〉ほととぎす鳴くなる声の音の遙けさ

（10・1952）

e.暁の家恋しきに〈伊敝胡悲之伎尓〉浦回より梶の音するは海人娘子かも

（15・3641）

f.春の日のうら悲しきに〈宇良我奈之伎尓〉後れ居て君に恋ひつつ現しけめやも

（15・3752）

g.春まけてもの悲しきに〈物悲尓〉さ夜ふけて羽振き鳴く鴫誰が田にか住む

（19・4141）

（７）は「～時に」と解釈されるようなトキ節を表す例で、７例と最も多い。また、（７）a 以外の６例は１首中に具体的な時節が示されている点が特徴的である。このうち（７）c

以外は、基点時における詠者の心象状態を述べている。これは、その時の状況を述べるという点ではク語法の（1）a（4）a に近く、感情形容詞という点で（4）b と共通する。しかし、その心象状態も（1）a（4）a のように詠者の意外性や、（4）b のように特別な根拠によって成立しているものではなく、無条件に前提されるあり様を示している。特に、同じく感情形容詞の例である（4）b と決定的に異なるのは、（7）は詠者の心象についての言及ではあるものの、それは特定の事態を受けての感情ではなく「旅」「夜」「春」に付随する一般的な理解における属性として言及されているという点である。つまり、語彙としては主観的な表現でありながらも文脈上、客観的な意味の面の方が強い表現であると言える。（7）c に関しても同断で、「長き」は一般的な理解に裏付けされる「秋の夜」に備わる恒常的な性質として述べているに過ぎず、ク語法例（5）b のように詠者個人の感じ方を問題にしているわけではない。

（8）並列

a.胸別の広き我妹腰細のすがる娘子のその姿のきらぎらしきに〈端正尓〉花のごと笑みて立てれば玉桙の道行き人は己が行く（9・1738）

b.作り着せけむ白たへの紐をも解かず一重結ふ帯を三重結ひ苦しきに〈苦伎尓〉仕へ奉りて今だにも国に罷りて父母も妻をも見むと（9・1800）

（8）a は語り継がれる伝説の娘子について述べたものである。従って、詠者の直接見聞した評価ではなくて、周知の事実である娘子の容姿を属性的に述べたものである。また、（8）b は横死という非業に至るまでの辛苦を想像して述べたものである。この非業と辛苦は不可分な要素であり、非業という事実が成立している以上、辛苦もまたその成立に疑念の余地のない要素である。このように（8）は詠者の直接の体験ではなく、また詠者個人の感じ方を問題にしていないという点でやはりク語法とは異なる。

（9）逆接

a.多胡の嶺に寄せ綱延へて寄すれどもあにくやしづしその顔良きに〈曽能可抱与吉尓〉（14・3411）

b.湊の渚鳥朝なぎに潟にあさりし潮満てば妻呼びかはすともしきに〈等母之伎尓〉見つつ過ぎ行き渋谿の荒磯の崎に沖つ波寄せ来る玉藻（17・3993）

（9）は逆接として解釈される例である。その点ではク語法の例とかなり近く、明確な差異を認めるのは難しい。しかし、ク語法の逆接の例が詠者の意外性を表すのに対し、（9）ではそうした意外性が見出せない。（9）a は土着の信仰の対象にもなっている人面岩についての属性である。人面岩の顔が良いことはその共同体にとっては周知の事実である。また、（9）b は渚鳥の番が仲睦まじい様子について心が惹かれると述べるものだが、しかしそれは想定外の事態として述べているのではなく現在の詠者の状況に対比される様子とし

て傍観的に述べているに過ぎない。

以上、４種１２例は事実を客観的に述べるという側面に重点があり、ク語法とは異なる。

４．２　「繁シ」の１１例

「繁シ」は程度の強さや頻度の多さを属性として表す。１１例と多くの例を確認できるが、その主格は２種類しかない。(10) が「恋」であり、(11) が「人言」を主格にしたものである。(11) の場合は「ニ」の後にさらに「ヨリテ」が後接する。

(10) a.しきたへの枕ゆくくる涙にそ浮き寝をしける恋の繁きに〈戀乃繁尓〉
(4・507)

b.木綿掛けて斎ふこの社越えぬべく思ほゆるかも恋の繁きに〈戀之繁尓〉
(7・1378)

c.神奈備の神依り板にする杉の思ひも過ぎず恋の繁きに〈戀之茂尓〉
(9・1773)

d.夢にだになにかも見えぬ見ゆれども我かも迷ふ恋の繁きに〈戀茂尓〉
(11・2595)

f.現にか妹が来ませる夢にかも我か惑へる恋の繁きに〈戀之繁尓〉
(12・2917)

g.剣大刀名の惜しけくも我はなしこのころの間の恋の繁きに〈戀之繁尓〉
(12・2987)

h.一人寝る夜を数へむと思へども恋の繁きに〈戀茂二〉心利もなし
(13・3275)

i.魂は朝夕に賜ふれど我が胸痛し恋の繁きに〈古非能之氣吉尓〉
(15・3767)

(11) a.初花の散るべきものを人言の繁きによりて〈繁尓因而〉よどむころかも
(4・630)

b.ねもころに思ふ我妹を人言の繁きによりて〈繁尓因而〉淀むころかも
(12・3109)

c.人言の繁きにより〈之氣吉尓余里弖〉てまを薦の同じ枕は我はまかじやも
(14・3464)

いずれも理由節を構成している。(10) は恋情の激しさが種々の行動の誘発する事態を表しており、(11) は人の噂の煩わしさが詠者の行動を抑制している事態を表している。このように、理由節が係っていく結果の事態は現実に生起した事態である。そうであるならば、翻ってその結果を引き起した理由である「繁シ」も現実の事態として把握される対象と言

える。一方でこれは、ク語法形式「繁けく」とは対照的なあり方を示している。次に示すのは「繁シ」がク語法として用いられる例である。就中８例確認される。ただし、助詞「ニ」を接続したものはない。

（12）a.高山の菅の葉しのぎ降る雪の消ぬとか言はも恋の繁けく〈戀乃繁鷄鳩〉（8・1655）

b.このころの恋の繁けく〈戀乃繁久〉夏草の刈り払へども生ひしくごとし（10・1984）

c.里近く家や居るべきこの我が目の人目をしつつ恋の繁けく〈戀繁口〉（12・2876）

（13）a.もみち葉に置く白露の色葉にも出でじと思へば言の繁けく〈事之繁家口〉（10・2307）

b.しましくも見ねば恋しき我妹子を日に日に来れば言の繁けく〈事繁〉（11・2397）

c.近江の沖つ島山奥まけて我が思ふ妹が言の繁けく〈事繁〉（11・2439）

d.近江の沖つ島山奥まへて我が思ふ妹が言の繁けく〈言繁苦〉（11・2728）

e.波のむたなびく玉藻の片思ひに我が思ふ人の言の繁けく〈言之繁家口〉（12・3078）

ク語法例においても準体句の場合と同様にその主格は２種類のみである[2]。（12）が「繁けく」の主格が「恋」である例、（13）は「言」である例である。ただし、準体句の場合と異なるのは、先ず理由節にならないという点である。加えて、準体句では「繁き」ことが何らかの行動を（抑圧も含めて）生起させていたが、ク語法ではそういった具体的な行動が示されていない。代わりに、「繁けく」と感じている内容がどの程度の強さなのかを比喩や心象によって表現している。つまり、準体句では行動の起点として「繁き」という状態が事態としてあったことを述べているのに対し、ク語法は「繁けく」そのものの内実を述べているのである。このように、準体句の例が「恋」や「人言」の属性としての側面に言及しているのに対し、ク語法の例は「恋」や「言」がいかに詠者にとって強いかという評価として述べている。

５　「暑けくに」の例

ク語法形容詞＋「ニ」の全６例中、次の１例は以上述べてきたことの反例となり得る例である。

（14）衣手常陸の国の二並ぶ筑波の山を見まく欲り君来ませりと暑けくに〈熱尓〉汗かきなけ木の根取りうそぶき登り峰の上を君に見すれば男神も許したまひ女神もちはひたまひて時となく雲居雨降る筑波嶺を①さやに照らして〈清照〉いふかりし国のまほらをつばらかに示したまへば②嬉しみと〈歡登〉紐の緒解きて家のごと解けてそ遊ぶうちなびく春見ましゆは夏草の繁きはあれど③今日の楽しさ〈今日之樂者〉（9・1753）

題詞によれば当該歌は検税使大伴卿（おそらく旅人）を筑波山にて歓待した折の虫麻呂の詠である。ここでの「暑けくに」はトキ節と解する以外に余地がない。また、直後の「汗かきなけ木の根取りうそぶき登り」とあるように、詠者の感じ方の如何に関係なく成立する極めて事実的は事態を対象としているように見える。ク語法は可能世界を表すとする本章の立場からすれば、その点で例外と言わざるを得ない。

ところで、当該例は本文において大きな問題がある。それは「ク」の部分が読み添えとなっている点である。前掲のク語法５例は音または訓によって「ク」が表記されており、ク語法として見ることに問題はない。しかし、当該例は諸本見ると次のようになっている。

（15）アツカルニ　神宮文庫本　細井本　京都大学本
　　アツケキニ　西本願寺本　広瀬本

大別して「アツカルニ」と「アツケキニ」の二通りの訓みが示されている。いずれにせよ準体句と見做した訓みである。当該例を「アツケクニ」とク語法として訓むのは『古義』の案のようである。しかし、結論から述べれば、「アツカルニ」「アツケキニ」の２通りの訓みはどちらも成立しない。

まず、「アツカルニ」は助動詞接続専用のカリ活用の連体形であるが、それが助詞「ニ」に接続することは上代ではあり得ず非文である。次の「アツケキニ」であるが、これは「アツケシ」という所謂ケシ型形容詞の連体形ということになる。「アツケシ」という語形が有り得たか否かという点に関しては次の仙覚の発言が参考になる。

（16）カノ峯上ヲミムトテ、ノホレハアツケクシテ、アセカキテウソフカルレハ、ネトリスルウソフキノホトリトイフ　（『仙覚抄』万葉集叢書巻第６・217 頁）

「アツケクシテ」とは、この当時の形容詞として「アツケシ」を想定していたことがわかるが、これは要するにク語法を形容詞の一種とみていたことを示す。つまり、「アツケキニ」とは「*アツケシ」という形容詞を想定しているのだが、これは「はるかーはるけし」「たひらかーたいらけし」「さやかーさやけし」のように「カ」型情態副詞の形容詞派生形と同じように「アツケシ」という形容詞を想定し、その連体形で捉えるべきだという見方をしたことによる。

しかし、蜂矢（1983）によれば、「カ」型情態副詞と対応の持つものを一次ケシ型形容詞と呼び、そういった対応を持たないものを二次ケシ型形容詞と呼んで、一次ケシ型形容詞は上代から見られるのに対し、二次ケシ型形容詞はその派生形として中古以降にしか見られないとする。蜂矢（1983）の調査では「アツケシ」という語形は含まれていないが、「サムケシ」についてはク語法からの類推による派生であると述べている。また、ケシ型形容詞の「ケ」の部分は乙類であり、これが已然形になると「ーケ^{2}ケ^{1}レバ」となり音韻上不正となってしまう。実際に上代において一次ケシ型形容詞の已然形例は見られない。一方で、ク語法形容詞「ーケク」の「ケ」は甲類であり、「アツケシ」がク語法からの派生であったとしても、少なくとも上代では成立できない。二次ケシ型形容詞が中古以降出現するのは甲乙の区別が消滅するためである。

ところで、「暑シ」という語彙が和歌の中においてはかなり特殊な語彙であるという点は注意してよい。そもそも、当該歌のような夏歌は他の四季に比べると圧倒的に少ないが、気温の高い状態を意味する「暑シ」の例は集中当該例のみである。その他の上代文献の中でもかろうじて次のような例を拾うのみである。

（17）寒キコトモアラズ□□熱キコトモアラズ（地蔵十輪経元慶点）

無論、日常語としての使用は十分あり得たのだろうが、それが和歌の中で極端に少ないのは、「寒シ」が恋愛や人生における孤独を惹起させる要素として取り合わせ易いのに対し、「暑シ」はそういった和歌の題材になり難かったのだろう。しかし、それ故にそういった上代和歌の趨勢の中にあって唯一用いられた「暑シ」がク語法であることに大きな意味があるように思われる。

述べたように、当該歌は検税使歓待の詠であると同時に典型的な土地誉め歌の型をなしている。それは、波線部に示した箇所によっても明瞭に表現されている。またそれは、『常陸風土記』にあるような筑波山を神聖視する土着信仰にも裏打ちされていよう。例えば、窪田（1944）は次のように述べる。

（18）この歌にみえる筑波山はまさに神霊であり、その登山のかなったことも神霊の許しであり、展望のかなったことは特別なる加護であったとして、一切が神霊の手中にあって行ない得たことであったと、それに対して深き歓びを感じている心である。この歓びは、それと対蹠的な怖れをも感じているところよりきているもので、信仰によって初めて感じられるものなのである。

このようにみるとき、前半の艱難は筑波山の具有する畏怖の一端であると把握できなくもない。しかし、少なくとも後半に述べられる爽快壮麗な筑波山の展望と前半の艱難辛苦は同一の対象に具有する属性としては明らかに矛盾している。虫麻呂が「暑けく」と感じるのは「③今日」が春ではなく夏であり、常時雨雲がかかっている筑波山に陽光が「①さ

やに照らして」いるからである。

このようにみると、この「暑さ」こそが大伴卿との邂逅が感慨深いものであることの重要な舞台設定であることが分かる。都からの高官がわざわざ酷暑の中、共に筑波山に登頂してくれたことに虫麻呂の大きな感動があり、それは今日この日以外には成立し得ない事態である。つまり、ここでの「暑けくに」はトキ節として順接的に後文にかかるのではなくて、倒置として逆接的に前文「君来ませりと」にかかっていくのではないか。既に、倒置表現は（4）b、（5）ab にも見られた表現である。加えて、当該例を順接として後文の「汗かきなけ」にかかっていくものとみた場合、「暑いときに汗をかきながら」という表現には冗長かつ単純という点で不審を否めない。

仙覚は現行の解釈のように「暑い時に、汗をかきながら」と理解したことになるが、仙覚がク語法を採用しなかったのは、ク語法がトキ節にならないことを直観的に、あるいは自覚的に理解していたことを示している。準体句とク語法のいずれを採用するかだが、ク語法の場合は旅人の熱意に主眼がおかれ、準体句ならば虫麻呂らの苦労に主眼が置かれることになる。歌の趣向としては前者のほうがよく、暑い時だから汗をかくのではなく、山頂までの険しい道のりの苦労から汗をかいているとみるべきであろう。表現上も苦労して登る様子が窺える。つまり、「暑い時に汗をかく」「暑いので汗をかく」というのは表現するまでもないことで、「汗かきなけ」という表現は暑いからではなくて、山の険しさや夏の山が人の容易に迎え入れないことを示しているためである。確かに『常陸国風土記』において、富士山との対比から筑波山は祖霊の加護を得た山であって人が訪れ楽しむ場所としてある。しかし、男神が許してくれて、女神が庇護してくれたから、山頂がくっきりと見えて、国のまほらを見せてくれたのだというとき、誰を許し加護したのかといえば、この登頂を企画した者に対してであろう。それはつまり旅人に対して山の神々が加護を与えているという構図である。ならば、暑い盛りに山に登りたいという、旅人の篤実な心情に対して、神々が応答したということがもっとも自然であって、虫麻呂らが先導したにしても、そのこと自体は二次的である。表現としてみれば、「暑いのに」で少し切れて、「汗かきなけ　木根とり……」という関係とみるべきではないか。これはちょうど冒頭例（1）において「寒けくに」が悲哀を伴った意外性のある表現であることと対称的であると言える。しかし、いずれの例にも言えることは当該表現が単なる気温の高低を問題にしているのではなくて、それが心象の反映であるという個人の感じ方を問題にしているという点である。

6　考察

既に、ク語法の表す意味として第１章では「可能世界」という見方を提示した。これは、話者の主観に根差す事態認識である。この見解は山口（1979）の述べる「主体的なもの」という見方と同様の方向にあると言える。ただし、山口（1979）が前文と後文の接続関係から４つの型を提示しているのに対し、本章は名詞句そのもののあり様をみているという点で異なる。確かに、接続関係という観点からみれば、ク語法に「機縁性」を表す用法が

ないとう事実は準体句との比較の上で重要な指標だが、それがク語法の意味としてどこまで一般化できるかが問題になるだろう。

そのような見通しのもと本章ではク語法形容詞＋「ニ」の６例と、「繁き」の比較として補足的に挙げた「繁けく」の８例を見てきた。以下、「繁シ」以外のク語法の例を改めて概観する。まず、「寒シ」（１）a（５）a の場合では、単純に冬や夜の寒さを述べているのではなくて、孤独によって増幅される沈痛な感情の様を表現しているのであって、その点で外界の状態に言及しているというよりも詠者の内面を対象化した表現である。次に、「暗シ」（４）a の場合は、そこに詠者の明らかな意外性が見て取れた。現実の暗さをどのように感じるかは個々人の主観の問題で、それを意外なものとして評価しているのである。

また、「恋シ」（４）b の場合は、現在においてはまだ生起していない感情の高揚を想定的に述べていた。「恋シ」の場合は準体句においても見られたが、（７）の準体句の場合は常にトキ節を構成し、「春」「旅」「夜」などに付随する属性として表現されており、一般的な事実に根差した評価であった。一方で、ク語法の場合は特定の事態が条件となって発動する感情の高揚であって、個人的な経験によってのみ生起する事態のあり様である。つまり、一般と個人という対立が見て取れる。同様に、「久シ」（５）b の場合は、準体句の例「長シ」（７）c と意味的に近似するが、（７）c は「秋の夜」に具有する１つの属性を取り立ててトキ節を構成しているに過ぎず、文情報的には「秋の夜において」と解釈しても意は成立する。ところが、ク語法の場合はそういった何かに具有する属性として述べているのではなく、かつ、具体的な期間を示しているわけでもなく、あくまで個人の時間に対する感じ方を「長い」と評価しているのである。

最後の「暑シ」(14) の場合は、極めて事実的でまた構文としてもトキ節を構成していた。しかし、虫麻呂はその「暑さ」を殊更取り立てることによって感動の大きさを表現している。つまり、感動を導くための重要な条件として「暑い」という状況があるという点で意外性を表す逆接と解する方が自然である。無論、それはあくまで個人の内面の問題として外界に対する属性付与ではない。

これらのク語法の例に共通して言えることは、形容詞が表す状態や性質が話者の内面の感じ方を問題とする評価や感情であるという点である。また、共通理解に裏打ちされるような客観的な認識はク語法には見出し難い。形容詞の持つ事態を主観的に述べるか客観的に述べるかという二面性はク語法の表現性において主観性に偏ったあり様を示している。

７　おわりに

本章が形容詞に注目したのは、形容詞の持つ二面性がク語法表現においてどのように作用するかを確認するためであった。しかし、これを準体句と比較してみるというとき、韻文という文体上の性質と音数律による文情報の制約上、全ての形容詞についてそれが主観的であるか客観的であるかを文脈から判断するのは極めて困難である。従って、より両者の差異を明瞭化するためには構文的条件を制限する必要がある。そこで、接続助詞「ニ」

を伴う形式に限定するのは、「ニ」の持つ接続表現の表現性によって文脈が重層的になり、主観か客観かの差異がより明瞭になると予想されるからである。

ある言語の場において対象の事態を表現するとき、その事態を自身の主観的な思いに留まる認識であると示すか、他者とも共有可能な認識として示すかという２つの方法があり得る。このような観点は一般にモダリティの分野おいて問われてきた。第１章はそのような観点をク語法という名詞句に導入したものである。すなわち、ク語法は話者の思惟や想像や評価や仮定といった主観的な認識に根差すような事態を表しており、そういった雑多な用語を１つに取りまとめた言い方として可能世界という語を提示した。可能世界は客観的に言表される世界と区別されるもので、現在の現実世界に拘束されない、あり得る今ひとつの世界の様相である。形容詞ク語法＋「ニ」という形式においては形容詞が表す状態や性質が話者の内面の感じ方を問題とする評価や感情を表しており、これはク語法の表す可能世界の一端を示していると言える。

注

１　小島（1964 : 843）は冒頭の文武天皇御製中「寒けくに」について「一方デハアルイハ、モシヤ」の意で解せるとし、「しかもこの歌には下句に詠嘆的な氣持ちがこもる。」と述べる。

２　以下の２例は考察対象に含めない。

・冬の林につむじかもい巻き渡ると思ふまで聞きの恐く引き放つ矢の繁けく〈繁計久〉大雪の乱れて来れ（2・199）

・梓弓欲良の山辺のしげかくに〈之牙可久〉妹ろを立ててさ寝処払ふも（14・3489）

１９９番歌は主格が「矢」であり、その数が大量であることを示している。準体句にはない用法である。また、３４８９番歌は東歌であるが、ク語法が事態を表しておらず事物を表している。ク語法が事物を表す例は就中でも珍しく、かつその場合も用いられる際に一定の条件がある（この点については別稿にて述べる）。当該例はそういった条件が当てはまらない例である。かつ、「しげかく」が「繁シ」の意味であるならば、「げ」は乙類であるべきだが「牙」は甲類である（諸本で異同なし）。つまり、歌の性格、意味、表記という点において極めて例外的な例である。

第４章　助動詞「ケリ」のク語法について

１　はじめに

表１はク語法に前接する活用語の品詞をみたものである。そして、表２は表１のうち最も多い助動詞についてその内訳をみたものである。

表１　前接活用語品詞

動詞	形容詞	助動詞	総計
124	62	345	531

表２　前接助動詞語彙

ズ	ム	キ	リ	ケリ	ケム	ツ	ヌ	ス	総計
191	128	12	5	2	2	2	2	1	345

表２において注目すべきは、所謂法助動詞と呼ばれるものが「ム」「ラム」「ケム」しかないという点である。その他の「ベシ」「マジ」「メリ」「ナリ」「ジ」「マシ」「ラシ」はク語法内部に生起することがない。さらに、「ム」「ラム」「ケム」に関しても、意志や推量などの意味を表すものはなく全て単に事態が未実現であることを表す婉曲の例しか確認されない。つまり、ク語法の内部には積極的にモーダルな意味を表す助動詞は生起しないのである。これは、ク語法という名詞句がモダリティの観点において他の法助動詞と棲み分けをしているということを示唆している。

その中にあって表２における「ケリ」の存在は注意すべきであろう。なぜなら、「ケリ」はテンスとしての意味の他にモーダルな意味を持つ助動詞として井島　（2011）、 鈴木（2012）などに整理されてきたからである。「ケリ」にモーダルな意味を認めるならば、先に述べたク語法における棲み分けの例外的な存在となってしまう。それは、ク語法における棲み分けという見方そのものが動揺することを意味する。

そこで、本章ではこの表２における「ケリ」２例についてモーダルな意味を持つのかという点を検証する。その上で、その結果がク語法における棲み分けとどのように関連するかを述べる。

２　表記の観点から

本章が問題とするク語法に「ケリ」が前接する２例とは次の例である。

（１）a.古ゆ言ひ継ぎけらく（言続来ロ）恋すれば苦しきものと玉の緒の継ぎては言へど娘子らが（13・3255）

b.大汝少彦名の神代より言ひ継ぎけらく（伊比都藝家良久）父母を見れば貴く妻子見ればかなしく愛しうつせみの（18・4106）

（1）a は「ケリ」が「来」字で記されている。「来」字の用法としてはこの場合、訓仮名か正訓の可能性があるけれども、寛永版本を底本とした諸本では「くらく」と施訓されている。ところが、一方で西本願寺本を底本とした現行諸注は、「ケリ」とみており、助動詞ケリのク語形で訓まれている。現行緒注における施訓の根拠としては、次の（1）b の例である。一字一音式の仮名表記による「いひつぎけらく」の例は有力で、（1）a を同様に施訓することの妥当性を与えている。ところが、この（1）b の例は、「久」は元暦校本、広瀬本のみの表記で、その他の諸本では「之」とある。現行の本文で「久」が採用されているのは『萬葉集略解』の中で「宣長云「之」は「久」の誤訓。」と指摘されるのに依る。加えて、（1）b の４１０６番歌は大野（1945）が指摘したように、後人の改編である可能性があるとされる。それは以下のような表記上の問題に見てとれるという。

（2）　１、特殊仮名遣いの違例・・・４例
　　２、稀字母の数・・・１９例
　　３、清濁の違例・・・３例
　　４、語句の欠損・・・２箇所

（大野（1945）より抜粋）

このような次第で（1）b は書記された当初の表記を留めているとは言い難く、後人による改編が強く疑われている。更に、大野（1945）ではその後人による改編がいつごろ行われたかについても推定しており、およそ天暦年間における源順を中心とした『万葉集』加点事業の時期であろうとしている。その推定に従うならば、ク語法は『万葉集』以降急激に消滅していくのだから平安朝の順らには「くらく」と「けらく」の差異を判断することはほぼ不可能であったはずで、（1）は誤読される可能性が有り得たといえる。

ただし、その改編の有り様はいわゆる一般的な誤写の域を出ないほどに限定的であるとされるからそれほど大規模な変更はなかったのかもしれない。けれども、たとえば次のような例が認められる。

（3）a.夜のほどろ出でつつ来らく（出都追来良久）度まねくなれば我が胸切り焼くごとし（4・755）
　b.神代より言ひ伝て来らく（云傳久良久）そらみつ大和の国は皇神の厳しき国言霊の　（5・894）

（3）は動詞「来」がク語法に前接して「くらく」という語形を形成している。仮に（1）b の例がなければ、（1）a は「来」字を正訓とみて「いひつぎくらく」と施訓される可能

性があるだろう。つまり、（1）a は動詞「来（くらく）」とも助動詞「ケリ（けらく）」とも両用の訓みの可能性があるのである。そうすると、「ケリ」がク語法に前接する確実な例は（1）b のみということになる。無論、孤例であっても存在することの意義は重要であるから、（1）b を抹消することはできない。そうであるならば、次に問われなければならないのは、ここでの助動詞「ケリ」はその他の就中の「ケリ」と比較したとき、性質上どのような差異があるのかという点であろう。その比較をみる前にまず「ケリ」が『万葉集』においてどのように表記されているかを確認したい。「ケリ」は『万葉集』全体で４０１例確認される。

（4）a.み立たしの島の荒磯を今見れば生ひざりし草生ひにけるかも（生尓来鴨）
（2・181）
b.古ゆ人の言ひける（人之言来流）老人のをつといふ水そ名に負ふ瀧の瀬
（6・1034）
c.相見らく飽き足らねどもいなのめの明けさりにけり（明去来理）舟出せむ妻
（10・2022）
d.我妹子が袖を頼みて真野の浦の小菅の笠を着ずて来にけり（不著而来二来有）
（11・2771）
e.我が衣色どり染めむうまさけ三室の山はもみちしにけり（黄葉為在）
（7・1094）
f.道の後深津島山しましくも君が目見ねば苦しかりけり（苦有）（11・2423）
g.しきたへの枕は人に言問へやその枕には苔生しにけり（苔生負為）
（11・2516）
h.白玉の緒絶えはまこと然れどもその緒また貫き人持ち去にけり（人持去家有）
（16・3815）
i.山守が里辺に通ふ山道そ繁くなりける忘れけらしも（忘来下）（7・1261）
j.うるはしと思へりけらし（思篇来師）な忘れと結びし紐の解くらく思へば
（11・2558）
k.この山の黄葉の下の花を我はつはつに見てなほ恋ひにけり（反戀）
（7・1306）
l.雨も降る夜もふけにけり（夜毛更深利）今更に君去なめやも紐解き設けな
（12・3124）

（4）a は「来」字の１字で「ケリ」を読ませており、「ケリ」の第２音節部分は読み添えになっている。このような例は集中に１００例確認される。一方（4）bcd は「ケリ」の第１音節部分は「来」字であるが、第２音節部分は仮名書きあるいは訓字になっている。このような例は集中この３例のみである。次に（4）efg は「ケリ」が訓字１字で書かれた例である。それぞれ「在」８例、「有」１例、「為」１例確認される。特殊な例として（4）h

のように、音仮名＋訓字での表記例も１例のみ確認される。また、４０１例中３５例は「ケラシ」の例であるが、そのうち４例が「来下」（４）i、で１例が「来師」（４）j となっている。最後に、（４）k のように「ケリ」の２音節とも読み添えとなっている例が１６例確認される。特殊な例として、（４）l のように、第１音節部分が読み添えで第２音節部分が仮名書きの例が１例確認された。以上、１３６例と（１）a の１例を合わせた合計１３７例以外の残りの集中の「ケリ」２６４例は全て仮名書きである。（４）をみる限り、（１）における「ケリ」の表記法は特に問題はないように思われる。因みに、（１）は共に「けら」と訓ませているので、集中の「ケリ」の未然形を確認すると以下の（５）に示すように仮名書き３例、訓字１例がある。ここからも、（１）において「けら」と訓ませることに問題はないようである。

（５）a.妻もあらば摘みて食げまし沙弥の山野の上のうはぎ過ぎにけらずや（過去計良受也）（2・221）
b.梅の花咲きたる園の青柳は縵にすべくなりにけらずや（奈利尓家良受夜）（5・817）
c.この花の一よの内は百種の言持ちかねて折らえけらずや（所折家良受也）（8・1457）
d.泊瀬女が造る木綿花み吉野の瀧の水沫に咲きにけらずや（開来受屋）（6・912）

さて、（１）b「言ひ継ぎけらく（伊比都藝家良久）」の「久」は元暦校本と広瀬本以外の諸本には「之」とあり異同が存在する。だとするとここは「ケリ」＋「ラシ」の「けらし」と訓む可能性もある。「ケラシ」は集中に３５例ある。

（６）a.桜田へ鶴鳴き渡る年魚市潟潮干にけらし（塩干二家良之）鶴鳴き渡る（3・271）
b.うべしこそ我が大君は君ながら聞かしたまひてさすだけの大宮ここと定めけらしも（定異等霜）（6・1050）

基本的には（６）a のように、「桜田へ鶴鳴き渡る」という明確な証拠に基づいて「あゆち潟の潮が引く」という事態を推量する用法を「ケラシ」は負う。これは、強い蓋然性とも言うべきもので、しばしば（６）b のような「うべし（こそ）」との呼応もみられる。

翻って、（１）b は家持が部下の少咋の異心を諭すための歌で、神代の時からある世間の道理を説明する場面である。家持にとって、通時的に語り継がれてきたその道理は自明である。従って、推量する必要がないということと、そもそも推量の根拠なるものが存在しないという点で、（１）b において「ケラシ」とすると時制はともかく推量の意が出るのは文脈上不整合である。

以上、表記の面から表記法と異同を軸に（１）の訓みを検討した。（１）a は動詞「来（くらく）」とも助動詞「ケリ（けらく）」とも両用の訓みの可能性があり得るのに対して、（１）

b は少なくとも表記を見る限り「けらく」の訓み以外には考えられないようである。

3　動詞のアスペクト性の観点から

この節では動詞「来」と助動詞「ケリ」のアスペクト性についてみる。まず、動詞「来」についてだが、本動詞としての意味が希薄化して補助動詞として用いられる場合、即ちアスペクトとしての意味を担う場合がある。

（7）a.苦しくも降り来る雨か（零来雨可）三輪の崎狭野の渡りに家もあらなくに
【出現】（3・265）
b.沖辺より潮満ち来らし（之保美知久良之）可良の浦にあさりする鶴鳴きて騒きぬ　【増加】（15・3642）
c.草枕旅行く人を伊波比島幾代経るまで斎ひ来にけむ（伊波比伎尓家牟）
【継続】（15・3637）

（7）a は、動作の局面としては今まさに起こり始めたというように、この場合が雨が降ってくるという「出現」の意味を表す。（6）b も、意味としては「出現」に近いが、「出現」に比較して動作の局面としては後に置かれており、既にあるものが徐々に迫り来たり、増えたりする「増加」の意味を表している。（6）c は、「ずっと～してきた」という過去から現在にいたるまでの動作の局面を表す「継続」を表している。（3）b の「来」もこの継続の意味を表している。なお、（3）b と類似の表現として以下の３例がある。いずれも「継続」の意味を表している。

（8）a.神代より生れ継ぎ来れば（生継来者）人さはに国には満ちてあぢ群の通ひは行けど我が恋ふる（4・485）
b.手向すと天降りましけむ五百万千万神の神代より言ひ継ぎ来る（云續来在）神奈備の三諸の山は春されば春霞立ち秋行けば（13・3227）
c.隠り恋ひ息づき渡り下思に嘆かふ我が背古ゆ言ひ継ぎ来らし（伊比都藝久良之）世間は数なきものそ慰むることもあらむと里人の（17・3973）

次に助動詞「ケリ」についてだが、そもそも、一般に「ケリ」は過去の助動詞とされるが、「ケリ」にテンスの意をみることには多くの反論がある。その中でも、春日（1942）と山口（1985）は「ケリ」の語源を「来」＋「アリ」とみて、原義がアスペクトに由来するとみた。

（9）即ちケリはキアリであつて、「来」を形式動詞とする時は、動作の過去より継続して今に存在することを表すのであつて、「前カラシ（アリ）続ケテ今ニアル」

の義である。時からいへば動作の初を過去に想定するけれども、今に存在するのであるから現在でなくてはならない。元来アリの融合して出来た助動詞のセリ・ザリ・タリ・メリなど時は皆現在である。ケリは過去から動作が継続して現在に存在することを表すのを原義と考へることが、語の成立上妥当のやうであって、〈後略〉

（春日 1942:27）

（10）シ・シカ・・・動作・作用が起こって、それが続いている、あるいは、その結果が残っている。リ・タリに近い。
キ・ケ・・・過去から現在にまで動作・作用が続いている。ケリに近い。
のように、意味上、二系列に分かれているように感じられる。これは、しかし偶然でなく、前者が語源的にス（為）に遡り、後者がク（来）に遡るということと関係があるのではないだろうか。

〈中略〉（次に「ケリ」の意味を次の六つに分類する：筆者注）

①超時的事態（状態）を、初めて気づいたこと、改めて痛感したこととして述べる。
②恒常的事態を、初めて気づいたこと、改めて痛感したこととして述べる。
③過去に起こって結果の残っている動作・作用を、初めて気づいたこととして述べる。
④過去に起こった動作・作用を、初めて気づいたこととして述べる。
⑤過去または現在の事態の原因・理由に気づいて、事態の必然性に初めて納得したことを表す。
⑥過去の事態を伝聞として述べる。

（山口（1985）より抜粋）

山口（1985）の六分類は①～⑤までが、「ある事態に初めて気づく」というムード的な意味として共通している。ただし、⑥も④からの派生と捉えており、やはり全体としてムードの枠組みの中で考察している。しかし、「ケリ」のアスペクト性を首肯している点で春日（1942）を基底に捉えているといえる。春日（1942）・山口（1985）が用例として挙げている例は記紀歌謡、『万葉集』、漢文訓読文などの中にある従来「詠嘆」と解されてきた「ケリ」の例である。加えて言えば、集中には次のようにアスペクトとしての意味を強く表すような例も確認できる。

（11）常磐なす岩屋は今もありけれど（今毛安里家礼騰）住みける人そ常なかりける
（3・308）

３０８番歌の題詞には「博通法師紀伊の国に行き三穂の岩屋を見て作る」とあり、「岩屋がある」という事態は波線部にあるように現在において作者の眼前に広がっていることが分かる。ただし、伝説と化した久米の若子がいたその岩屋がまだ今もあるのだという驚きや発見の意も汲み取ることは十分可能であろう。しかし、問題は、当該部の「ケリ」が時制的過去から解放されていて敢えて訳するなら「今もずっと有り続けている」といったアスペクトの意の方が強いという点である（「ケリ」がムード的な意味を表すことについては後述する）。因みに、(11) の４句目の「住みける人そ（住家類人曽）」は山口（1985）における⑥に相当する、純粋に過去を表す「ケリ」である。即ち、「ケリ」には以上のようにアスペクトとテンスどちらか一方を強く表す例があるのであり、また、その中間的などちらの意とも採れるような中和した例も多く存在する。

以上、「来」と「ケリ」のアスペクト性についてみてきた。両者ともに、アスペクトとして「継続」の意味を表す場合があり、また、語源的にも近しい関係にある可能性を持つ語であるといえる。ということは、（１）の例は（３）と意味的に連続的な関係にあり、容易に交替し得る可能性を持つといえる。

４　「キ」「ケリ」の差異から

「ケリ」がモダリティとしての意味を持つというとき、それは主に「キ」と対比から論じられることが多い。「キ」「ケリ」はテンス上過去を表すという点において共通するが、モダリティに大きく関わる観点からその差異について諸説論じられるところである。この節では、経験性、ムードを中心に「キ」「ケリ」の差異を概観する。ただし、従来論の妥当性は中古仮名文の会話文においては首肯されるところであるが、地の文においては現在までに定説を得るに至っていない。また、殆どの論が中古仮名文を主に対象としているため、上代和歌の例に同じ規則が適用されるかについてはなお検討を要するだろう。

４．１　経験性

細江（1932）はトルコ語を参考にして「キ」は目睹回想を表し、「ケリ」は伝承・伝聞回想を表すとした。つまり、「キ」「ケリ」が対象とする事態を話者の経験という側面から直接的過去か間接的過去かに分けた分類である。細江の説はその後通説化するが、なお反論も多く、実際『万葉集』においてもいくつかの反例が確認され、単純に首肯されるものではない。例えば、細江の説明に従えば「ケリ」は話者が直接体験していない過去の事態を対象にするはずであるが、以下の例ではそれが説明できない。

(12) みやびをに我はあり<u>けり</u>（吾者有家里）やど貸さず帰しし我そみやびをにはある（2・127）

だが、そうはいっても（12）のような例は少なく、全体から見れば細江の指摘した傾向は認められることも事実であり、全面的に否定することもまたできない。では、ク語法に前接する「キ」「ケリ」に限定してみ場合、どのような差異がみられるだろうか。以下はク語法の第一前接語が助動詞「キ」である場合である。

（13）a.そら数ふ大津の児が逢ひし日におほに見しくは（於保尓見敷者）今ぞ悔しき（2・219）

b.住吉の名児の浜辺に馬立てて玉拾ひしく（玉拾之久）常忘らえず（7・1153）

c.我が背子をいづち行かめとさき竹のそがひに寝しく（背向尓宿之久）今し悔しも（7・1412）

d.秋の野の尾花が末を押しなべて来しくも著く（来之久毛知久）逢へる君かも（8・一 1577）

e.見まく欲り来しくも著く（来之久毛知久）吉野川音のさやけさ見るにともしく（9・1724）

f.天の川渡り瀬ごとに思ひつつ来しくも著し（来之雲知師）逢へらく思へば（10・2074）

g.手寸十名相植ゑしく著く（殖之久知久）出で見ればやどの初萩咲きにけるかも（10・2113）

h.生ふる玉藻のうちなびく心は寄りて朝露の消なば消ぬべく恋ひしくも（戀久毛）著くも逢へる隠り妻かも（13・3266）

i.かなし妹をいづち行かめと山菅のそがひに寝しく（曽我比尓宿思久）今し悔しも（14・3577）

j.ひな曇り碓氷の坂を越えしだに妹が恋ひしく（伊毛賀古比之久）忘らえぬかも（20・4407）

k.夜のほどろ我が出でて来れば我妹子が思へりしくし（念有四九四）面影に見ゆ（4・754）

l.里見れば里も住み良しもののふの八十伴の緒のうちはへて思へりしくは（思煎敷者）天地の寄り合ひの極み万代に栄え行かむと思へりし大宮すらを（6・1047）

（13）a～j は「キ」に前接する動作の動作主は作者自身である。一方、（13）k の「あなたが物思いに沈んでいた姿を面影として見る」というのは、恋人の姿を面影として見ているのは作者だが、「キ」が承接する事態の経験者はその恋人なので前の例とはこの点で異なる。（13）l も同様の表現であるが、作者福麻呂が近江の都でのかつての思惟内容を経験的に語っているのではなく、往時にそこいた人々の思惟内容を語っているので、ここも「キ」の前接する事態は作者の経験を指してはいない。このように、「キ」が表す事態の動作主が

歌の作者か否かという違いはあるが、いずれも動作主の直接の経験を表している。

一方で（１）を「ケリ」とみた場合、経験性という点からは（13）の「キ」とは差があるように思われる。次に、（１）を再掲する。

（１）a.古ゆ言ひ継ぎけらく（言続来ロ）恋すれば苦しきものと玉の緒の継ぎては言へど娘子らが（13・3255）

b.大汝少彦名の神代より言ひ継ぎけらく（伊比都藝家良久）父母を見れば貴く妻子見ればかなしく愛しうつせみの（18・4106）

どちらの例も「大昔から世の中で言い継いできたこと」を対象にしており、少なくとも作者個人の経験には属さない事態である。というよりも寧ろ、そういった事態が連綿と継続してきたことを表しており、そもそも特定の個人の経験を表しているわけではない。つまり、明確な動作主が存在しないのである。ということは、ク語法にあって、細江説は「キ」に関しては一定の説明基準となり得るが、「ケリ」に関しては有効な観点にはなり得ていないと言える。

４．２　ムード

夙に多くの指摘を受けていることに、「ケリ」が発見や気づきの意味を表すという緒論がある。その中でも鈴木（2012）は従来説を整理した上で「１、思い至り」、「２、再認識」、「３、気づき」、「４、言及」のような分類を提示している。

この分類に従えば、（１）の２例は「言及」の意味になるだろうか。「言及」の意味を表すのは例えば「昔、竹取の翁といふものありけり」のような物語の導入や伝聞などを表す「ケリ」であるが、『万葉集』でこれに似た例として以下のものがある。

（14）み吉野の耳我の嶺に時なくそ雪は降りける（雪者落家留）間なくそ雨は降りける（雨者零計類）その雪の時なきがごとその雨の（1・25）

一方で、（１）はこれから言及することを予告するもので（14）と同列に扱われるかという点に問題がある。言及することの予告とは、発言内容に先行して発言される事柄の出典を明示するというもので「子曰く」のような例に準ずるものである。そして、直後には発言内容が置かれる。仮にこの用法を「引用」と名付けると、就中にこのような使われ方をする「ケリ」の例は見出せない。辛うじて次のような例が確認されるのみである。

（15）古ゆ人の言ひける（人之言来流）老人のをつといふ水そ名に負ふ瀧の瀬（6・1034）

（15）は準体句のようにも見える点微妙だが、「老人」にかかる連体修飾と見た方が穏当のように思われる。従って、２句目で切れないので（１）のように「けらく」で一旦切れるあり方とは異なる。何より、直後に発言内容が来ることもない。一方、ク語法ではこの引用を表す例は見られる（因みに、「曰く」の「く」もク語法である）。

（16）a.永き世にありけるものを世間の愚人の我妹子に告りて語らく（告而語久）しましくは家に帰りて父母に事も語らひ明日のごと（9・1740）
b.寺々の女餓鬼申さく（女餓鬼申久）大神の男餓鬼賜りてその子孕まむ（16・3840）

このように「ケリ」には引用の用法はなくク語法にはあるわけだが、（１）は最終的にク語法が包摂することを思えば特に矛盾する例として扱う必要もないように思われる。

ところで、鈴木（2012）の４分類のうち、１～３までは「気づき」と概括してよく、４の「言及」とは隔絶される。翻ると、山口（1985）の六分類も①～⑤は鈴木の１～３に該当し、⑥は４に該当するというように、やはり「ケリ」の意味として大きく二様に分かたれる。就中には「気づき」の「ケリ」は多く見出すことができるが、（１）にそうした「気づき」の意味を読み取ることは難しく、「言及」としてみることが穏当であろう。

以上、本節では「ケリ」のモダリティとしての側面をみるため「キ」との対比から経験性とムードという２つの主な観点において考察した。その結果、経験性という観点は「キ」の差異を説明する上で有効ではないが、ムードという観点は「ケリ」をモダリティとして特立する上で有効のように思われる。かつ、ク語法に前接する「ケリ」のモダリティ的意味は「言及」を表している。

5　考察

本章は（１）の「ケリ」について「来」と見做せるかを主眼に述べてきた。これをまとめると表記・スペクト的意味から当該箇所は「ケリ」「来」の両用の可能性があると言える。このうち、（３）a は「気づき」や「言及」としての意味は取れないから「ケリ」と訓むことはできない。しかし、残る（１）ab と（３）b は表現上も類似しており、意味としても「言及」と捉えても問題がない。従って、もともと（１）ab（３）b の３例全てが助動詞「ケリ」とも動詞「来」とも訓める可能性を孕んでいたと言える。また、（１）a と（３）b は全く異なる文脈における使用にみえるが、次の歌を仲介として類縁関係にあると言える。

（17）磯城島の大和の国は言霊の助くる国ぞま幸くありこそ（13・3254）

（17）は（１）a の前歌にあたる歌で、かつその内容は日本国が遥か昔より言霊信仰に支えられた国であることを寿ぐという点で（３）b と同じ発想にあるものである。つまり、（１）

a と（3）b は共通の表現背景を持ちながら展開する歌なのである。このような表現意図の類似が同時に表記とスペクト的意味からの類推を促し結果として「ケリ」と「来」が混同されるようになったものと思われる。少なくとも、後人の理解では両者を凄然と見分けることは極めて困難であったように思う。諸本間の異同はその事実を如実に物語っている。

それよりも問題になるのが、ク語法に前接する当該の「ケリ」についてはそのモダリティ的意味においていずれも「言及」を表す例しかなく、「気づき」を表す例は確認されないという点である。なぜなら、「気づき」は正に話者の認識そのものを問題にする要素であるが、「言及」は単に過去にそういった事態があったことを示しているに過ぎず、どちらかと言えばテンス・アスペクトに近い。つまり、「気づき」と「言及」はモダリティとして同列に扱うにはかなり差があるのである。このようにみれば、表２の語法内部における助動詞の偏りにおいて「ケリ」を例外視する必要がないとういことになる。

では、なぜク語法の内部には典型的にモダリティを表すような助動詞は生起しないのであろうか。モダリティは文全体の統覚を担う要素であるから、それが一文に複数生起することは通常あり得ない。ク語法内部にそれらのモダリティ的要素が生起しないのはつまり、ク語法そのものが既にモーダルな意味を有しているからである。そのようにみることでしか表２における助動詞の偏りは説明できないだろう。

そして、そのク語法の持つモーダルな意味とは既に各章で論じてきたように可能世界という話者の認識である。それは、想像・仮定・評価など話者の主観的な認識に根差す雑多な要素の総称である。可能世界は話者にとって十分想定可能な認識なのであるから、認識の埒外にあるもの、即ち改めて認識しなければならないような事態はその対象とすることができないはずである。翻って、「気づき」の意味を表す「ケリ」は就中にも多く見出せる。しかし、そういった典型的な「ケリ」はク語法に前接することがなく、「ケリ」の中でもテンス・アスペクトに近い「言及」を表す例のみがク語法に前接するという事実は、ク語法の性質の一端を示すものである。

6　おわりに

第１章で述べたように、ク語法が目的格に位置する場合の主文述語の偏りからク語法は可能世界を表す形式であるとみた。これはク語法という名詞句そのものに話者の認識に根差した意味論的意味を求めていくと言う観点である。通常、このような観点はモダリティ研究のパラダイムの中で語られることが多い。従って、言い方を換えれば本研究の立場はク語法にモーダルな意味を求めていくという観点に立脚しているとも言える。無論、ク語法という接尾辞に一般的なモダリティ研究の方法論的手法を持ち込むことはその整合性において問題も大きいだろう。

しかし、ク語法は述部に位置することで名詞述語文を形成する場合も多く観察される。そして、名詞述語文そのものにモーダルな価値を認めていくという観点は十分成立し得る。一方で、例えば「ベシ」は意志・推量・当為などモーダルな意味を持つ所謂法助動詞の一

つであるが、それが準体句となって文の格成分に位置する場合がある。

（18）世間の苦しきものにありけらし恋にあへずて死ぬべき思へば〈可死念者〉
（4・738）

このような例からすれば、ク語法を法助動詞というモーダルな意味を持つ助動詞群の中で等価なものとして比較していくことは意味のある観点である。本章はそういった観点を下支えする上で「ケリ」の使用について考察した。

統語　まとめと今後の課題

１　各章のまとめ

本論は上代日本語におけるク語法について考察を行った。各章の考察内容は以下の通りである。

（１）第１章　ク語法が目的格に位置する場合の主文述語との関係。
第２章　ク語法が願望表現「欲ル」「欲シ」の対象になる場合の意味。
第３章　助詞「ニ」が後接するときのク語法と準体句の相違。
第４章　ク語法内述語が「ケリ」である場合の意味。

以下、各章ごとの考察を改めてまとめる。

１．１　第１章

第１章は、動詞述語「見ル」「思フ」の目的格にク語法と準体句が位置する例を対象に考察した。従来にも指摘されてきた通り、「見ル」の目的格には準体句が多く、「思フ」の目的格にはク語法が多く位置する。しかし、例外も存在する。すなわち、「見ル」の目的格にク語法が、「思フ」の目的格に準体句が位置する場合である。このうち、「見ル」の目的格にク語法が位置する場合は、非現在の事態や、対象の属性を表す例しか存在せず、ク語法が現在のありのままの事態を表す例がみられない。つまり、ク語法には想念や評価といった話者の主観的な認識を表すような例しか存在しない。一方、「思フ」の場合は文字通り思惟の内容を表すのであるから、ク語法がこの「思フ」の目的格になることが多いという事実と總合してク語法の表す事態の様相を可能世界と呼称した。可能世界は、話者の主観に根差した認識であり、ク語法が可能世界を表すことは、事態をありのままに差し出す準体句とは決定的に異なる観点である。

１．２　第２章

第２章は、願望を表す動詞「欲ル」とその形容詞形「欲シ」の対象にク語法がなる場合と、ならない場合を比較し考察した。そこでク語法が対象となる場合の特徴として、願望行為が継続的、願望達成条件の存在、助動詞「ム」の接続が必須などの点がみられた。そして、これは準体句にはみられない特徴である。これらは、いずれも願望行為が特定の時

空間に定位されない脱現場的・脱時間的な事態を表している。また、助動詞「ム」の接続は、ク語法が本来有していた可能世界を表すという意味が、願望表現という文脈の中に置かれることでより意識的に分出された形式であると考えられる。この助動詞接続という現象は上代から中古にかけて起こったコト名詞句に先行するものであり、言語史の観点からも興味深い現象である。さらに、「～マクホシ」というク語法による願望表現形式は中古に助動詞「マホシ」を誕生させる。中古日本語の願望表現の体系をみる上でも上代におけるあり様は注意されるべきである。

１．３　第３章

第３章は、形容詞ク語法と形容詞準体句に助詞「ニ」が後接する例について考察した。助詞「ニ」の接続に関しては夙に「現実模写的な」事態を表す「機縁性」の例がク語法には存在せず、ク語法＋「ニ」という形式は準体句に比べて「主体的」な表現であるとことが指摘されている。従来論では名詞句内述語の品詞に関しては特に問題としていないが、他方、形容詞はその語彙的な性質上、文脈に依存するかたちで主観的にも客観的にもなり得る表現である。従って、形容詞形に限定すれば従来論では捉えきれなかったク語法と準体句の異なりがみえてくる。形容詞ク語法＋「ニ」では、評価や感慨など話者の個人的な感じ方が問題になる例がみられるのに対し、準体句形容詞＋「ニ」は一般的な想定に基づく属性付与しかみられない。このような違いはク語法の一般的な性質から導かれるものであり、準体句との原理的な異なりを示唆している。

１．４　第４章

第４章は、ク語法内述語に助動詞「ケリ」が接続した例を対象に考察した。「ケリ」は過去を表す以外に話者の気付きなどのモーダルな意味を表す助動詞である。一方で、ク語法内に接続する他の助動詞をみると、「ベシ」「マジ」「メリ」「ナリ」「ジ」「マシ」「ラシ」などのモーダルな意味を表す助動詞は接続することがない。問題となるク語法に接続する「ケリ」の例も、テンス・アスペクトを表す例のみであり、これによってク語法はその内部にモーダルな意味を表す助動詞を接続することが例外なく存在しないことが分かる。これは、そういったモーダルな意味を表す助動詞群とク語法とが文法カテゴリーにおいて等価な関係にあることを意味する。無論、接尾辞であるク語法と活用語である助動詞とが即同等であるとするにはなお多くの問題がある。しかし、ク語法内部における特定の助動詞群の非接続はク語法が単なる名詞句形成形式であるだけでなく、意味論的に特立される形式であるということを意味する。

２　本研究の成果と課題

本研究において最も重要なタームは可能世界である。ク語法は可能世界を表す言語形式であるとする作業仮説に基づいて本研究は進められてきた。その中で、得られたことと今後の研究の展望を述べる。同時に残された課題についても述べる。

２．１　本研究の成果

ク語法をみる上で可能世界というタームを設けなければならない理由は準体句との鮮明な対比を捉えるためである。例えば、ク語法と準体句が動詞述語の目的格に位置するとき、「思フ」の目的格にはク語法がなり易く、「見ル」の目的格には準体句がなり易いという事実が知られている。従来論では、それを傾向として捉え、対置される少数例は例外として扱われることになる（第１章）。同様に、ク語法と準体句に助詞「ニ」後接する例についても、「機縁性」の例がク語法にないという特徴が指摘されているが、その他の「場面性」「累加性」「因由性」の例はク語法と準体句ともに確認される点で、ク語法と準体句の違いが一部において観察されるといったものであった（第３章）。つまり、ここには例外の存在とク語法の一般化という点において課題が残されていたと言える。ク語法に可能世界という概念を用いることは、そういったク語法の性質の一般化を目指すと同時に、例外の問題を解消するものである。そうすることで、準体句との違いがより原理的な次元で捉えることできたと考える。

可能世界とは、話者の主観に根差した認識である。従って、それは他者のとの共有を前提とする客観的認識の対極にあるものである。ある事態を言語化するというとき、その事態の生起が話者にとってどれだけ確実であるか、あるいは他者と同じ認識として共有できるかという主観と客観が意識的乃至無意識的に言語の場には常にせめぎ合っている。また、より主観に根差した言語化にあっても、確からしさの程度や運用の種類には多様な異なりが存在する。このような言語の様相を捉えようとする試みがモダリティー研究である。モダリティー研究は通常、文の述語部分における形式に注視するものであるが、同じような観点を接尾辞であるク語法に求めることは問題なしとは言えない。しかし、事態をどのような認識のもとに差し出すのかという観点はク語法をみる上でも十分有効であるように思う。現代日本語では主観と客観の多用な言語運用をモダリティー形式に意味を付与することで弁別するのに対し、上代日本語では名詞句そのものにも意味を付与していたと捉えることで、ク語法はモダリティーに包摂される可能性を持つ。

改めてまとめると、本研究の主眼は、ク語法を様々な文環境におけるあり様の観察から可能世界を表す形式として特立したものとして捉えようとする点と、それによって準体句との対比をより鮮明に捉えようとする点にある。ク語法をモダリティーと同等かそれに近似するものと捉える観点は従来論ではなかった観点である。本研究の成果は、そのように捉えることで同じ名詞句形成形式である準体句との差異を傾向としての連続ではなく、原

理的な異なりとして捉えた点である。

２．２　今後の展望

ク語法に可能世界をみることは、その他の言語現象をみる上でも新たな観点を提示することができる。例えば、願望を表す述語「欲ル」「欲シ」の対象にク語法がなるとき、例外なく助動詞「ム」が接続し「～マク」という形式を構成する。これは、もともと可能世界を表すク語法が願望表現という文脈の中で獲得した言語変化の一端と捉えることもできる。興味深いことに、上代から中古にかけての「コト」にも同様の現象が確認されており、名詞句変遷の展開を捉える上でも上代におけるク語法のあり様は注意されるべきである。

また、他にもク語法にはいくつかの特徴や問題がみられる。１つ目は、否定の助動詞「ズ」が接続した「～ナクニ」という形式である。この形式は準体句にも存在するが、ク語法にあっては圧倒的な数が確認される。２つ目は、動詞「懸ク」のク語法形は「カケマクモ」である。これは必ず「ム」を接続し多くの数が確認される例である。３つ目は、宣命の中で「ナモ」の結びに現れるク語法である。宣命の中では「ナモ」の結びにのみク語法が現れ他の係助詞の結びにク語法は表れない。４つ目は、表すク語法の例である。通常、ク語法はコトガラを表すことが多いが、例外的にモノを表す例が存在する。５つ目は、八代集におけるク語法である。ク語法は中古以降和文の中ではほぼ消滅するが、少数ながら和歌の中で残存している。しかし、ほぼ全てが『万葉集』からの類歌となっている。その中で、ク語法が使用されている万葉歌であるにも拘らず、ク語法の部分が他形式になっている類歌も存在する。６つ目は、ク語法と形容詞の関係である。ク語法は準体句に比べ形容詞を句内述語にする例が多い。以上のようなそれぞれの特徴はク語法の一般的な性質としてどのように関係しているのであろうか。その説明が求められていよう。

また、本研究が文学的観点からも首肯される意義がある。例えば、次の歌は第１章に挙げた防人歌である。

（１）家の妹ろ我を偲ふらし真結ひに結ひし紐の解くらく思へば〈登久良毛倍婆〉
（20・4427）

従来、ここでの「紐が解けること」という事態は恣意的に「見ル」対象として話者の現在眼前の事態として解釈されてきた。しかし、本研究の立場に依れば必ずしもそうみる必要はない。特定の時空間に定位されない脱現場的・脱時間的な事態の様相は、防人歌に伴う浮動性、旅情性という性質に鑑みて重要な観点となり得る。

また、次の歌は第３章で示した就中唯一の文武御製である。

（２）み吉野の山のあらしの寒けくに〈寒久尓〉はたや今夜も〈為當也今夜毛〉我がひとり寝む（1・74）

文武天皇は不遇の青年天子として語られることの多い人物である。その彼が、祖父天武が壬申の折に決起し、また父草壁皇子の世代の六皇子が盟約を果たした神聖な土地である吉野において感じる風を「寒い」と述べる当該歌は、それがク語法で表されている点もまた注意すべきである。まさに、ここでの「寒さ」は彼にしか感じ得ない感覚として表現されているのであって、当該歌が絶唱とされる所以にク語法が果たしている役割も小さくはないだろう。

このように、本研究は文学的解釈おいても貢献できる可能性がある。無論、文学的解釈と言語学的事実は本来異なる次元において語られるものであるが、両者の立場を總合・止揚することでより確かな『万葉集』の実態が明らかになる。本研究の考察はそうした「万葉学」の極めて小さな過程の１つである。

以上、通時的にはある言語変化をみる上でク語法に起こった現象が参照すべきものであること、共時的には類型的とも言えるク語法の諸特徴がより一般的な性質として統一的に説明される可能性があること、文学的にはク語法の性質が解釈に少なからず影響を与え得ることを述べた。これは、今後の研究の中でさらに具体化、先鋭化されるだろう。

３　本研究の課題

本研究はク語法と準体句との差異をみるために可能世界というタームを用いて論を展開してきた。その中で、可能世界というターム自体にも様々な説明を加えてきた。いま、それを概略して述べれば、可能世界とは話者の主観に根差した事態認識であると言える。これは所謂、様相論理学で語られるところの「可能命題」を想起させる。しかし、文法体系としての言語学と和歌文学としての解釈学の双方の立場を重視する本研究にあっては、様相論理学の「可能命題」という概念をそのまま援用することはできない。なぜなら、それぞれの観察からその外延が存外に広いと思われるからだ。主に本論で用いた語を並べると、想念・感慨・想像・想定・思惟・仮定・評価・回想・予想・概観などが挙げられる。可能世界はこれらの雑多な語の総称として用いられていると言ってもよい。従って、個々の例をみる際に可能世界という説明手段を用いることは却って個々具体の現象を正しく把握できない恐れがある。

しかし、重要なのは、本研究の目的が個々具体のク語法のあり様を問うているのではなくて、同じ名詞句形成形式である準体句となぜ異なるのかという名詞句そのものの性質を問うている点である。確かに、ク語法は様々な文環境の中でそれぞれの意味を帯びているが、それがク語法全体の一般的な性質とどのような関係にあるのかが問題なのである。本研究の考察は上代日本語における全てのク語法の例について矛盾のない統一的な説明原理を目指している。そのために、さらに広範にク語法の例を観察し考察を積み上げる必要がある。その過程で可能世界というタームがさらに具体化されるかもしれないし、あるいは全く別のタームに置き換わることもあり得る。その点において、可能世界は作業仮説なの

である。

つまり、可能世界というターム自体はク語法全体の例を観察し考察した上で初めて真のタームたり得ると言える。よって、さらなる論考の集積が本研究の課題である。

4　おわりに

ク語法は上代日本語という極めて限られた文献しか残存していない時代にのみ活発的にみられる言語形式である。しかし、ク語法を理解することは上代日本語の体系を再構成するだけでなく、通時的な言語変遷を捉える上でも多くの示唆を与えてくれる。

また、ク語法が『万葉集』という歌の中において展開されているという事実も見逃してはならないだろう。歌は日常語ではない。言語に対して意識的・自覚的な営みである。その歌々の中にク語法が用いられているということは、同じ名詞句形成形式である準体句とは異なる、弁別される何らかの要素があったとみる方が自然であろう。それは、歌にとってク語法が必要な表現であったということも意味する。従って、ク語法を理解することは、翻って歌そのものの理解とも言える。本研究の立場が「万葉学」という途方もない大樹の一子葉である所以である。

付録

本研究で対象としたク語法の例は萬葉集中の５３１例と、それに傍証として加えた記紀歌謡中の２０例である。以下、その全用例を示す。ただし、井手至・毛利正守（2008)『新校注萬葉集』和泉書院と『萬葉集電子総索引 CD - ROM 版』塙書房、山路平四郎（1973)『記紀歌謡評釈』三秀舎を参照した訳文のみを載せ原文表記は省略する。

真木のつまでを百足らず筏に作りのぼすらむいそはく見れば神からならし 1・50
み吉野の山のあらしの寒けくにはたや今夜も我がひとり寝む 1・74
宇治間山朝風寒し旅にして衣貸すべき妹もあらなくに 1・75
我が大君ものな思ほしそ皇神の副へて賜へる我がなけなくに 1・77
みこも刈る信濃の真弓引かずして強ひさるわざを知るといはなくに 2・97
我が里に大雪降れり大原の古りにし里に降らまくは後 2・103
み吉野の玉松が枝は愛しきかも君がみ言を持ちて通はく 2・113
楽浪の大山守は誰がためか山に標結ふ君もあらなくに 2・154
山吹の立ちよそひたる山清水汲みに行かめど道の知らなく 2・158
神風の伊勢の国にもあらましをなにしか来けむ君もあらなくに 2・163
見まく欲り我がする君もあらなくになにしか来けむ馬疲るるに 2・164
見まく欲り我がする君もあらなくになにしか来けむ馬疲るるに 2・164
磯の上に生ふるあしびを手折らめど見すべき君がありといはなくに 2・166
ひさかたの天見るごとく仰ぎ見し皇子の御門の荒れまく惜しも 2・168
あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隠らく惜しも 2・169
かけまくもゆゆしきかも言はまくもあやに恐き明日香の真神の原に 2・199
かけまくもゆゆしきかも言はまくもあやに恐き明日香の真神の原に 2・199
い巻き渡ると思ふまで聞きの恐く引き放つ矢の繁けく大雪の乱れて来れ 2・199
降る雪はあはにな降りそ吉隠の猪養の岡の寒からまくに 2・203
ねもころに見まく欲しけどやまず行かば人目を多みまねく行かば 2・207
我が恋ふる妹はいますと人の言へば岩根さくみてなづみ来し良けくもそなき 2・210
良けくもそなきうつせみと思ひし妹が玉かぎるほのかにだにも見えなく思へば 2・210
岩根さくみてなづみ来し良けくもぞなきうつそみと思ひし妹が灰にていませば 2・213
そら数ふ大津の児が逢ひし日におほに見しくは今ぞ悔しき 2・219
難波潟潮干なありそね沈みにし妹が姿を見まく苦しも 2・229
立ち留まり我に語らくなにしかももとなとぶらふ聞けば音のみし泣かゆ語れば 2・230
三笠山野辺行く道はこきだくも繁く荒れたるか久にあらなくに 2・232
三笠山野辺ゆ行く道こきだくも荒れにけるかも久にあらなくに 2・234
瀧の上の三船の山に居る雲の常にあらむと我が思はなくに 3・242
み吉野の三船の山に立つ雲の常にあらむと我が思はなくに 3・244

人漕がずあらくも著し潜きする鴛鴦とたかべと舟の上に住む 3・258
馬ないたく打ちてな行きそ日並べて見ても我が行く志賀にあらなくに 3・263
苦しくも降り来る雨か三輪の崎狭野の渡りに家もあらなくに 3・265
志賀の海人はめ刈り塩焼き暇なみくしらの小櫛取りも見なくに 3・278
栲領巾のかけまく欲しき妹の名をこの背の山にかけばいかにあらむ 3・285
ももしきの大宮人の熟田津に舟乗りしけむ年の知らなく 3・323
明日香川川淀去らず立つ霧の思ひ過ぐべき恋にあらなくに 3・325
見渡せば明石の浦に燭す火のほにそ出でぬる妹に恋ふらく 3・326
飫宇の海の河原の千鳥汝が鳴けば我が佐保川の思ほゆらくに 3・371
軽の池の浦回行き廻る鴨すらに玉藻の上にひとり寝なくに 3・390
朝に日に見まく欲りするその玉をいかにせばかも手ゆ離れざらむ 3・403
岩戸割る手力もがも手弱き女にしあればすべの知らなく 3・419
石上布留の山なる杉群の思ひ過ぐべき君ならなくに 3・422
人の思ひつつ通ひけまくはほととぎす鳴く五月にはあやめ草花橘を玉に貫き 3・423
草枕旅の宿りに誰が夫か国忘れたる家待たまくに 3・426
みつみつし久米の若子がい触れけむ磯の草根の枯れまく惜しも 3・435
長き夜をひとりか寝むと君が言へば過ぎにし人の思ほゆらくに 3・463
妹が見しやどに花咲き時は経ぬ我が泣く涙いまだ干なくに 3・469
かけまくもあやに恐し言はまくもゆゆしきかも我が大君皇子の命 3・475
かけまくもあやに恐し言はまくもゆゆしきかも我が大君皇子の命万代に 3・475
かけまくもあやに恐し我が大君皇子の命もののふの八十伴の緒を 3・478
夜は夜の明くる極み思ひつつ眠も寝かてにと明かしつらくも長きこの夜を 4・485
我が背子は物な思ひそ事しあらば火にも水にも我がなけなくに 4・506
千鳥鳴く佐保の川瀬のさざれ波止む時もなし我が恋ふらくは 4・526
梓弓爪引く夜音の遠音にも君の御幸を聞かくし良しも 4・531
玉桙の道をた遠み思ふそら安けなくに嘆くそら苦しきものを 4・534
しきたへの手枕まかず間置きて年そ経にける逢はなく思へば 4・535
大和道の島の浦回に寄する波間もなけむ我が恋ひまくは 4・551
ちはやぶる神の社に我が掛けし幣は賜らむ妹に逢はなくに 4・558
恋ひ死なむ時は何せむ生ける日のためこそ妹を見まく欲りすれ 4・560
黒髪に白髪交じり老ゆるまでかかる恋にはいまだあはなくに 4・563
あしひきの山に生ひたる菅の根のねもころ見まく欲しき君かも 4・580
生きてあらば見まくも知らずなにしかも死なむよ妹と夢に見えつる 4・581
春日山朝立つ雲の居ぬ日なく見まくの欲しき君にもあるかも 4・584
心ゆも我は思はずき山川も隔たらなくにかく恋ひむとは 4・601
なかなかに黙もあらましをなにすとか相見そめけむ遂げざらまくに 4・612
剣大刀名の惜しけくも我はなし君に逢はずて年の経ぬれば 4・616

たわやめと言はくも著く手童の音のみ泣きつつたもとほり君が使ひを 4・619
うはへなきものかも人はかくばかり遠き家道を帰さく思へば 4・631
はしけやし間近き里を雲居にや恋ひつつ居らむ月も経なくに 4・640
今は我はわびそしにける息の緒に思ひし君をゆるさく思へば 4・644
相見ては月も経なくに恋ふと言はばをそろと我を思ほさむかも 4・654
相見ぬは幾久さにもあらなくにここだく我は恋ひつつもあるか 4・666
朝に日に色付く山の白雲の思ひ過ぐべき君にあらなくに 4・668
月読の光に来ませあしひきの山きへなりて遠からなくに 4・670
月読の光は清く照らせれど惑へる心思ひあへなくに 4・671
思ふらむ人にあらなくにねもころに心尽くして恋ふる我かも 4・682
今は我は死なむよ我が背生けりとも我に寄るべしと言ふといはなくに 4・684
このころは千年や行きも過ぎぬると我や然思ふ見まく欲りかも 4・686
海山も隔たらなくになにしかも目言をだにもここだ乏しき 4・689
うはへなき妹にもあるかもかくばかり人の心を尽くさく思へば 4・692
恋草を力車に七車積みて恋ふらく我が心から 4・694
栲縄の長き命を欲しけくは絶えずて人を見まく欲りこそ 4・704
栲縄の長き命を欲しけくは絶えずて人を見まく欲りこそ 4・704
鴨鳥の遊ぶこの池に木の葉落ちて浮きたる心我が思はなくに 4・711
むらきもの心砕けてかくばかり我が恋ふらくを知らずかあるらむ 4・720
常世にと我が行かなくに小金門にもの悲しらに思へりし我が子の 4・723
今しはし名の惜しけくも我はなし妹によりては千度立つとも 4・732
月夜には門に出で立ち夕占問ひ足占をそせし行かまくを欲り 4・736
夜のほどろ我が出でて来れば我妹子が思へりしくし面影に見ゆ 4・754
夜のほどろ出でつつ来らく度まねくなれば我が胸切り焼くごとし 4・755
うち渡す竹田の原に鳴く鶴の間なく時なし我が恋ふらくは 4・760
人目多み逢はなくのみそ心さへ妹を忘れて我が思はなくに 4・770
人目多み逢はなくのみそ心さへ妹を忘れて我が思はなくに 4・770
うつたへにまがきの姿見まく欲り行かむと言へや君を見にこそ 4・778
春の雨はいやしき降るに梅の花いまだ咲かなくいと若みかも 4・786
妹が見し楝の花は散りぬべし我が泣く涙いまだ干なくに 5・798
直に逢はずあらくも多くしきたへの枕去らずて夢にし見えむ 5・809
かけまくはあやに恐し足日女神の尊韓国を向け平らげて 5・813
梅の花散らくはいづくしかすがにこの城の山に雪は降りつつ 5・823
梅の花散らまく惜しみ我が園の竹の林にうぐひす鳴くも 5・824
春なればうべも咲きたる梅の花君を思ふと夜眠も寝なくに 5・831
我がやどの梅の下枝に遊びつつうぐひす鳴くも散らまく惜しみ 5・842
梅の花夢に語らくみやびたる花と我思ふ酒に浮かべこそ 5・852

うち臥い伏して思ひつつ嘆き伏せらく国にあらば父取り見まし家にあらば 5・886
神代より言ひ伝て来らくそらみつ大和の国は皇神の厳しき国言霊の 5・894
憂けく辛けくいとのきて痛き傷には辛塩を注くちふがごとくますますも 5・897
憂けく辛けくいとのきて痛き傷には辛塩を注くちふがごとくますますも 5・897
語らへばいつしかも人となり出でて悪しけくも良けくも見むと 5・904
悪しけくも良けくも見むと大船の思ひ頼むに思はぬに横しま風のにふふかに 5・904
しましくも良けくはなしにやくやくにかたちつくほり朝な朝な 5・904
かはづ鳴くなへ紐解かぬ旅にしあれば我のみして清き川原を見らくし惜しも 6・913
あかねさす日並べなくに我が恋は吉野の川の霧に立ちつつ 6・916
浦を良みうべも釣はす浜を良みうべも塩焼くあり通ひ見さくも著し清き白浜 6・938
なのりそ刈る深海松の見まく欲しけどなのりその己が名惜しみ間使ひも遣らずて 6・946
馬並めて行かまし里を待ちかてに我がせし春をかけまくもあやに恐く 6・948
あやに恐く言はまくもゆゆしくあらむとあらかじめかねて知りせば千 6・948
梅柳過ぐらく惜しみ佐保の内に遊びしことを宮もとどろに 6・949
奥山の岩に苔生し恐くも問ひたまふかも思ひあへなくに 6・962
名付けそめけめ名のみを名児山と負ひて我が恋の千重の一重も慰めなくに 6・963
かくしつつあらくを良みぞたまきはる短き命を長く欲りする 6・975
山のはのささらえをとこ天の原門渡る光見らくし良しも 6・983
雲隠り行くへをなみと我が恋ふる月をや君が見まく欲りする 6・984
茂岡に神さび立ちて栄えたる千代松の木の年の知らなく 6・990
故郷の飛鳥はあれどあをによし奈良の飛鳥を見らくし良しも 6・992
御民我生ける験あり天地の栄ゆる時にあへらく思へば 6・996
一昨日も昨日も今日も見つれども明日さへ見まく欲しき君かも 6・1014
我が背の君をかけまくもゆゆし恐し住吉の現人神船の舳に 6・1020・1021
大崎の神の小浜は小さけど百舟人も過ぐといはなくに 6・1023
後れにし人を偲はく思泥の崎木綿取り垂でて幸くとそ思ふ 6・1031
里見れば里も住み良しもののふの八十伴の緒のうちはへて思へりしくは天地の寄り合ひの
極み万代に栄え行かむと思へりし 6・1047
色めづらしく百鳥の声なつかしきありが欲し住み良き里の荒るらく惜しも 6・1059
語りにすれば聞く人の見まく欲りする御食向かふ味経の宮は見れど飽かぬかも 6・1062
まそ鏡敏馬の浦は百舟の過ぎて行くべき浜ならなくに 6・1066
常はかつて思はぬものをこの月の過ぎ隠らまく惜しき夕かも 7・1069
霜曇りすとにかあるらむひさかたの夜渡る月の見えなく思へば 7・1083
大き海に島もあらなくに海原のたゆたふ波に立てる白雲 7・1089
馬並めてみ吉野川を見まく欲りうち越え来てそ瀧に遊びつる 7・1104
泊瀬川流るる水脈の瀬を速みゐで越す波の音の清けく 7・1108
佐保川にさをどる千鳥夜くたちて汝が声聞けば寝ねかてなくに 7・1124

年月もいまだ経なくに飛鳥川瀬々ゆ渡しし石走もなし 7・1126
住吉の名児の浜辺に馬立てて玉拾ひしく常忘らえず 7・1153
時つ風吹かまく知らず吾児の海の朝明の潮に玉藻刈りてな 7・1157
浜清み磯に我が居れば見む人は海人とか見らむ釣もせなくに 7・1204
沖つ梶やくやくしぶを見まく欲り我がする里の隠らく惜しも 7・1205
沖つ梶やくやくしぶを見まく欲り我がする里の隠らく惜しも 7・1205
名草山言にしありけり我が恋ふる千重の一重も慰めなくに 7・1213
玉津島見てし良けくも我はなし都に行きて恋ひまく思へば 7・1217
玉津島見てし良けくも我はなし都に行きて恋ひまく思へば 7・1217
我が舟の梶はな引きそ大和より恋ひ来し心いまだ飽かなくに 7・1221
静けくも岸には波は寄せけるかこれの屋通し聞きつつ居れば 7・1237
大き海の磯本揺すり立つ波の寄せむと思へる浜の清けく 7・1239
大穴道少御神の作らしし妹背の山を見らくし良しも 7・1247
はしたての倉橋川の川のしづ菅我が刈りて笠も編まなく川のしづ菅 7・1248
黙あらじと言のなぐさに言ふことを聞き知れらくは辛くはありけり 7・1258
梯立の倉椅山に立てる白雲見まく欲り我がするなへに立てる白雲 7・1282
紅に衣染めまく欲しけども着てにほはばか人の知るべき 7・1297
海神の持てる白玉見まく欲り千度そ告りし潜きする海人は 7・1302
潜きする海人は告れども海神の心し得ねば見ゆといはなくに 7・1303
底清み沈ける玉を見まく欲り千度そ告りし潜きする海人は 7・1318
水底に沈く白玉誰が故に心尽くして我が思はなくに 7・1320
世間は常かくのみか結びてし白玉の緒の絶ゆらく思へば 7・1321
岩畳恐き山と知りつつも我は恋ふるか並ならなくに 7・1331
ま玉つく越の菅原我刈らず人の刈らまく惜しき菅原 7・1341
かくしてやなほや老いなむみ雪降る大荒木野の篠にあらなくに 7・1349
見まく欲り恋ひつつ待ちし秋萩は花のみ咲きて成らずかもあらむ 7・1364
朝霜の消易き命誰がために千歳もがもと我が思はなくに 7・1375
絶えず行く飛鳥の川の淀めらば故しもあるごと人の見まくに 7・1379
飛鳥川瀬々に玉藻は生ひたれどしがらみあればなびきあへなくに 7・1380
真鉋持ち弓削の川原の埋れ木の顕はるましじことにあらなくに 7・1385
磯の浦に来寄る白波反りつつ過ぎかてなくは誰にたゆたへ 7・1389
朝なぎに来寄る白波見まく欲り我はすれども風こそ寄せね 7・1391
潮満てば入りぬる磯の草なれや見らく少なく恋ふらくの多き 7・1394
潮満てば入りぬる磯の草なれや見らく少なく恋ふらくの多き 7・1394
世間はまこと二代は行かざらし過ぎにし妹に逢はなく思へば 7・1410
我が背子をいづち行かめとさき竹のそがひに寝しく今し悔しも 7・1412
薦枕相まきし児もあらばこそ夜のふくらくも我が惜しみせめ 7・1414

春山の咲きのををりに春菜摘む妹が白紐見らくし良しも 8・1421
霞立つ春日の里の梅の花花に問はむと我が思はなくに 8・1438
茅花抜く浅茅が原のつぼすみれ今盛りなり我が恋ふらくは 8・1449
五月の花橘を君がため玉にこそ貫け散らまく惜しみ 8・1502
秋山にもみつ木の葉のうつりなば更にや秋を見まく欲りせむ 8・1516
うまさけ三輪の祝が山照らす秋の黄葉の散らまく惜しも 8・1517
思ふそら安けなくに嘆くそら安けなくに青波に望みは絶えぬ白雲に 8・1520
安けなくに嘆くそら安けなくに青波に望みは絶えぬ白雲に 8・1520
秋の日の穂田を雁がね暗けくに夜のほどろにも鳴き渡るかも 8・1539
この岡に雄鹿踏み起こしうかねらひかもかもすらく君故にこそ 8・1576
秋の野の尾花が末を押しなべて来しくも著く逢へる君かも 8・1577
めづらしき人に見せむともみち葉を手折りそ我が来し雨の降らくに 8・1582
もみち葉を散らまく惜しみ手折り来て今夜かざしつ何をか思はむ 8・1586
もみち葉の過ぎまく惜しみ思ふどち遊ぶ今夜は明けずもあらぬか 8・1591
しぐれの雨間なくな降りそ紅ににほへる山の散らまく惜しも 8・1594
めづらしき君が家なるはだすすき穂に出づる秋の過ぐらく惜しも 8・1601
秋されば春日の山の黄葉見る奈良の都の荒るらく惜しも 8・1604
宇陀の野の秋萩しのぎ鳴く鹿も妻に恋ふらく我にはまさじ 8・1609
大口の真神の原に降る雪はいたくな降りそ家もあらなくに 8・1636
天霧らし雪も降らぬかいちしろくこのいつ柴に降らまくを見む 8・1643
高山の菅の葉しのぎ降る雪の消ぬとか言はも恋の繁けく 8・1655
梅の花散らすあらしの音のみに聞きし我妹を見らくし良しも 8・1660
旅なれば夜中にわきて照る月の高島山に隠らく惜しも 9・1691
玉くしげ明けまく惜しきあたら夜を衣手離れて一人かも寝む 9・1693
家人の使ひにあらし春雨の避くれど我を濡らさく思へば 9・1697
天の原雲なき夕にぬばたまの夜渡る月の入らまく惜しも 9・1712
苦しくも暮れ行く日かも吉野川清き川原を見れど飽かなくに 9・1721
吉野川川波高み瀧の浦を見ずかなりなむ恋しけまくに 9・1722
見まく欲り来しくも著く吉野川音のさやけさ見るにともしく 9・1724
見まく欲り来しくも著く吉野川音のさやけさ見るにともしく 9・1724
行く道は行かずて呼ばなくに門に至りぬさし並ぶ隣の君はあらかじめ 9・1738
己妻離れて乞はなくに鍵さへ奉る人皆のかく迷へればうちしなひ寄りてそ妹は 9・1738
我妹子に告りて語らくしましくは家に帰りて父母に事も語らひ明日のごと 9・1740
言ひければ妹が言へらく常世辺にまた帰り来て今のごと逢はむと 9・1740
怪しみとそこに思はく家ゆ出でて三年の間に垣もなく家失せめやとこの箱を 9・1740
寝らむ問はまくの欲しき我妹が家の知らなく 9・1742
夫かあるらむ橿の実の一人か寝らむ問はまくの欲しき我妹が家の知らなく 9・1742

衣手常陸の国の二並ぶ筑波の山を見まく欲り君来ませりと暑けくに 9・1753
君来ませりと暑けくに汗かきなけ木の根取りうそぶき登り峰の上を 9・1753
筑波嶺の良けくを見れば長き日に思ひ積み来し憂へは止みぬ 9・1757
朝月夜明けまく惜しみあしひきの山彦とよめ呼び立て鳴くも 9・1761
かくのみし恋ひし渡ればたまきはる命も我は惜しけくもなし 9・1769
布留山ゆ直に見渡す都にそ眠も寝ず恋ふる遠からなくに 9・1788
我妹子が母に語らく倭文手@067135 賤しき我が故ますらをの争ふ見れば 9・1809
うつたへに鳥ははまねど縄延へて守らまく欲しき梅の花かも 10・1858
春雨はいたくな降りそ桜花いまだ見なくに散らまく惜しも 10・1870
春雨はいたくな降りそ桜花いまだ見なくに散らまく惜しも 10・1870
春されば散らまく惜しき梅の花しましは咲かず含みてもがも 10・1871
我が背子に我が恋ふらくは奥山のあしびの花の今盛りなり 10・1903
かくしあらばなにか植ゑけむ山吹の止む時もなく恋ふらく思へば 10・1907
見渡せば春日の野辺に立つ霞見まくの欲しき君が姿か 10・1913
今更に君はい行かじ春雨の心を人の知らざらなくに 10・1916
春雨の止まず降る降る我が恋ふる人の目すらを相見せなくに 10・1932
相思はずあらむ子ゆゑ玉の緒の長き春日を思ひ暮さく 10・1936
朝霧の八重山越えて呼子鳥鳴きや汝が来るやどもあらなくに 10・1941
月夜良み鳴くほととぎす見まく欲り我草取れり見む人もがも 10・1943
藤波の散らまく惜しみほととぎす今城の岡を鳴きて越ゆなり 10・1944
卯の花の散らまく惜しみほととぎす野に出で山に入り来鳴きとよもす 10・1957
かくばかり雨の降らくにほととぎす卯の花山になほか鳴くらむ 10・1963
見渡せば向かひの野辺のなでしこが散らまく惜しも雨な降りそね 10・1970
このころの恋の繁けく夏草の刈り払へども生ひしくごとし 10・1984
夏草の露別け衣着けなくに我が衣手の乾る時もなき 10・1994
相見らく飽き足らねどもいなのめの明けさりにけり舟出せむ妻 10・2022
万代に携はり居て相見とも思ひ過ぐべき恋にあらなくに 10・2024
逢はなくは日長きものを天の川隔ててまたや我が恋ひ居らむ 10・2038
恋しけく日長きものを逢ふべかる夕だに君が来まさざるらむ 10・2039
月日選り逢ひてしあれば別れまく惜しかる君は明日さへもがも 10・2066
天の川なづさひ渡り君が手もいまだまかねば夜のふけぬらく 10・2071
ま日長く川に向き立ちありし袖今夜まかむと思はくの良さ 10・2073
天の川渡り瀬ごとに思ひつつ来しくも著し逢へらく思へば 10・2074
天の川渡り瀬ごとに思ひつつ来しくも著し逢へらく思へば 10・2074
渡り守舟はや渡せ一年に二度通ふ君にあらなくに 10・2077
玉かづら絶えぬものからさ寝らくは年の渡りにただ一夜のみ 10・2078
天の川去年の渡り瀬荒れにけり君が来まさむ道の知らなく 10・2084

彦星の妻呼ぶ舟の引き綱の絶えむと君を我が思はなくに 10・2086
さ雄鹿の心相思ふ秋萩のしぐれの降るに散らくし惜しも 10・2094
奥山に住むといふ鹿の夕去らず妻問ふ萩の散らまく惜しも 10・2098
白露の置かまく惜しみ秋萩を折りのみ折りて置きや枯らさむ 10・2099
秋風はとくとく吹き来萩の花散らまく惜しみ競ひ立たむ見む 10・2108
手寸十名相植ゑしく著く出で見ればやどの初萩咲きにけるかも 10・2113
手に取れば袖さへにほふをみなへしこの白露に散らまく惜しも 10・2115
朝霧のたなびく小野の萩の花今か散るらむいまだ飽かなくに 10・2118
秋風は日に異に吹きぬ高円の野辺の秋萩散らまく惜しも 10・2121
見まく欲り我が待ち恋ひし秋萩は枝もしみみに花咲きにけり 10・2124
おしてる難波堀江の葦辺には雁寝たるかも霜の降らくに 10・2135
秋萩の咲きたる野辺のさ雄鹿は散らまく惜しみ鳴き行くものを 10・2155
我がやどの尾花押しなべ置く露に手触れ我妹子落ちまくも見む 10・2172
妻隠る矢野の神山露霜ににほひそめたり散らまく惜しも 10・2178
秋山をゆめ人かくな忘れにしそのもみち葉の思ほゆらくに 10・2184
妹が袖巻来の山の朝露ににほふ黄葉の散らまく惜しも 10・2187
いちしろくしぐれの雨は降らなくに大城の山は色付きにけり 10・2197
風吹けば黄葉散りつつすくなくも吾の松原清からなくに 10・2198
九月の白露負ひてあしひきの山のもみたむ見まくしも良し 10・2200
さ夜ふけてしぐれな降りそ秋萩の本葉の黄葉散らまく惜しも 10・2215
夕去らずかはづ鳴くなる三輪川の清き瀬の音を聞かくし良しも 10・2222
萩の花咲きのををりを見よとかも月夜の清き恋増さらくに 10・2228
春霞たなびく田居に廬つきて秋田刈るまで思はしむらく 10・2250
さ雄鹿の小野の草伏しいちしろく我が問はなくに人の知れらく 10・2268
さ雄鹿の小野の草伏しいちしろく我が問はなくに人の知れらく 10・2268
もみち葉に置く白露の色葉にも出でじと思へば言の繁けく 10・2307
鳴きつつもとな起き居つつ君に恋ふるに寝ねかてなくに 10・2310
沫雪は今日はな降りそ白たへの袖まき干さむ人もあらなくに 10・2321
来て見べき人もあらなくに我家なる梅の初花散りぬともよし 10・2328
一目見し人に恋ふらく天霧らし降り来る雪の消ぬべく思ほゆ 10・2340
我が思ふ妹ははやも死なぬか生けりとも我に寄るべしと人の言はなくに 11・2355
何せむに命をもとな長く欲りせむ生けれども我が思ふ妹にやすく逢はなくに 11・2358
たらちねの母が手離れかくばかりすべなきことはいまだせなくに 11・2368
君が目の見まく欲しけくこの二夜千年のごとも我は恋ふるかも 11・2381
君が目の見まく欲しけくこの二夜千年のごとも我は恋ふるかも 11・2381
あらたまの五年経れど我が恋ふる跡なき恋の止まなくも怪し 11・2385
しましくも見ねば恋しき我妹子を日に日に来れば言の繁けく 11・2397

あからひく肌も触れずて寝たれども心を異には我が思はなくに 11・2399
垣ほなす人は言へども高麗錦紐解き開けし君ならなくに 11・2405
我妹子に恋ひすべながり夢に見むと我は思へど寝ねらえなくに 11・2412
近江の沖つ島山奥まけて我が思ふ妹が言の繁けく 11・2439
隠りどの沢泉なる岩根をも通してそ思ふ我が恋ふらくは 11・2443
三日月のさやにも見えず雲隠り見まくそ欲しきうたてこのころ 11・2464
山背の泉の小菅なみなみに妹が心を我が思はなくに 11・2471
秋柏潤和川辺の篠の目の人には忍び君に堪へなくに 11・2478
大野らにたどきも知らず標結ひてありかつましじ我が恋ふらくは 11・2481
我妹子に恋ひし渡れば剣大刀名の惜しけくも思ひかねつも 11・2499
こもりくの豊泊瀬道は常滑の恐き道そ恋ふらくはゆめ 11・2511
刈り薦の一重を敷きてさ寝れども君とし寝れば寒けくもなし 11・2520
さにつらふ色には出でずすくなくも心の中に我が思はなくに 11・2523
若草の新手枕を巻きそめて夜をや隔てむ憎くあらなくに 11・2542
心には千重にしくしく思へども使ひを遣らむすべの知らなく 11・2552
相見ては面隠さるるものからに継ぎて見まくの欲しき君かも 11・2554
うるはしと思へりけらしな忘れと結びし紐の解くらく思へば 11・2558
昨日見て今日こそ隔て我妹子がここだく継ぎて見まく欲しきも 11・2559
里人の言寄せ妻を荒垣のよそにや我が見む憎くあらなくに 11・2562
今だにも目な乏しめそ相見ずて恋ひむ年月久しけまくに 11・2577
言に言へば耳にたやすしすくなくも心の中に我が思はなくに 11・2581
相見て幾久さにもあらなくに年月のごと思ほゆるかも 11・2583
かくしつつ我が待つ験あらぬかも世の人皆の常ならなくに 11・2585
恋ひ死なむ後は何せむ我が命生ける日にこそ見まく欲りすれ 11・2592
いかにして忘るるものそ我妹子に恋は増されど忘らえなくに 11・2597
白たへの袖に触れてよ我が背子に我が恋ふらくは止む時もなし 11・2612
逢はなくに夕占を問ふと幣に置くに我が衣手はまたそ継ぐべき 11・2625
時守が打ち鳴す鼓数みみれば時にはなりぬ逢はなくも怪し 11・2641
あしひきの山田守る翁置く蚊火の下焦がれのみ我が恋ひ居らく 11・2649
妹が髪上げ竹葉野の放れ駒荒びにけらし逢はなく思へば 11・2652
争へば神も憎ますよしゑやしよそふる君が憎くあらなくに 11・2659
霊ぢはふ神も我をば打棄てこそしゑや命の惜しけくもなし 11・2661
ちはやぶる神の斎垣も越えぬべし今は我が名の惜しけくもなし 11・2663
妹が目の見まく欲しけく夕闇の木の葉隠れる月待つごとし 11・2666
妹が目の見まく欲しけく夕闇の木の葉隠れる月待つごとし 11・2666
我が背子が使ひを待つと笠も着ず出でつつそ見し雨の降らくに 11・2681
韓衣君に打ち着せ見まく欲り恋ひそ暮らしし雨の降る日を 11・2682

我妹子に我が恋ふらくは水ならばしがらみ越して行くべく思ほゆ 11・2709
越して行くべく思ほゆ〈或本の歌の発句に云ふ「相思はぬ人を思はく」〉 11・2709
白砂三津の赤土の色に出でて言はなくのみそ我が恋ふらくは 11・2725
白砂三津の赤土の色に出でて言はなくのみそ我が恋ふらくは 11・2725
酢蛾島の夏実の浦に寄する波間も置きて我が思はなくに 11・2727
近江の沖つ島山奥まへて我が思ふ妹が言の繁けく 11・2728
あられ降り遠つ大浦に寄する波よしも寄すとも憎くあらなくに 11・2729
大伴の三津の白波間なく我が恋ふらくを人の知らなく 11・2737
大伴の三津の白波間なく我が恋ふらくを人の知らなく 11・2737
みさご居る沖つ荒磯に寄する波行くへも知らず我が恋ふらくは 11・2739
大き海に立つらむ波は間あらむ君に恋ふらく止む時もなし 11・2741
我が背子に我が恋ふらくは夏草の刈り除くれども生ひしくごとし 11・2769
神奈備の浅篠原のうるはしみ我が思ふ君が声の著けく 11・2774
玉の緒の絶えたる恋の乱れなば死なまくのみそまたも逢はずして 11・2789
玉の緒の間も置かず見まく欲り我が思ふ妹は家遠くありて 11・2793
隠りづの沢たつみなる岩根ゆも通りて思ふ君に逢はまくは 11・2794
大き海の荒磯の渚鳥朝な朝な見まく欲しきを見えぬ君かも 11・2801
我妹子に恋ふれにかあらむ沖に住む鴨の浮き寝の安けくもなき 11・2806
明けぬべく千鳥しば鳴く白たへの君が手枕いまだ飽かなくに 11・2807
音のみを聞きてや恋ひむまそ鏡直目に逢ひて恋ひまくもいたく 11・2810
うらぶれて物な思ひそね天雲のたゆたふ心我が思はなくに 11・2816
おしてる難波菅笠置き古し後は誰が着む笠ならなくに 11・2819
紅の深染めの衣を下に着ば人の見らくににほひ出でむかも 11・2828
ま葛延ふ小野の浅茅を心ゆも人引かめやも我がなけなくに 11・2835
み吉野の水隈が菅を編まなくに刈りのみ刈りて乱りてむとや 11・2837
かくしてやなほやなりなむ大荒木の浮田の社の標にあらなくに 11・2839
このころの眠の寝らえぬはしきたへの手枕まきて寝まく欲りこそ 12・2844
なにしか人の言の繁けむ〈或本の歌に曰く「現にはうべも逢はなく夢にさへ」〉 12・2848
ぬばたまのその夢にしも見継げりや袖乾る日なく我が恋ふらくを 12・2849
現には直にも逢はず夢にだに逢ふと見えこそ我が恋ふらくに 12・2850
浅葉野に立ち神さぶる菅の根のねもころ誰が故我が恋ひなくに 12・2863
玉くしろまき寝る妹もあらばこそ夜の長けくも嬉しかるべき 12・2865
今は我は死なむよ我妹逢はずして思ひ渡れば安けくもなし 12・2869
逢はなくも憂しと思へばいや増しに人言繁く聞こえ来るかも 12・2872
里近く家や居るべきこの我が目の人目をしつつ恋の繁けく 12・2876
み空行く名の惜しけくも我はなし逢はぬ日まねく年の経ぬれば 12・2879
人言はまこと言痛くなりぬともそこに障らむ我にあらなくに 12・2886

いでなぞ我がここだく恋ふる我妹子が逢はじと言へることもあらなくに 12・2889
人目多み目こそ忍ぶれすくなくも心の中に我が思はなくに 12・2911
妹と言はば無礼し恐ししかすがにかけまく欲しき言にあるかも 12・2915
夕さらば君に逢はむと思へこそ日の暮るらくも嬉しかりけれ 12・2922
あぢさはふ目は飽かざらね携はり言問はなくも苦しかりけり 12・2934
今は我は死なむよ我が背恋すれば一夜一日も安けくもなし 12・2936
我が背子に恋ふとにしあらしみどり子の夜泣きをしつつ寝ねかてなくは 12・2942
我が命の長く欲しけく偽りをよくする人を捕ふばかりを 12・2943
椿市の八十の衢に立ち平し結びし紐を解かまく惜しも 12・2951
剣大刀名の惜しけくも我はなしこのころの間の恋の繁きに 12・2984
玉だすきかけねば苦しかけたれば継ぎて見まくの欲しき君かも 12・2992
妹が目を見まくほり江のさざれ波しきて恋ひつつありと告げこそ 12・3024
石走る垂水の水のはしきやし君に恋ふらく我が心から 12・3025
朝日さす春日の小野に置く露の消ぬべき我が身惜しけくもなし 12・3042
楽浪の波越す安@037782 に降る小雨間も置きて我が思はなくに 12・3046
うちひさす宮にはあれど月草のうつろふ心我が思はなくに 12・3058
丹波道の大江の山のさなかづら絶えむの心我が思はなくに 12・3071
後も必ず逢はむとそ思ふ〈或本の歌に曰く「絶えむと妹を我が思はなくに」〉 12・3073
住吉の敷津の浦のなのりその名は告りてしを逢はなくも怪し 12・3076
波のむたなびく玉藻の片思ひに我が思ふ人の言の繁けく 12・3078
君に逢はず久しくなりぬ玉の緒の長き命の惜しけくもなし 12・3082
ま菅よし宗我の川原に鳴く千鳥間なし我が背子我が恋ふらくは 12・3087
恋衣着奈良の山に鳴く鳥の間なく時なし我が恋ふらくは 12・3088
逢はなくは然もありなむ玉梓の使ひをだにも待ちやかねてむ 12・3103
相見まく欲しきがためは君よりも我そまさりていふかしみする 12・3106
我が故にいたくなわびそ後つひに逢はじと言ひしこともあらなくに 12・3116
我が背子が使ひを待つと笠も着ず出でつつそ見し雨の降らくに 12・3121
里離り遠からなくに草枕旅とし思へばなほ恋ひにけり 12・3134
鈴鹿川八十瀬渡りて誰が故か夜越えに越えむ妻もあらなくに 12・3156
我妹子をよそのみや見む越の海の子難の海の島ならなくに 12・3166
衣手の真若の浦の砂地間なく時なし我が恋ふらくは 12・3168
若の浦に袖さへ濡れて忘れ貝拾へど妹は忘らえなくに 12・3175
あしひきの山は百重に隠すとも妹は忘れじ直に逢ふまでに 12・3189
よしゑやし恋ひじとすれど木綿間山越えにし君が思ほゆらくに 12・3191
春日野の浅茅が原に後れ居て時そともなし我が恋ふらくは 12・3196
み吉野の瀧もとどろに落つる白波留まりにし妹に見せまく欲しき白波 13・3233
ここをしもまぐはしみかもかけまくもあやに恐き山の辺の五十師の 13・3234

汝が母を取らくを知らに汝が父を取らくを知らにいそばひ居る 13・3239
取らくを知らに汝が父を取らくを知らにいそばひ居るよいかるがとひめと 13・3239
阿胡の海の荒磯の上のさざれ波我が恋ふらくは止む時もなし 13・3244
天なるや月日のごとく我が思へる君が日に異に老ゆらく惜しも 13・3246
得し玉かも拾ひて得し玉かも可惜しき君が老ゆらく惜しも 13・3247
大舟の思ひ頼める君故に尽くす心は惜しけくもなし 13・3251
古ゆ言ひ継ぎけらく恋すれば苦しきものと玉の緒の継ぎては言へど娘子らが 13・3255
飲む人の時じきがごと我妹子に我が恋ふらくは止む時もなし 13・3260
心は寄りて朝露の消なば消ぬべく恋ひしくも著くも逢へる隠り妻かも 13・3266
聞きてし日より立てらくのたづきも知らに居らくの奥かも知らににきびにし 13・3272
その里人の標結ふと聞きてし日より立てらくのたづきも知らに居らくの奥かも 13・3272
我は立ちて思ふ空安けなくに嘆く空安けなくにさ丹塗りの小舟もがも玉巻きの 13・3299
嘆く空安けなくにさ丹塗りの小舟もがも玉巻きの小梶もがも漕ぎ渡りつつも 13・3299
弓腹振り起こししのぎ羽を二つ手挾み放ちけむ人し悔しも恋ふらく思へば 13・3302
里人の我に告ぐらく汝が恋ふる愛し妻はもみち葉の散りまがひたる神奈備の 13・3303
夕占の我に告らく我妹子や汝が待つ君は沖つ波来寄る白玉辺つ波の 13・3318
杖つきもつかずも我は行かめども君が来まさむ道の知らなく 13・3319
遠智の小菅編まなくにい刈り持ち来敷かなくにい刈り持ち来て 13・3323
い刈り持ち来敷かなくにい刈り持ち来て置きて我を偲はす息長の遠智の小菅 13・3323
かけまくもあやに恐し藤原の都しみみに人はしも満ちてあれども 13・3324
偲ひ渡れと万代に語り継がへと始めてしこの九月の過ぎまくをいたもすべなみあらたまの
月の変はらばせむすべのたどきを知らに 13・3329
くはし妹に鮎を惜しみ投ぐるさの遠ざかり居て思ふそら安けなくに嘆く空安けなくに衣こ
そばそれ破れぬれば継ぎつつも 13・3330
思ふそら安けなくに嘆く空安けなくに衣こそばそれ破れぬれば継ぎつつも 13・3330
宜しき山の出で立ちのくはしき山ぞあたらしき山の荒れまく惜しも 13・3331
さ寝らくは玉の緒ばかり恋ふらくは富士の高嶺の鳴沢のごと 14・3358
さ寝らくは玉の緒ばかり恋ふらくは富士の高嶺の鳴沢のごと 14・3358
或本の歌に曰く「まかなしみ寝らくしけらくさ鳴らくは 14・3358
或本の歌に曰く「まかなしみ寝らくしけらくさ鳴らくは 14・3358
或本の歌に曰く「まかなしみ寝らくしけらくさ鳴らくは 14・3358
一本の歌に曰く「逢へらくは玉の緒しけや恋ふらくは 14・3358
一本の歌に曰く「逢へらくは玉の緒しけや恋ふらくは 14・3358
足柄の箱根の山に粟蒔きて実とはなれるをあはなくも怪し 14・3364
足柄の刀比の河内に出づる湯のよにもたよらに児ろが言はなくに 14・3368
筑波嶺にそがひに見ゆる葦穂山悪しかるとがもさね見えなくに 14・3391
筑波嶺の岩もとどろに落つる水よにもたゆらに我が思はなくに 14・3392

小筑波の繁き木の間よ立つ鳥の目ゆか汝を見むさ寝ざらなくに 14・3396
あぜと言へかさ寝に逢はなくにま日暮れて夕なは来なに明けぬしだ来る 14・3461
韓衣裾のうちかへ逢はねども異しき心を我が思はなくに 14・3482
剣大刀身に添ふ妹をとりみがね音をそ泣きつる手児にあらなくに 14・3485
梓弓欲良の山辺のしげかくに妹ろを立ててさ寝処払ふも 14・3489
紫草は根をかも終ふる人の児のうらがなしけを寝を終へなくに 14・3500
谷狭み峰に延ひたる玉かづら絶えむの心我が思はなくに 14・3507
さ雄鹿の伏すや草むら見えずとも児ろが金門よ行かくし良しも 14・3530
人の児のかなしけしだは浜渚鳥足悩む駒の惜しけくもなし 14・3533
室草の都留の堤のなりぬがに児ろは言へどもいまだ寝なくに 14・3543
味鎌の可家の湊に入る潮のこてたずくもか入りて寝まくも 14・3553
妹が寝る床のあたりに岩ぐくる水にもがもよ入りて寝まくも 14・3554
ま金吹く丹生のま朱の色に出て言はなくのみそ我が恋ふらくは 14・3560
ま金吹く丹生のま朱の色に出て言はなくのみそ我が恋ふらくは 14・3560
かなし妹をいづち行かめと山菅のそがひに寝しく今し悔しも 14・3577
はろはろに思ほゆるかも然れども異しき心を我が思はなくに 15・3588
海原に浮き寝せむ夜は沖つ風いたくな吹きそ妹もあらなくに 15・3592
君を思ひ我が恋ひまくはあらたまの立つ月ごとに避くる日もあらじ 15・3683
わたつみの恐き道を安けくもなく悩み来て今だにも喪なく 15・3694
秋山の黄葉をかざし我が居れば浦潮満ち来いまだ飽かなくに 15・3707
ぬばたまの妹が乾すべくあらなくに我が衣手を濡れていかにせむ 15・3712
家島は名にこそありけれ海原を我が恋ひ来つる妹もあらなくに 15・3718
草枕旅に久しくあらめやと妹に言ひしを年の経ぬらく 15・3719
あしひきの山路越えむとする君を心に持ちて安けくもなし 15・3723
思はずもまことあり得むやさ寝る夜の夢にも妹が見えざらなくに 15・3735
旅と言へば言にそ易きすくなくも妹に恋ひつつすべなけなくに 15・3743
我妹子に恋ふるに我はたまきはる短き命も惜しけくもなし 15・3744
他国に君をいませて何時までか我が恋ひ居らむ時の知らなく 15・3749
うるはしと我が思ふ妹を山川を中に隔りて安けくもなし 15・3755
あらたまの年の緒長く逢はざれど異しき心を我が思はなくに 15・3775
今日もかも都なりせば見まく欲り西の御厩の外に立てらまし 15・3776
安積香山影さへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はなくに 16・3807
寺々の女餓鬼申さく大神の男餓鬼賜りてその子孕まむ 16・3840
荒城田の鹿猪田の稲を倉に上げてあなひねひねし我が恋ふらくは 16・3848
心をし無何有の郷に置きてあらば藐孤射の山を見まく近けむ 16・3851
大君の遣はさなくに賢しらに行きし荒雄ら沖に袖振る 16・3860
さ雄鹿の来立ち嘆かくたちまちに我は死ぬべし大君に我は仕へむ我が角は 16・3885

磯ごとに海人の釣舟泊てにけり我が舟泊てむ磯の知らなく 17・3892
あをによし奈良の都は古りぬれどもとほととぎす鳴かずあらなくに 17・3919
草枕旅去にし君が帰り来む月日を知らむすべの知らなく 17・3937
松の花花数にしも我が背子が思へらなくにもとな咲きつつ 17・3942
ほととぎす鳴きて過ぎにし岡辺から秋風吹きぬよしもあらなくに 17・3946
天ざかる鄙に月経ぬ然れども結ひてし紐を解きも開けなくに 17・3948
隔りてあれば恋しけく日長きものを見まく欲り思ふ間に玉梓の使ひの来れば 17・3957
日長きものを見まく欲り思ふ間に玉梓の使ひの来れば嬉しみと我が待ち問ふに 17・3957
庭に降る雪は千重敷く然のみに思ひて君を我が待たなくに 17・3960
痛けくし日に異に増さるたらちねの母の命の大舟のゆくらゆくらに 17・3962
痛けくの日に異に増せば悲しけくここに思ひ出いらなけくそこに思ひ出 17・3969
痛けくの日に異に増せば悲しけくここに思ひ出いらなけくそこに思ひ出 17・3969
悲しけくここに思ひ出いらなけくそこに思ひ出嘆くそら安けなくに 17・3969
嘆くそら安けなくに思ふそら苦しきものをあしひきの山きへなりて玉梓の 17・3969
里人の我に告ぐらく山辺には桜花散りかほ鳥の間なくしば鳴く春の野に 17・3973
恋しけく千重に積もりぬ近くあらば帰りにだにもうち行きて妹が手枕 17・3978
恋しけく日の長けむそそこ思へば心し痛しほととぎす声にあへ貫く 17・4006
安くあらねば嘆かくを留めもかねて見渡せば卯の花山のほととぎす 17・4008
我が乞ひ祈まくはしけやし君がただかをま幸くもありたもとほり月立たば 17・4008
照る鏡倭文に取り添へ乞ひ祈みて我が待つ時に娘子らが夢に告ぐらく汝が恋ふるその秀つ
鷹は松田江の浜行き暮らしつなし捕る 17・4011
乎敷の崎漕ぎたもとほりひねもすに見とも飽くべき浦にあらなくに 18・4037
ほととぎすいとねたけくは橘の花散る時に来鳴きとよむる 18・4092
貴み嬉しけくいよよ思ひて大伴の遠つ神祖のその名をば大来目主と 18・4094
大汝少彦名の神代より言ひ継ぎけらく父母を見れば貴く妻子見れば 18・4106
うち嘆き語りけまくはとこしへにかくしもあらめや天地の神言寄せて春花の 18・4106
かけまくもあやに恐し皇神祖の神の大御代に田道間守常世に渡り 18・4111
見まく欲り思ひしなへに縵蘿かぐはし君を相見つるかも 18・4120
あしひきの山の木末のほよ取りてかざしつらくは千歳寿くとそ 18・4136
矢形尾の真白の鷹をやどに据ゑ掻き撫で見つつ飼はくし良しも 19・4155
言問はぬ木すら春咲き秋付けば黄葉散らくは常をなみこそ 19・4161
時ごとにいやめづらしく咲く花を折りも折らずも見らくし良しも 19・4167
年のはに来鳴くもの故ほととぎす聞けばしのはく逢はぬ日を多み 19・4168
嘆くそら安けなくに思ふそら苦しきものを奈呉の海人の潜き取るといふ白玉の 19・4169
我がここだ偲はく知らにほととぎすいづへの山を鳴きか越ゆらむ 19・4195
植ゑ木橘花に散る時をまだしみ来鳴かなくそこは恨みず然れども谷片付きて 19・4207
そこは恨みず然れども谷片付きて家居せる君が聞きつつ告げなくも憂し 19・4207

鳴く声を聞かまく欲りと朝には門に出で立ち夕には谷を見渡し恋ふれども 19・4209
伝言に我に語らくはしきよし君はこのころうらさびて嘆かひいます世間の 19・4214
世間の憂けく辛けく咲く花も時にうつろふうつせみも常なくありけり 19・4214
世間の憂けく辛けく咲く花も時にうつろふうつせみも常なくありけり 19・4214
あしひきの山の黄葉にしづくあひて散らむ山路を君が越えまく 19・4225
我が背の君をかけまくのゆゆし恐き住吉の我が大御神船の舳に領きいまし 19・4245
しなざかる越に五年住み住みて立ち別れまく惜しき夕かも 19・4250
言繁み相問はなくに梅の花雪にしをれてうつろはむかも 19・4282
山吹の花の盛りにかくのごと君を見まくは千年にもがも 20・4304
秋と言へば心そ痛きうたて異に花になそへて見まく欲りかも 20・4307
よそにのみ見てや渡らも難波潟雲居に見ゆる島ならなくに 20・4355
言ひつつかけまくもあやに恐し神ながらわご大君のうちなびく春の初めは 20・4360
母刀自も玉にもがもや頂きてみづらの中にあへ巻かまくも 20・4377
潮舟の舳越そ白波俄しくも負ふせたまほか思はへなくに 20・4389
我が家ろに行かも人もが草枕旅は苦しと告げ遣らまくも 20・4406
ひな曇り碓氷の坂を越えしだに妹が恋ひしく忘らえぬかも 20・4407
上ゆ涙垂り嘆きのたばく鹿子じものただ一人して朝戸出の悲しき我が子 20・4408
枕大刀腰に取り佩きまかなしき背ろがまき来む月の知らなく 20・4413
家の妹ろ我を偲ふらし真結ひに結ひし紐の解くらく思へば 20・4427
賂しつつ君が生ほせるなでしこが花のみ問はむ君ならなくに 20・4447
なでしこが花取り持ちてうつらうつら見まくの欲しき君にもあるかも 20・4449
うちひさす都の人に告げまくは見し日のごとくありと告げこそ 20・4473
佐保川に凍り渡れる薄ら氷の薄き心を我が思はなくに 20・4478
磯影の見ゆる池水照るまでに咲けるあしびの散らまく惜しも 20・4513
一本薄項傾し汝が泣かさまく朝雨の霧に立たむぞ若草の妻の命　記・5
前妻が肴乞はさばたちそばの実の無けくをこきしひゑね後妻が　記・10
後妻が肴乞はさばいちさかき実の多けくをこきだひゑねええ　記・10
御真木入日子はや御真木入日子はや己が緒を竊み殺せむと後つ戸よい行き違い前つ戸よい行き違い窺はく知らにと御真木入日子はや　記・23
刺しける知らに蓴繰り延へけく知らに我が心しぞいや愚にして今ぞ悔しき　記・45
道の後古波陀嬢子は争はず寝しくをもしぞも愛しみ思ふ　記・47
本方は君を思ひ出末方は妹を思ひ出苛なけくそこに思ひ出かなしけく　記・52
本方は君を思ひ出末方は妹を思ひ出苛なけくそこに思ひ出かなしけく　記・52
鯨障り前妻が肴乞はさばたちそばの實の無けくをこきしひゑね後妻が　紀・7
後妻が肴乞はさばいちさかき實の多けくをこきだひゑね　紀・7
御間城入彦はや己が緒を殺せむと竊まく知らに姫遊すも　紀・18
姫遊すも（一に云ふ。大き戸より窺ひて殺さむとすらくを知らに姫遊すも）　紀・18

水溜る依羅の池の蓴繰り延へけく知らに堰杙築く川俣江の　紀・36
堰杙築く川俣江の菱殻のさしけく知らに吾が心しいや愚にして　紀・36
道の後古波儴嬢子を争はず寝しくをしぞ愛しみと思ふ　紀・38
妹を思ひ出苛なけくそこに思ひかなしけくここに思ひい伐らずそ来る梓弓檀　紀・43
そこに思ひかなしけくここに思ひい伐らずそ来る梓弓檀　紀・43
山邊の小嶋子ゆゑに人てらふ馬の八匹は惜しけくもなし　紀・79
大君の御帯の倭文服結び垂れ誰やし人も相思はなくに　紀・93
射ゆ鹿猪を認ぐ川傍の若草の稚くありきと吾が思はなくに　紀・117

使用テキスト

井手至毛利正守（2008）『新校注萬葉集』和泉書院
『萬葉集電子総索引 CD - ROM 版』塙書房
山路平四郎（1973）『記紀歌謡評釈』三秀舎
中田祝夫（1980）地蔵十輪経（巻 5・7）元慶点正倉院本『古点本資料叢刊』2 勉誠社
内田泉之助（1989）『新釈漢文大系 61 玉第新詠（下）』明治書院

参考文献

青野順也（2007）「終助詞「な・ね」と希望表現」『国学院雑誌』108-10
安藤正次（1935）「『都良久』『去良久』などについての考」『古典と古語』
石垣謙二（1942）「作用性用言反発の法則」『国語と国文学』19-11
井島正博（2010）a「ノダ文の機能と構造」『日本語学論集』6
井島正博（2010）b「名詞述語文をつくる名詞節―形式名詞述語文の成立根拠を考える」『日本語学』29-11
井島正博（2011）「主節における非文末ノダ文の機能と構造」『日本語学論集』7
井島正博（2011）『中古語過去・完了表現の研究』ひつじ書房
井手至　（1964）「ク語法（加行延言）アクの説は悪説か―ク語法研究の展開―」『解釈と鑑賞』29-11
内田賢徳（1983）「「見る・見ゆ」と「思ふ・思ほゆ」－『万葉集』におけるその相関－」『萬葉』115
内田賢徳（2013）「萬葉集におけるラムの出発と展開―ラシとの交渉―」『萬葉』215
内田賢徳（2015）「「久語法」の本来」『萬葉語文研究』11 和泉書院
大野晋　（1945）「万葉集巻第十八の本文に就いて」『国語と国文学』22-3
大野晋　（1952）「古文を教える国語教師の対話―文法史の知識はどのやうに役立つか―」『国語学』8
大野晋　（1968）「日本人の思考と述語様式」『文学』36-2
岡倉由三郎（1900）「語尾のくについて」『言語学雑誌』1-1
岡田希雄（1941）「久語法の接続に就いて」『国語国文』11-9・10
春日政治（1942）『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』岩波書店
金水敏　（2006）『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房
窪田空穂（1944）『万葉集評釈』東京堂

小島憲之（1964）『上代日本文学と中国文学』塙書房
近藤泰弘（2000）『日本語文法記述の理論』ひつじ書房
佐伯梅友（1950）『奈良時代の国語』
佐伯梅友（1955）「動詞・形容詞」『万葉集大成 6 言語篇』
佐々木隆（1999）「ク語法をふくむ構文」『萬葉集と上代語』ひつじ書房
佐竹昭広（1964）「「見ゆ」の世界」『国語国文』中央図書出版社
佐竹昭広（2000）『萬葉集抜書』岩波書店（1980 年初刊）
信太知子（1981）「上代語における連体形準体法について―万葉集を中心にク語法との
信太知子（1993）「『万葉集』における連体形準体法とク語法―句構造の観点から」『日本語学論集小松英雄博士退官記念』三省堂
島田修三（1989）「〈見まく欲る〉の考察―呪詞から歌語へ」『淑徳国文』31
白藤礼幸（2007）「万葉における表現と形式―願望・疑問・希求・命令表現について」『上代文学』上代文学会 99
鈴木泰　（2012）『語形対照古典日本語の時間表現』笠間書院
田上稔　（2009）「万葉集の準体句-ク語法と準体法連体形と」『女子大国文』144 京都女子大学国文学会
土佐秀里（2016）「文武天皇「御製歌」存疑―文武朝の精神史一斑」『国学院雑誌』117－4
橋本四郎（1978）「ク語法とその周辺」『論集日本文学・日本語 1 上代』角川書店
蜂矢真郷（1983）「ケシ・カシイ・カイ」『同志社国語学論集』和泉書院
濱田敦　（1948）「上代に於ける願望表現について」『国語と国文学』25-2
濱田敦　（1948）「上代に於ける希求表現について」『国語国文』17-1
濱田敦　（1986）『国語史の諸問題』和泉書院
福田良輔（1954）「古代語法存疑（その 1）―エ列音の連体形―」『文学研究』48
松浦清美（2000）「形容詞におけるミ語尾の文法性―引用と評価」『萬葉』172
松浦清美（2001）「ミ語尾をとらない形容詞について」『萬葉』177
向井克年（2018）「ク語法が対象化する事態の様相―ク語法が「思フ」「見ル」の目的格になる場合―」『萬葉』226
森重敏　（1946）「加行延言の考察」『国語・国文』15-6・7
森重敏　（1957）「萬葉集の「見」」『萬葉』24
森重敏　（1967）『文体の論理』風間書房
八亀裕美（2009）「特集日本語の形容詞とその周辺―意味・機能から形容詞述語文をとらえるために―分析に必要な視点」『解釈と鑑賞』74-7
山口佳紀（1985）『古代日本語文法の成立の研究』有精堂関連など」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』
渡邊ゆかり（2008）『文補語標識「こと」「の」の意味的相違に関する研究』溪水社

あとがき

本論第１章は既発表論文「ク語法が対象化する事態の様相―ク語法が「思フ」「見ル」の目的格になる場合―」『萬葉』226（2018）の内容を微修正したものである。その他の各章は以下の口頭発表に基づく。

序章ク語法研究の課題と可能性
「上代語ク語法の仮想性」
平成 29 年度筑紫日本語研究会 2017 年 8 月於九重

第２章ク語法と願望表現「欲ル」「欲シ」
「万葉集における希求表現「欲」とク語法の関係」
第 274 回筑紫日本語研究会 2018 年 7 月於九州大学

第３章ク語法形容詞＋「ニ」と準体句形容詞＋「ニ」
「ク語法形容詞＋「ニ」と準体句形容詞＋「ニ」」
平成 30 年度筑紫日本語研究会 2018 年 8 月於九重

第４章助動詞「ケリ」のク語法について
第 255 回筑紫日本語研究会 2014 年 6 月於九州大学

本論文を執筆するにあたって多くの方のご助力を賜った。慎んで謝辞を述べたい。現京都大学准教授の佐野宏先生には福岡大学在任時の頃から稿者の指導教授として多くの学恩を賜った。先生の講義は学部の頃より極めて難解で同輩の間でも苦労した思い出として語られることが多い。しかし、同時に学問の深淵と楽しさを教わったのも先生の講義からである。先生がいなければ稿者が研究の道に進むことはなかったし、本論文が執筆されることもなかった。先生の学徳には全く遠く及ばないが、今後も人生の目標としていきたい。福岡大学人文学部教授の山縣浩先生には学部の頃よりお世話になってきた。先生の緻密で丹念な研究手法からは多くのことを学んだ。その学んだことがどれだけ本論文の中で活かしきれているか甚だ心もとないが、本論文が少しでもよいものとして整っているのならそれは先生のおかげである。また、研究以外にも常に気遣っていただき稿者が研究を進める上で大きな支えとなった。同じく、福岡大学人文学部教授の江口正先生と福岡大学人文学部准教授の衣畑智秀先生にもたいへんお世話になった。お二人には厳しくも暖かいコメントをいただき、それによって本研究が受けた示唆はたいへん大きい。

また、現弘前大学講師の川瀬卓さんには頻繁に勉強会に呼んでいただいたり、研究の手法を教えていただいたり、よき先輩として多くのご助力をいただいた。その他にも、福岡大学の他の先生方、院生の皆さんにも分野の枠を越えて多くの意見をいただいた。加えて、筑紫日本語研究会の方々にも拙い発表を清聴していただきコメントをいただいたことは稿者にとってたいへん貴重な経験であった。

そして、本研究が家族からの支援によってなされた部分も大きかった。本論文の執筆を以て我が母の恩幸に報いたい。

こうして振り返ると、本研究が決して稿者一人の力でなったわけではないことを大いに痛感させられる。改めて、全ての方に深く感謝を申し上げる。